*0010732000*

0010732-000

319.122-I645s

# 支那を屈するには

石丸藤太・著

偕成社

1937

ABJ

贈呈

# はにるす屈を那支

石丸藤太著

偕成社版

東京都千代田區丸ノ内二ノ八(神十二号館六階西一二室)
芳澤中國記念事業財團
電話(28)四一〇八番

319.122
I645A

国立国会
35.10.31
図書館

533110

# 巻頭に

矢は弦をはなれた、戰ひは今やまさに酣である。

ことこゝに至つた以上、支那を徹底的に庸懲してかれ等の反省を促さねばならぬ。排日侮日を根絶して、眞に日支提携の基礎をうち立てねばならない。この目的が達成されざる限り、われ〳〵は斷じて干戈を收むべきものではない。

然らば如何にして支那を徹底的に庸懲するか？　排日侮日を根絶する方策如何、日支事變を楔機として、眞に日支提携の基礎を固むるには如何にすべきか？　日支の當面する問題の核心は、これ等の諸問題にありといふも決して過言でない。

しかるに竊に怪しむ、この事變に關する著作は、汗牛充棟と評しうるほど多數に上つてゐるが、如上の核心に觸れるものゝないのは何故であるか？　これをわが賢明なる當局者に一任するのも一つの方法であらふ。しかしながら國を思ふものは、個々の腦漿を絞つてかれ等に助力

するところがなければならない。

一方支那側を見よ、西安事件で己れの生命と共産主義を取引した蔣介石は、金で抗日人民戰線を買上げ、今や空嘯いて放言しつゝある。

かれはいふ——

日本の空襲は恐るゝに足らない。空襲は戰爭の勝敗を決するものではない。

上海でことを起せば、列國の對日干渉をひき起すに拵へ向である。日本人はわれ〳〵の民にかゝつたのだ。

まかりちがへば奥へ〳〵へと退却しよう。支那は國は廣くわれ〳〵の軍隊は粗食に甘んじうる。日本軍を奥へ〳〵と引きずりこみ、共產軍を放つてかれ等の後方連絡線を攪亂し、パルチザン戰術を行へば日本はへこたれる。これを二年も三年を續けたなら、日本人は奔命に疲れて、遂にはナポレオンのモスクワ遠征の失敗を繰返すであらふ。

われ〳〵には勝算がある。

と、これが蔣介石の作戰計畫であり、支那人一般の考へである。





蔣介石のこの考へは果して眞理を含むか、それとも一片の妄想に過ぎないか。わが戰爭目的を達するためには、これは兵學上より嚴密に檢討されねばならない。

次に起る問題は英・米・露の動向である。ソ聯は支那に如何なる援助を與へ得るか、英國の對日干渉は恐るべきか、米國はどう動くか？　そも〳〵亦日支事變は第二の世界戰爭となり得る可能性があるか？

これ等諸問題に對して考察と批判を加へ、わが戰爭目的の達成に一臂をそへんとするのが本書である

わが日本は、未だ嘗てみだりに兵を用ひたことはない　自衛上己むを得ずして起つのがわが傳統の誇りである。今次の日支事變に於ても、われは隱忍を重ね、忍ぶ可らざるを忍んで遂に立ち上つた。この點はわが日本人はもとより、外國人にも篤と認識せしめねばならない。著者が本書第四篇に於て、この傳統の誇りを歷史的に述べたのは、かゝる趣旨に基くもので、これによつて皇軍の武威は、更に一段の光彩を添へるものと著者は信じて疑はない。

昭和十二年八月下旬

南京空爆の上海電報を讀みつゝ

著者識す





# 目次


卷頭に……一

第一篇　排日から抗日戰へ……一

一　一觸卽發の日支關係……五

(1)　日本の强味……五

號外〳〵—外人の支那觀—政府と國軍の見上げた態度—これこそ日本の勝味……六

(2)　北支の特殊地位……六

北支事變の起因—塘沽協定—梅津何應欽協定—土肥原秦德純協定—冀察政權—冀察政權の中央化工作—滿洲國を遷せ—日本の眞意

二　北支事變の突發……三

(1)　抗日に燃える二十九軍……三

完哲元と蕭振瀛—二十九軍—馮玉祥と排日—侮日行爲の頻發　二
(2)　北支事變の突發……一七
蘆溝橋事件—支那軍の不信—日本側の要求—計畫的抗日行爲
(3)　日本の斷乎たる決意……一九
北支派兵聲明—冀察側の解決遲延主義—中央軍の北方集中—九國條約發動要請—期限付約諾實行催促—南京政府に對する日本の覺書—南京政府の全面的拒否
(4)　蔣介石の聲明……二三
日支全面的開戰も已むを得ず—支邦從來の外交方針—蘆溝橋事件は支那の生存に關する問題—南京政府の根本方策—興奮の末の戰爭呼ばわり—みだりに戰爭を說くもの—聲明は宣戰布告文
(5)　北支より南京へ……三〇
勸忍袋の緖を切つた日本軍—冀察首腦部の停戰懇願—局地細目協定—期限付約諾履行催促—北平城外の戰鬪—天津方面の戰況—通州保安隊の叛亂—北支事變の重點推移—冀察より南京へ
(6)　第二上海事變の突發……三六



抗日侮日ます〳〵露骨となる—中南支居留民を引揚ぐ—大山中尉射殺事件—共同租界委員會開かる—支那側の拒絕—遂に日支交戰—支那側の盲目的爆擊—日本の斷乎たる聲明

## 三　北支を挾んで……四一

(1)　南京側からみた北支問題……四一
蔣氏の國內統一工作—先づ北支を中央へ—群雄割據—共產軍の討伐—西南問題の解決—西安事件—冀察中央化へ—大公報の所論—胡適の論文—三中全會議の議決
(2)　日本と北支問題……四八
わが對外國策の基調—廣田三原則—日支交涉中の日本の要求—各問題の關聯—北支が重視さるゝ理由—日本に領土的野心なし—支那側の無理解

## 四　排日から抗日戰へ……五六

(1)　排日から抗日へ……五六
支那に於ける排日—對日ボイコット—滿洲事變—一面抵抗一面交涉—抗日へ轉換—北支增兵と密輸問題—廣西問題
(2)　抗日と共產系……六一

中國民族武裝自衞委員會—對日作戰綱領—西安事件で容共—共產軍の抗日決戰—共產黨の建言
(3) 抗日から抗戰へ……六七
支那人の傲語—抗日戰の宣言—北支事變直後の抗戰宣言　支那人の自己陶醉—日本に對する認識不足—ソ聯の軍備を買被る—英米の對支經濟援助—支那崩壞の危險

## 第二篇　支那を屈するには……七七

### 一　支那の狙ふところは？……七九
(1) 三つの目的……八二
中央軍の北上—南京政府の對策—三つの目的
(2) 雜軍一掃の姦計……八九
蔣氏の雜軍整理法—十九路軍—舊東北軍—蔣氏の聲明—眞に日本と戰ふなら—孫子の戰法

### 二　支那は單獨で日本と戰ひ得るか？……九〇
(1) 支那の陸軍と素質……九〇
支那の陸軍兵力—支那軍の素質—師團長は二年か三年で交迭—山西軍—廣西軍
(2) 支那軍隊の武裝……九四
新式武裝の奉天軍—蔣氏直屬の中央軍—武器の輸入—支那の兵工廠
(3) 支那の空軍……九七
航空三年計畫—現在の空軍勢力—支那人の操縱者—民間航空—日本に對する空襲
(4) 國防資源の現況……九九
支那の財政狀態—重要資源—戰時軍費—支那は長期の戰爭をなし得ない

### 三　支那の作戰計畫を檢討する……一〇五
(1) 北支方面の支那軍……一〇五
平漢線方面—津浦線方面—共產軍のゲラリ戰
(2) 支那の防禦線……一〇八
支那の對日作戰計畫—北方よりの對日防禦線—東方よりの對日防禦線—支那空軍の配備
(3) 支那側の對日戰略……一一一

「文稿」の對日作戰論—支那の對日戰略—消極的攻勢防禦—ロシヤの對奈翁戰略—支那作戰計畫の根本思想

四　支那を屈するには……一二〇

(1)　日本は支那を征服し得ない—徐道隣の所論……一二〇

日本は正面側背面に敵をもつ—短期間内に支那を征服するを要す—支那に對する封鎖—財政經濟上からは—支那征服に要する兵力—首都の占領は戰爭の終結とならない

(2)　支那人の妄想……一二六

制限的戰爭と無制限的戰爭—その實例—制限的戰爭を行ひ得る場合—支那に對しては制限的戰爭が有利—その理由—徐氏の意見は生兵法—制限的戰爭は經濟的—長期抗戰は支那に不利

第三篇　英米露の動向……一三五

一　日支事變は世界戰爭になり得るか？……一三七

(1)　スペイン内亂は歐洲大戰にはならない……一三七

世界戰爭の起る場合—スペイン内亂は歐洲大戰にならない—左右兩翼の爭い—フランコ將軍叛旗を翻へす—國際合戰へ展開—歐洲に於けるスペイン—スペインを繞る歐洲列强の角逐—ファッショ對社會主義デモクラシー—困り拔いた列國

(2)　日支事變は世界戰爭にはならない……一四五

二つの教訓—戰爭範圍の局限—思想鬪爭は戰爭にはならない—支那の抗日人民戰線と英米—英米とソ聯—英米露恐るゝに足らず

二　ソ聯恃むに足らず……一五〇

(1)　ソ聯は如何なる援助を支那に與へ得るか……一五〇

苦しまぎれの彌縫策—支那ソ聯との接近を圖る—ソ聯のとり得る三つの態度—ソ聯は日本と戰つて勝てるか—ソ聯の產業計畫—產業計畫の狙ふところは？—ソ聯の軍備擴張—赤軍の狙ふところは？—積極的攻勢作戰—日獨協定の効果

(2)　ソ聯は日本と戰はない……一五八

反革命陰謀事件—赤軍八巨頭は赤軍の生みの親—八巨頭銃殺の眞理由—統帥權の單一化—スターリン政權との衝突—銃殺事件の影響—スターリン政權に及ぼす影響—赤軍に及ぼす影響—外國に對する影響—ソ聯は日本と戰はない

(3)　ソ聯の狙ふところは抗日人民戰線……一六九

ソ聯の中立は假裝—抗日人民戰爭への援助—コミンテルンの正體—第七回大會の決議—國共の合作—共產軍の狙ふところは？ —支那はソ聯の援助を期待 …… 七五

(4) 抗日人民戰線と日獨協定 …… 八三

日獨協定の主旨—協定の內容—日獨協定は同盟條約でない—日獨協定と英佛公文交換—事實問題としては—ロシヤの行動と日獨協定—ソ支提携は獅子身中の虫

三 英國はどう動くか …… 一八三

(1) 英國は戰爭を好まない …… 一八三

英の政策は現狀維持と戰爭回避—その理由—英國と集團的平和機構—戰爭範圍の局限と中立政策

(2) 支那を挾む日英露の對立 …… 一八六

支那に於ける英國の利權—英大使の演說—英支親善—英國の對日邪推—英の對支活動が經濟的である限りは日英衝突しない—英の對支活動を過大視する必要はない—英ソの對日關係—英ソ親善—英は日ソ戰爭を望まない

(3) 日支事變と英國 …… 一九四

英外相の演說—九國條約發動反對—英國米國の袖を引く—米國拒絕—英佛米獨自の申入れ—倫敦タイムス紙の所論—英國の上海中立地帶案—日本は第三國の干涉拒絕 …… 二〇三

四 消極的な米國 …… 二〇三

(1) 金持喧嘩せず …… 二〇三

ルーズベルト政府の極東政策—米の孤立政策—米國の中立法—對支經濟的活動—米國對支貿易の躍進

(2) 日支事變と米國 …… 二〇八

ハル長官の聲明—聲明の趣旨—九國條約發動拒否—ヒットマンの聲明—中立法を適用せざる理由—米國の消極的不干涉主義—支那よ反省せよ

第四篇 傳統の誇り …… 二二七

一 戰爭に勝つには (一) …… 二二九

(1) 戰はずして勝つ …… 二二九

如何にして勝つか〻先決問題—東西の兵家を比較する—戰はずして勝つ—勝兵と敗兵—戰はずして勝つた英國—ビスマークの謀略—クラウゼウキッツの殲滅戰爭—川中島の合戰—外交と軍備

(2) 先づ我が不利なる國際環境を打開せよ……二三〇
外交を說かない偏武論—日本は包圍されてゐる—日本の眞の姿を認識せよ—對日包圍陣を指導する英國—今日の日本は滿洲事變當時よりも困難な立場にある—英米の干渉—太平洋戰爭が起つたら歐洲大戰起るか—勝つて兜の緒をしめよ—外交を輕視するな

二　戰爭に勝つには（二）……二四〇
(1) 正義の爲に戰ふ……二四〇
東西兵家の思想を比較する—已むを得ずして戰ふ—孫子の五事七計—正義の軍が戰勝の第一要件
(2) 日本は正義の擁護者……二四四
正義の軍とは何か？—ルーズベルトの言—日本が軍備を有するのは—東亞の安定が害せらるゝ場合—日本は東亞安定の爲に戰ふ

三　日本は正義の爲に戰ふ（一）……二四九
(1) 東亞安定の爲に戰つた日淸戰爭……二四九
日本の外患—東亞安定の爲に支那と提携を策す—以夷制夷の支那—日淸戰爭の眞因
(2) 朝鮮を繞りて……二五一
陸奥外相の決心—軍首腦部の同意—袁世凱の糸を引くカシニー—ロシヤは何故に支那に好意をよせたか—日本に對するロシヤの撤兵勸告—イギリスの居中調停—遂に開戰

四　日本は正義の爲に戰ふ（二）……二六〇
(1) 日露戰爭直前に於ける朝鮮出兵問題……二六〇
海軍首腦部の意見—淸韓兩國に對する大方針—附加された朝鮮出兵の一項—山本海相の小村外相訪問—元老會議に於ける山縣公の發言—山縣山本の一騎打ち—大山參謀總長の意見を問ふ—山縣公含む—伊藤公の斡旋—山縣公我を折る
(2) 明治大帝の聖斷……二七五
三回の御前會議—伊藤公と山本伯の會談—伊藤公怒る—伊藤公山本伯を詰問—伊藤公の腹わかる—第二回御前會議開かる—閣僚元老の陳述—今一度催促してみよ—明治大帝の御精勵
(3) いよ〳〵日露國交斷絕……二八六
旅順艦隊出動の電報—海軍首腦部の決心—伊藤公突如山本海相を訪ふ—山本海相の情況判斷—第三回御前會議開かる—山本海相の陳述—日露國交斷絕裁可—海陸軍首腦部會議

—大海令第一號

(4) 廟議決するまでは沈默……二九五

山本海相沈默を守る—やるならやるとはつきり云つてくれ—日進春日購入の交渉—齋藤次官病中の藏相と强會見—曾根藏相の逆襲—それは難かしい！ —先づ日銀正金を檢べろ—林駐英公使怒る—二艦いよ〳〵購入—お前鎭守府を廻つて來い—英國大使海軍省に日參—ウッド大佐してやらる—千代田艦長からの問合せ—何度來ても返事を出さぬ

(5) 喜々たる開戰論……三〇六

上泉將軍の想出話—軍令部副官となる—紅葉館で陸海軍意思疏通會—伊藤軍令部長の御馳走—山本海相から烟たがれる—舞鶴で開戰論—東郷大將の寬容—陸軍の帷幄上奏に抗議—軍令部次長から小言—田村參謀次長怒る—福島中佐の主戰論—伊知地を說破しろ—伊集院次長の態度—金生館事件—山本海相の態度—八代艦長との祕密計畫—部長集れ

(6) 金子伯の渡米……三一〇

伊藤公金子伯を呼ぶ—急にアメリカにいつてもらひたい—金子伯驚く—米國を日本に引きつけよ—金子伯渡米を斷る—陛下の御諚で伊藤は日本を離れられぬ—成功不成功などは眼中にない—萬一の場合には伊藤は士卒となつて戰ふ—金子伯米國行を承諾—金子伯桂首相を訪ふ—肩書などはいらぬ—金子伯小村外相と會見—金子伯陸海主腦部を訪ふ—





陸軍は四分六海軍は敵艦隊を全滅—金子伯の成功

五 日本は正義の爲に戰ふ（三）……三四六

(1) 日本の對獨宣戰……三四六

開戰論と非戰論—八月四日の帝國政府聲明—英國日本に援助を申こむ—八月七日の臨時閣議—加藤外相參戰論を主唱—閣議參戰に決す—英國に對して申入れ—英國日本の對獨宣戰を好まず—日本政府の反駁—英國更に戰局の制限を提議す—日本は一方的に解決—日英見解の相違點依然として殘る—獨人の日本に對する感情—第一第二第三期—船舶大使最後通牒を手交—非常に遺憾—極東課長獨逸政府の回答を齎らす—日獨國交斷絕

(2) この教訓を見よ……三六四

日清日露戰爭と對獨戰爭—對獨宣戰に關する日本の態度を批判するには—三つの策—歸するところは東洋平和の維持—對獨開戰は正義の戰ひ—支那の領土保全—獨逸の惡辣なる手段—三國干涉の怨み—日本の對英追從外交—英國を買被る—英國を正解せよ—參戰を急いだのは誤り—日本もし參戰の時機を選んだなら

# 第一篇

## 排日から抗日へ戰


1 一 觸即發の日支關係
(1) 日本の強味
(2) 北支の特殊地位

2 北支事變の突發
(1) 抗日に燃える二十九軍
(2) 北支事變の突發
(3) 日本の斷乎たる決意
(4) 蔣介石の聲明
(5) 北支より南京へ
(6) 第二上海事變の突發

4 北支を挾んで南京側から見た北支問題
(1) 南京側から見た北支問題
(2) 日本と北支問題

3 排日から抗日へ戰
(1) 排日から抗日へ
(2) 抗日と共産系へ
(3) 抗日から抗戰へ




# 第五篇　日支提携へ


一 支那に警告する……三七七
——ペッファーの所論——……三七九
支那の恐るべきは支那自身—支那は對日戰爭を望んでゐる—日支交渉後日本は自制した—支那は自分の力を過信してゐる—先づソ聯と衝突して負けた—滿洲でも早まつた—日本は軍備充實を待つてゐる—支那は日本と戰ひ得ない—先づ國力を充實せよ

二 戰ふは日支提携のため……三九〇
(1) 支那は今や自覺のとき……三九〇
國家主權の完整を要求するのみが能でない—相互依據の義務も大切—アジヤ人のアジヤへ—王者の政治—滿洲國の獨立と北支の特殊地位…對外硬の憐むべき結果—默して準備せよ
(2) 戰ふは日支提携のため……三九五
獨佛關係か普墺關係か—比公の深謀遠慮—比公泣いて普王を諫む—皇太子の同情—普魯西遂に佛を破る—この史話を三省せよ—近衛首相の言—日支事變を無意義ならしむる勿れ

# 一　一觸卽發の日支關係

## (1)　日本の强味

「號外〳〵、北平郊外で日支兩軍衝突！」

七月九日の正午頃、勇ましい號外賣りの掛け聲にゆり動かされた東京市民は、强いショックにでも打たれたやうに、足をとゞめて西の空をながめた。多くの人達には、この飛報はまことに靑天の霹靂であつたのだ。

だが支那の情勢に甚深の注意を拂つてゐた人達には、それは寧ろ豫期されたことであつた。支那人の悔日が日一日と高まつてくる以上、流石の日本人も、遂には勘忍袋の緖を切る日が遲かれ早かれ來るであらうことは、已むを得ない形勢であつたからだ。

このことは外國人も認めてゐた。例へば「われ〳〵はアジヤに於て戰はねばならぬか？」

(Must we fight in Asia?—Nathaniel Peffer) の著者米人ナザニエル・ペッファーなどは、六月號の「アジヤ」(The Asia) 誌上に、

「この頃の支那人は、自分等の力を過信して已惚れになつてゐる。滿洲事變は忘れたのか、日本與みし易しと考へて增長すると、第二第三の滿洲を日本にとられてしもうぞ」

と警告し、アメリカの東洋通ハレット・アベンド (Ha'ett Abend) も亦六月二十日の紐育タイムス紙上に、略ぼ同樣のことを書いてゐる。利害關係の比較的に少い外國人でもそうだ。況んや日本人に於てをやだ。北支事變が起るのは寧ろ當然であつた。

來るべきものが遂に來たのだ！

日本は遂に立ち上つた、東洋平和のために已むを得ず劍を拔いたのだ。それは支那の領土を奪ひ、わが優越感を恣にせんが爲ではない。血迷つた支那人が自己の實力を過信し、東亞の安定勢力たる日本に挑戰して來たので、支那人を覺醒させ、日支提携して眞に東洋平和の守護神となるよう、正義の劍を拔いたのだ。

それにしても、今度の事變に對するわが政府と國軍の態度は、なんといふ見上げたものであらう。內にあつては國論を統一して和戰兩樣の準備をとゝのへ、外に對しては、事件の不擴大と支那側の反省による事態の和平解決を望み、支那側にして反省せず、却て挑戰し來るに於ては、已むを得ず正義の劍を拔いてこれを膺懲するといふ政府の大決心の下に、國軍は涙ぐましきまでに自制を加へてゐる。まことに正々堂々の態度でないか。これを不信を茶飯事と心得、遮二無二日本と戰ふのみが、國家の大をなす所以の途だと考へる支那政府及支那人と比較すれば、雲泥の差があるではないか。

この日本の公明正大、正々堂々の態度こそ、三略にいふところの

「聖王の兵を用ふるは、これを樂しむに非るなり。將に以て暴を誅し亂を打たむとするなり。夫れ兵は不祥の器なり、天道これを惡む。已むを得ずしてこれを用ふ、これ天道なり」

の名言そつくりである。

われ〳〵は、この正々堂々の態度を、日淸、日露、日獨の場合にもとつた。この傳統の誇りを、今まさに北支事變にも踏襲しつゝあるのだ。

こゝに日本の勝味がある。

## (2) 北支の特殊地位

さて然らば、この事變の起因は何か？

これを知るには、先づ北支に於ける日・滿・支三國の關係を說かねばならぬ。こゝに北支といふのは、一般に河北省を中心として、これに察哈爾省を加へたものである。

滿洲國は、わが國が國際聯盟を脫退してまで、これを守り立てゝきた友邦である。これを健全に發達さすことはわれ〳〵の使命であり、從つてわが國策の一つともなつてゐる。

然るに支那は、滿洲事變の直後、これを奪回しようとして、義勇軍や匪賊を操縱しながら滿洲國の攪亂を企てた。そこでわが軍は禍根を除くために進んで熱河を奪ひ、長城をのりこへて北支へと進んで行つた。そして昭和八年（一九三三年）の五月には、所謂塘沽協定が結ばれ、これによつて河北省の一部は非武裝地帶となり、日・滿・支三國間の緩衝地帶となつて、爾來支那側は手を出し得ぬことになつた。

〔註〕 塘沽停戰協定の主なる內容は、(1)延慶、昌平、商麗營、順義、通州、香河、寶抵、寧河、蘆台を





結ぶ線と長城線との中間地區を非武裝地帶とす。(2)支那は同線を越へて前進せず、又一切の攪亂行爲をせぬこと、を誓言したものである。

然るに支那側は又も反滿抗日の擧に出た。そして匪賊を煽動して非武裝地帶內を荒したり、惡質な排日事件が續出したりしたので、一九三五年の五月の終りには、日本軍はまさに長城をこへて進出せんとする態度を示した。酒井天津軍參謀長は、何應欽に最後通諜をつきつけたところ、支那側は折れて　河北省內には、中央軍は勿論、國民黨の黨部や藍衣社、祕密機關等一切の排日機關を入れぬこと、國民政府は全國に對し、排日排外を禁ずる命令を出すことになつて、一應けりがついた。これが所謂梅津、何應欽協定である。

この間熱河省と察哈爾省の境上では、所謂張北事件などが起つた。これはわが支那駐屯軍の將校及關東軍の職員に對して加へられた侮辱事件である。わが方はこれに抗議した末、六月二十三日土肥原少將と察哈省主席代理秦德純との間に取極めが行はれ、停戰區域を幾分擴大することにして、北支の事態をとも角も調整することになつた。

〔註〕 梅津何應欽協定とは (1)河北省主席于學忠、憲兵第三團長蔣孝先の罷免 (2)憲兵第三團並に軍事

分會政治訓練處を北支より撤退する　(3)河北省內の黨部撤退　(4)第五十一軍の河北省外へ撤退　(5)中央軍二ヶ師團の河北省外移駐　(6)日支國交を害する祕密機關の存在を許さず　(7)國民政府は排外排日を禁ずる命令を出す。

〔註〕土肥原秦德純協定とは　(1)宋哲元は察哈爾省主席並に第二十九軍長の職を退く　(2)第百三十二師を陽高に移駐す　(3)今後察哈爾省內に於て排日を行はざることを保障し、排日團體の組織を禁じ、國民黨を解散す　(4)停戰區域を擴大し、沽源、獨石口、懷來、延慶の線までを停戰區域とし、同地域內に駐兵を禁ず。

以上が所謂北支の明朗化と呼ばるゝものである。然るに南京政府側は、塘沽協定は承認するが、梅津・何應欽協定は、政府と政府で決めたものでないから承認出來ないといふ。つまり何應欽が一芝居打つた形である。それだから支那人との交渉は面倒になるのである。

その間に北支の安定を求める住民は自治運動を起し、その要望によつて、同年十一月には、殷汝耕の冀東政權が出來、又北支治安の責任者たる宋哲元は返へり咲いて、同年末河北・察哈爾の二省を一丸とする半獨立政權を樹立した。これが問題の冀察政權である。



この冀察政權は、約八萬の二十九軍を背景とするもので、南京政府は、形式的にはこれに軍事、外交、財政等に關する廣汎なる權限を與へ、半獨立の政治形態をとることを認めたものである。

然るに冀察政權は一種微妙の立場におかれてゐた。それは發展的形態をとる日本の大陸政策と、統一過程を進行しつゝある南京政權の板挾みとなつて、微妙な交錯の下におかれてゐたのである。同政權の內部が絕へず動搖するのは、この相剋のためで、かゝる相剋がある限り、北支の明朗化は期待することは出來ない。

そこに事態をます〳〵紛糾させたのは、南京政府の執拗なる中央化運動である。

蔣介石が遠く共匪を邊境に追ひやり、西南派も亦蔣氏の威令に服し、支那の國內統一がだん〳〵に完成してくると、その觸手は當然に冀察政權にまでも及んできた。況んや西南事件の成功的解決以後は、民族主義、國家主義は全支那を風靡し、これが又國內の統一に拍車をかけて、中央の勢力はいちじるしく北支へと加はつてきた。

この中央化の鋒先は、先づ冀察政權の外交權制限となつて現はれた。卽ち昨年秋には、南京

政府は同政權から對日外交權を奪ふ法令を出して、日本との經濟合作を妨げ、又親日派の要人を追ひ出し、宋哲元を懐柔して、同政權の存在を骨拔きにしようとした。

これより先き、北支に於ては一部分の日支經濟提携の議が冀察當局と日本との間に進められ、これによつて北支經濟開發の計畫が出來てゐたのである。然るに南京政府は、これを以て日本の經濟的侵略と呼號し、百方手段を盡してこれを妨害した。宋哲元が今度の事變直前、鄕里山東に引籠つたのは、自己の立場を失つたからである。

ことに昨年の暮から今年の始めにかけて開かれた日支交渉が決裂に終つたのと、日本ではいろ〳〵な國内事件まで起ると、『日本與みし易し』と考へた南京政府は、急に日本を悔り出し、ます〳〵手段を露骨にして、冀察の中央化と日本勢力の驅逐を圖つた。

こうなつては、支那側がまた〳〵滿洲國へと毒牙を向けることは明らかである。すでに支那人の一部には、一旦あきらめた滿洲國奪還の意見が再び眞面目に論議され、

「先づ滿洲國を返せ、然らざれば日支國交の調節は永久に不可能なり」

とのとんでもない意見さへ現はれてゐるのである。況んや冀察の積極的中央化は、北支に於ける日・滿・支の經濟提携をも水泡に歸し、その結果は極めて重大となる。

勿論日本は何も北支の領土を狙ふものではない。只だ滿洲國の健全なる發達と北支に於ける日・滿・支の經濟的提携を望むもので、それは極めて合理な要求である。この合理な要求までも南京政府は阻害しようとするのみか、日本與みし易しと考へた南京政府は、一戰敢て辭せずと揚言しつゝ、ます〳〵侮日の行動を露骨にしてきたのである。

この目にあまる南京政府及びこれを背景とする支那人の態度に、日本は一大決心を餘儀なくされてゐた。蘆溝橋事件が起るのは寧ろ當然である。

## 二　北支事變の突發

### (1)　抗日に燃える二十九軍

南京政府の觸手が、冀察政權の中に喰ひこめばこむほど、冀察と日本との摩擦は烈しくなつた。

冀察政權の中心人物は宋哲元である。故にさきの冀察政權は宋哲元一派の政權であるが、宋に該政權を握らせたのは、一時は宋の智囊とまで謳はれた蕭振瀛である。

大正十四年から起つた奉國戰で、馮玉祥の率ふる國民軍は、一時は極めて羽振りがよかつたが、次で奉天軍が盛り返し、北方軍閥各派の討赤聯合軍まで起つて、馮軍を擊破すると、馮は手兵を率ひて陝西、甘肅方面に逃れた。その後昭和三年北伐軍の北上とともに、馮も再び勢ひを盛返して北平まで進出したが、蔣介石と戰つて敗れてからは、その部下は支離滅裂した。





馮の部下にあつた宋哲元も亦お多分にもれず、手兵僅かに二三千人となつて落武者の悲哀を感じてゐた。そこに飄然やつて來たのが蕭振瀛である。

蕭は辯舌に巧みな蘇秦張儀流の人物である。彼は宋哲元を口說いて彼のために一肌脫ぐことなり、當時北支と中南支に據つて南北に相對峙してゐた蔣介石と張學良を巧みに繰つり、蔣には主として金を出させ、張には蔣から買收に來るから、何とかしなければならぬと脅かしながら、宋の兵力を增加して陣容を建直し、三師團の雜兵を擁する二十九軍をつくりあげ、宋哲元を祭り上げて察哈爾省主席につかしめた。

宋としてみれば、蕭は冀察政權を今日あらしめた恩人であるから、蕭に對しては頭は上らない。然るに蕭は元來づう〳〵しく出來てゐるから、隨分思ひきつて惡辣なことをやる。そして天津市長となつてから、同地で最も不信用な河北省銀行から、不換紙幣一億元發行の計畫を立てたので、遂に天津市長を追はれて、今度は南京に至り、相變らずいろ〳〵な策謀をつゞけてゐる。

冀察の最高機關としては、表面上は冀察政務委員會があるが、實權は二十九軍の手で握つて

ゐる。

この二十九軍の大部は、支那のドン・キホーテと呼ばるゝ馮玉祥の舊部下で、察哈爾あたりの蒙古邊界をうろつき廻わり、滿洲事變後は暫らく熱河省境の長城線外、察哈爾省の張家口の守備に任じてゐた。この頃から、ともすれば日本軍を輕侮し、しば〳〵不法行爲をしてわが軍を惱ましたので、その都度わが軍のためにひどいめにあわされた札つきの軍隊である。

二十九軍の主力は、宋哲元の下にある馮治安、張自忠、劉汝明、趙登萬の四ケ師であり、その外に獨立二旅並に騎兵一師一旅といふ編成である。その總兵力は約八萬といはれ、裝備はチエッコその他から購入の新兵器を有し、就中馮治安と張自忠の師團が兵數も充實し武器も精鋭である。

右の中で馮治安と張自忠は一派をなし、この派は宋を擁護するとゝもに、反日的である。劉汝明と趙登萬は宋とは親善だがそれほど服從せず、日本に對しても馮ほどに反對でない。

前にも說いたように、二十九軍の軍隊中には、舊馮玉祥系の連中の部下が相當に入りこんでゐるために、內容は次第に複雜を加へてきた。宋哲元はどちらかといへば馮の人物を信用せず、





寧ろ敬遠主義をとつてゐるが、その部下に馮の系統を引いたものがゐるために、これを無視し得なくなつた。馮玉祥の今日の立場は、聯ソ派であるとともに抗日派であり、中央服從である。ゆへに宋は半獨立の態度をとりつゝも、中央に對しては明らかに態度を表明し得ない。しかし次第に中央擁護の色彩を濃厚にしてきたことは何としても爭はれない。

一方文治派の方はどうかと見るに、殆んど人物がゐない。例へば蕭振瀛は既に北支を追はれてゐる。殘るは北平市長の秦德純と西南派に屬する陣中孚だけである。この貧弱なる文治派では手も足も出ない。

かように二十九軍の大部は舊馮玉祥系の軍隊であるが、馮の軍隊は支那で排日の最も徹底したものであるだけに、二十九軍と日本との關係もよくない。

馮は毎朝廣場に軍隊を集め、メガホンを持ちながら壇上に立つて、大きな聲で

「打倒日本帝國主義」

を叫ぶと、部下の兵隊が一齊に之を眞似る。次で兵隊に着劍させ、廣場の向ふに列べてある標的に向ひ突擊させる。この標的は日本兵に模したものである。

かうして排日教育を根強く植付けられてゐるから、日本との間には問題が絶へない。それのみか馮は、幾度か密使を二十九軍に送つてこれを懐柔したので、二十九軍の中堅層には抗日の意識が燃へ上つてゐた。ことに昨年暮の綏遠事件で、傅作儀等の綏遠軍が、民族の英雄として祭り上げられると、二十九軍の中堅層は、われこそ抗日の第一線軍なりと自負して、ます〳〵抗日の氣勢をあげた。

その結果昨年の六月には豐臺に於ける二十九軍兵士のわが將校に對する侮辱事件が起つたが、宋哲元の陳謝によつてことなきを得た。然るに九月十八日には、またもや豐臺駐屯のわが部隊に對して、二十九軍の一部が挑戰的態度をとつたので、日本軍は直ちに支那兵營を包圍してまさに武力衝突に至らんとしたが、支那軍の撤退によつて漸く平和裏に問題の解決を見た。

かくて南京政府の抗日政策と冀察政權に對する中央化政策の結果は、支那全土を抗日で塗りつぶし、平津一帶に於ける學生インテリの抗日運動となり、二十九軍の對日挑戰行爲となつて、本年に入つてからでも、北支のみで日本人に對する五十餘件の不法事件が起つてゐる。例へば天津縣の日本人經營聖農園の襲擊、大連沖の日本漁船に對する不法射撃、察北六縣の攪亂計畫





などはその主なるもので、まさの滿洲事變直前の日支關係そつくりである。

そこに今回の北支事變は起つた。

## (2) 北支事變の突發

北平の西南郊外にある豐臺駐屯のわが部隊の一中隊は、條約上の權利に基き、豫め支那側に通告して、蘆溝橋北方附近で夜間演習中、七月七日午後十一時四十分頃突如支那部隊から射撃をうけた。よつて同中隊は支那側に對して事實の承認と謝罪を求めたところ、支那軍はわが要求に應ぜざるのみか、却つて龍王廟附近よりわが軍に向つて射撃を加へたので、わが部隊は自衛上これに應戰するとともに、事件不擴大の方針の下に、支那側と數次の交渉を重ねた。

その結果彼は九日午前二時に至り、兩軍の衝突をさけ、事態を圓滿に解決するため、同日午前五時を期し、蘆溝橋にある部隊の撤退を約した。然るに定刻に至るも撤退の模樣なきのみならず、寧ろ兵力を增加して、監視中のわが軍に對し、しば〳〵射撃を加へた。そこでわが軍は再び嚴重なる抗議を申込み、その結果九日午後零時十分に至り、永定河右岸に撤退した。

然るに翌十日には、永定河右岸の支那兵は依然わが監視部隊に射撃を加へ、第三十七師の主力は漸次に移動して八寶山附近に集結し、その一部は再度われを攻撃したので、わが第一線部隊は直ちに逆襲して多大の損害を加へ、これを撃退した。

爾來第一線は大なる衝突なく、互に對峙してゐたが、支那軍は永定河右岸高地附近に陣地を設備し、その兵力を增加する等、形勢は容易に緩和する模樣も見へない。加ふるに國民政府は、全國の飛行部隊に出動準備を命じ、又河南附近にある部隊に出動を命ずる等武力的準備を進むる一方では、わが軍が二十九軍に對して要求せる

(1) 責任者の謝罪

(2) 蘆溝橋附近永定河東岸に支那軍隊を駐屯せしめず、保安隊を以て治安を維持す

(3) 抗日團體の徹底的取締

等、極めて消極的なものに對してまで、これを拒否するに至つた。

さきに締結された梅津・何應欽協定では、各種排日團體並に中央軍は河北省内に存在を許されない。又排日策動は嚴禁されてゐる。然るにも拘らず支那側は該協定を蹂躙し、在留邦人に





幾多の暴行侮辱を與へ、その生命財産も危殆に瀕するに至つた。ことこゝに至つては、今次の事變は、支那側の武力を以てする計畫的抗日行爲であることは毫も疑をいれない。

さればかゝる排日侮日行爲を根絶し、將來再びかゝる行爲を繰返さゞるよう適當の保障を得、且北支の治安を恢復することは、日本にとつて目前の急務となつた。十一日北支派兵に關する廟議の決定を見たのはそのためである。

## (3) 日本の斷乎たる決意

わが政府は事態の重大に鑑み、十一日緊急閣議を開き、今回の事變に對する帝國政府の根本方針並に北支派兵を決定し、中外に對して次のように聲明した。

……思ふに北支治安の維持が、帝國及び滿洲國にとり緊急のことたるは、こゝに贅言を要せざるところにして、支那側が不法行爲は勿論、排日侮日行爲に對する謝罪をなし、及び今後かゝる行爲なからしむるための適當なる保障等をなすことは、東亞の平和維持上極めて緊要なり。仍て政府は本日の閣議に於て重大決意をなし、北支派兵に關し、政府としてとるべき

所要の措置をなすことに決せり。然れども東亞平和の維持は、帝國の常に願念するところなるを以て、政府は今後とも局面不擴大のため平和的折衝の望みを捨てず。支那側の速かなる反省によりて、事態の圓滿なる解決を希望す。又列國權益の保全に就ては、固より十分これを考慮せんとするものなり。

右の聲明にいふところの『局面不擴大のため平和的折衝の望みを捨てず』と述べたのは、今次事變に對するわが國の大方針の重點を示したもので、南京政府のやり方とは反對に、日本は何も戰ひを好むものに非ることを明白にしてゐる。しかしながら支那側にして反省せず、飽くまでも抗日政策の遂行を敢てするといふのであれば、わが國としては、先づ北支に於けるわが在留民の生命財產を保護し、併せて盟邦滿洲國の治安攪亂を目的とする一切の陰謀を掃蕩するため、わが實力を以て北支の治安を維持することは正に當然の措置である。北支派兵の已むを得ざる理由はこゝにある。

かくて十一日わが橋本北支駐屯軍參謀長と冀察政務委員張自忠との間に成立した前記三ヶ條の約諾につき、更に細目折衝が進められてゐたが、支那側は依然誠意ある態度を示さず、全面的に遷延主義をとるのみか、二十九軍は逆襲の情勢を示し、不法射擊を行つてしば〳〵わが軍兵を殺傷した。



一方南京政府は、『和平の希望を捨てず』と稱しながら、續々軍隊を北上せしめ、舊東北軍の萬福麟、馮占海、河南の商震軍を河北省の中部に集中し、その他の中央軍も續々と河北省及びその附近をさして集中されつゝある。かゝるは梅津・何應欽協定を破つたもので、日本としては堪へ難き侮辱である。しかも南京政府に對してこれを詰問すれば、梅津・何應欽協定は、南京政府が認めたものでないと强辯し、中央軍の北上は自衞のためだと逆襲する。況んや以夷制夷の支那側の傳統的政策は、英・米・露を引入れて日本に干涉せしめんとする企ても明白になつてきた。

これよりさき、支那は北支事變が起ると、國內の各機關を通じて、あらゆる宣傳を海外に放送し、又在外の使臣を通じて、英・米・佛・露の各政府に對し援助を求めてゐたが、その効果薄しとみるや、滿洲事變以來の奧の手を出し、九國條約を持ち出してその援用を要請した。

即ち十六日英・米・佛駐劄の支那大使は、本國政府の命をうけて、今回の北支事變に於ける

北支の現狀を說明し、蘆溝橋事件は北支侵略を狙ふ日本の隱謀であるから、九國條約並に聯盟規約に違反し、支那の主權を侵害するものである。支那はその領土と國家的名譽保全のためには、あらゆる手段をとらざるを得ないが、國際條約の規定せる如何なる平和的手段にも應ずる用意があるといつて、九國條約に基く關係各國の行動を起すべきことを要請した。

こゝに九國條約といふのは、ワシントン會議の際、日・英・米・支・佛・伊・白・和・葡の九國間に調印されたもので、支那の主權、獨立、及領土的行政的保全を尊重し、且支那に對する通商上の門戶開放、機會均等主義を樹立したものである。

然るに今回の北支事變の發生は、一九〇一年の義和團條約に基くわが駐兵權による北支駐屯軍に對し、支那側が不法射擊を加へて起つたものであるから、事變の性質上支那の主權並に領土權の侵害でない。從つて九國條約に抵觸するものではない。況んやわが政府は、事件の不擴大をはかるため、現地解決主義をとり、列國に對してもわが公正なる態度を說明してゐる。列國が支那の哀訴にとり合はぬのは勿論のことである。

しかしながら日本としては、支那側が依然として誠意ある解決に努力せず、却て兵力を集中





して挑戰的態度をとり、外國に對しては、以夷制夷の卑怯なる手段を弄する以上、いつまでも現地交涉の遲延を許さざる立場となつてきた。そこでわが政府は、十七日午後陸・海・外・內藏の五相會議を開き、十一日に結ばれた支那側約諾の實行に關し、二日間の期限を付して、冀察政務委員長宋哲元に通告するに決し、この旨香月（淸司）北支駐屯軍司令官に訓電した。

これと同時に、南京政府に對しては、わが代理大使の日高參事官は、十七日午後十一時半外交部長王寵惠を訪ひ、次の覺書を手交した。

帝國政府に於ては、本月十一日の聲明に於て明らかに傳へたる通り、あくまで不擴大の方針を堅持し、和平的折衝の望みを達すべく、隱忍自重、現地に於て解決に努力しつゝあるに拘らず、南京政府に於ては、挑戰的態度を持續してゐるのみならず、各種の手段と方法とを以て、冀察當局の解決條件を妨害し、北支の安定を脅威しつゝあるは、帝國政府の實に遺憾とするところで、このまゝ推移するに於ては、遂に重大不測なる事態の發生せざるなきを恐れる次第なり。中國政府の方針も亦事態の不擴大にあることは、王部長閣下の累次言明せられたるに鑑み、帝國政府は、中國政府に於て、眞にかくの如き希望を有せらるゝに於ては、

これが實現のために、有ゆる挑戰的言動を即時停止し、並に現地當局の解決條件實行を妨害するが如きことなきよう要請する。右に對し的確なる回答を至急要請す。

十八日午後一時宋哲元は香月司令官を訪ひ、約諾第一項の日本側に對する陳謝をなし、責任者の處罰、將來の保障、防共、排日取締の徹底等についても、最短期間内にこれを實施すべき旨を誓つたので、北支の情勢はやゝ緩和されたように感ぜられた。

然るに十九日に至り、南京政府外交部の董科長は、外交部長代理として、わが大使館に日高參事官を訪ひ、十七日わが政府より手交した重大通告に對する回答を覺書によつて提出し、本國政府に傳達されたいと申入れた。その内容は左の如きものである。

支那政府は、さきに聲明せる如く、事件不擴大の方針に變化なく、現在北上せしめつゝある軍隊は、日本軍隊の增加に對し、自衞的準備行動を進めて居るに過ぎない。政府としては、事態不擴大、和平解決の希望を堅持してゐるもので、同事件解決のため、左の方法を提議するものである。

(1)一定の期日を定め、同時に軍事的行動を停止する。又武裝部隊を原駐地に撤退せしめる。



(2)同事件につき、外交的方法により商議し、適當なる解決をしたい。もし地方的な性質のものであつて、現地で解決すべきものは、地方當局が中央政府の許可をうけること。尙中國政府としては、同事件解決につき、國際公法もしくは條約により、有ゆる紛爭解決の方法は、他日これを喜んで接受するものである。

この不誠意なる回答によつて、事態は急轉直下必迫した。

## (4) 蔣介石の聲明

一方南京政府の總帥たる蔣介石氏は、十九日に至り、次のような注目すべきステートメントを發表して、南京政府の態度を表明した。

右の聲明には

中國の犧牲の最後の問題は刻一刻に近づきつゝある。われ等は中國の主權を侵すものに對しては、斷じて一步も退かない。

といひ、

日本の態度如何によつては、日支の全面的開戰も已むを得ぬところである。

と述べ、對日根本方策を四項目に分ちて、次のように表明した。

蘆溝橋事件の發生は、全中國の民衆を憤激せしむるとともに、世界的關心を北支に集中せしめてゐる。この時に當つて、余は次の諸點を明らかにしたいと思ふ。

（第一）中國の民衆は、和平を愛好するもので、中國の對外方針は常に平和政策であつた。今年二月の三中全會に於て闡明された外交方針も、右の點を強調したものである。中國は過去二年間日支懸案の處理に當り、常に外交的方策により、妥當なる解決に努力して來た。弱小國家のとるべき途としては、常に和平的にことを處理し、以て國內建設完整の唯一の途を選んだのであつた。かゝる理由により、余は一九三五年の五全大會に於て、犧牲が最後の關頭に至らざる間は和平を拋棄せずと闡明したのである。併しながら弱小國家とはいへ、不幸にも犧牲が最後の問題に至つた場合、われ等に殘された途は、唯々抗戰の一路あるのみである。しかし一度これが犧牲を拂はんか、中國々民の受ける犧牲は實に絕大にして、如何なる苦痛の結末を招來するやも測りがたい。國民はよろしく犧牲の限度に對して、十分の理解を





なすべきである。

（第二）蘆溝橋事件は、一般に突發的事件として目されてゐるが、事件勃發一ヶ月前、現地に於て先づ外交的にこれが徵候を示してゐたものである。かゝる事態の下に於て、平和的解決の希望は極めて稀薄なりといはざるを得ない。東北四省は既に四ヶ年に亘り、われ等の手を離れてゐる。しかも蘆溝橋事件による危機は、中國五百年の文化を有する北京にまで伸びんとしてゐる。從つて蘆溝橋事件は、全中國の生存に關するものである。これが解決は『犧牲の限度』の範圍內に於て求めらるべきものである。これが犯さるゝ時は、卽ち中國抗戰の時機である。われ等は戰ひを求めざるも應戰の決意を有する。中國の抗戰準備は、中國の生存のため缺く可らざる條件である。一度戰端開始されんか、われ等は最後の一滴の血を流すも、あくまで抗戰するものである。

（第三）かゝる重大時局に際し、中國は尙和平的解決を望むものであるが、われ等の根本方策としては、次の四項目を明示する。

一、中國の國家主權を犯すが如き解決策は、絕對にこれを拒否する。

二、冀察政權は、南京政府の設置せるもので、これが不法なる改廢には一切應ぜない。
三、中央の任命による冀察の人事異動は、外部の壓迫によつて行はるべきものでない。
四、二十九軍の原駐地に制限を加へることを許さない。

以上の四點は、日支衝突を避け、東亜の平和を維持するための中國の最少限度の要求である。要するに中國は、平和を求むるも、已むを得ざれば戰ひを辭せない。全國民は北支南支を問はず、また老幼を論ぜず、政府の指導下に一致團結すべきである。

以上が蔣氏の聲明である。滔々數千言その意氣や壯なりと雖、冷靜なる眼光を以て批判すれば、次の一語に盡きよう、曰く、興奮し過ぎた揚句の戰爭呼ばわりであると。

つら〳〵南京政府に申入れたわが覺書と、これに對する南京政府の回答並に蔣介石氏の聲明とを對照するに、兩者の間には著しき態度のちがひを容易に認めることが出來る。わが政府の申入れは、事件の不擴大、現地解決の方法によりて平和を確保し、日支兩軍の衝突を避けんとするにあつて、輕々しく戰爭を云爲し、又は戰爭の避く可らずといふような文句は、どこを搜しても見當らない。換言すれば、日本は尙交渉の餘地が十分にあると認め、かゝる餘地をのこしてゐるのである。しかるに支那側の回答は、この日本の眞意を誤解し、好んで平和的交渉の途を塞ぐものである。南京政府側は或は日本に北支侵略の意圖ありと誤解してゐるかも知れない。果して然らばこれは支那側の邪推であつて、日本こそ迷惑至極である。日本は既に幾度となく北支侵略の意圖なきを世界に宣言してゐる。今回の北支事件は全く支那側の抗日侮日の結果であつて、再びかかる不祥事が起らないよう、將來の保障を求むるは、日本として當然の要求である。南京政府側はこの根本問題を知らぬ顏の半兵衞で見て見ぬふりをなしながら、却て日本の北支侵略をしゆるに至つては、彼等こそ東亜の平和を亂すものである。

もしそれ蔣介石氏の聲明に至つては、日支の關係を極度に悲觀し、必要以上に强硬態度を裝ひ、みだりに戰爭を說くもので、一國の總帥たる蔣氏の態度としては、餘りにも冷靜を失してゐるのに一驚を喫せざるを得ない。もとより國內消費のためでもあるが、それにしても、その調子のあまりにも挑戰的にして、不必要に興奮に陷つてゐるのは、これまで築き上げてきた同氏の名聲を、一朝にして泥土に委した憾みがある。凡そ一國の總帥たるものはみだりに戰爭を云爲すべきものではない。寧ろ默して語らず、最後の瞬間に至つて斷ずるものこそ眞の勇者で

ある。われ〳〵はその鑑例を大戰前のドイツのカイゼルに見た。彼は輕々しく戰爭を叫び、劍をがちやつかせたればこそ、世界の惡まれものとなつて、四面包圍の窮境に陷つたのだ。

況んや蔣氏の聲明は、恰も宣戰布告文の如く、決然たる態度の表明であつて、聊かも妥協の餘地を殘してない。その最少限度の要求として擧げた四ケ條の如きは、支那側にして誠意あらばいづれも互讓妥協の餘地あるものである。然るに氏は必要以上に强硬態度を裝ひ、支那の民衆を煽動するとともに、日本側の感情をも刺戟して、その意圖の如何にかゝわらず、終に救ふ可らざる最後のどたん場に向ひ、自らを追ひこむものである。

ことこゝに至つては、日本もこれに對處する策を講ぜねばならぬ。而してその責任の南京側にあることは言ふまでもない。

## (5) 北支より南京へ

一方北支方向では、二日間を期限としたわが約諾實行の催促に、冀察首腦部はその實行にとりかゝつたが、二十九軍の將士中には、上層部の穩和派と中下層部の對日主戰派との間にギヤ



ツプを生じ、首腦部の命令はなか〳〵に行はれなかつた。それのみか現地の停戰協定を一片の反古のように蹂躙して、夜となく晝となく、わが第一線部隊に對して挑戰的態度をつづけ、いさゝかの反省の色も見へない。却てわれに對し、積極的攻擊に轉ずる氣勢さへ見へたのである。

隱忍自重したわが軍は、協定の精神をくんで待機してゐたが、かくてはわが威武は地に墮ちる。そこで已むなくこれを庸懲するに決し、二十日午後二時過ぎ、宛平縣城にある支那軍に砲擊を加へ、遂にこれを沈默せしめた。

この一戰によつて、眞にわが國の重大決意を知つた冀察首腦部は、これまでのような遲延策や彌縫的の態度を以てしては、かへつて事態を惡化せしめ、第二十九軍の滅亡をも來す惧れあることを漸く認識し、宋哲元は首腦部會議を開いて最後的協議をした。その結果事件不擴大の方針を定め、これに必要なる諸般の事項を速かに實行することに決し、わが軍當局に懇請して來た。

わが軍は勿論事件の擴大を望むものではない。たゞ支那側が不信の行爲をくり返すので、已

むを得ず一擊を加へたまでゝある。ゆへに今支那側が眞に自分らの非を認めて北支への特殊性を容認し、和平の方策をたてゝ、日本と協調するの精神を示すならば、われは一切の軍事行動を停止し、進んで支那側に協力を惜しむものでない。そこで北支に於ける局地的細目協定は、冀察側の請いをいれて十九日午後十一時成立し、われは一旦開始した砲擊を中止し、和戰兩樣の準備を完整しながら、支那側が果して確約事項を實行するか否かを見守つてゐた。

右にいふところの細目協定といふのは、

(1)責任者の謝罪及處罰

(2)日支國交を阻害する人物の排除

(3)共產黨の徹底的彈壓

(4)排日的各種機關、諸團體及び各種運動、並にこれが原因と目さるべき排日教育の取締り

で、又別に排日熱の旺盛なる第三十七師を北平より他へ移駐する旨、冀察側から自發的に申入れた。

この嚴重なる約諾にも拘らず、二十九軍の一部は依然としてわが軍に砲火小銃火を加へたの





で、わが軍も亦膺懲のため猛烈なる砲擊を加へ、これを沈默せしめた。

然るに二十五日夜に至り、郎坊に於て、軍用電信線修理中のわが部隊に對し、また〳〵無法なる急襲射擊を加へた、そこでわが部隊は地上空中部隊の增援を得て、これに打擊を加へ、支那軍を敗退四散せしめた。

かように支那側の不法挑戰は依然として繼續さるゝので、わが北支駐屯軍は二十六日已むなく二十七日正午までの期限つきで約諾の履行を冀察首腦部に迫つた。然るに支那軍は二十六日夕冀察側の諒解の下に北平の西側廣安門より入城中のわが部隊に對し、突如城門を閉鎖して不意にわが軍を攻擊した。それのみか冀察首腦部は、わが期限付督促を默殺するのみならず、益々兵備を嚴にして、われに對するの挑戰的態度を露骨にした。

ことこゝに至つては、わが駐屯軍は既に隱忍を許さない立場となつた。そこでその任務の遂行と自衞上、斷乎として支那軍を膺懲するに決し、二十八日黎明より、北平の郊外にある三十七師の本據たる西苑、三十八師の本據たる南苑並に獨立三十九旅の本據たる北苑に猛烈なる爆擊を加へ、次で各部隊の勇猛果敢なる攻擊により悉くこれを占領した。

北平城内に於ては、われより進んで武力を使用することなく、專ら居留民の保護に任じてゐたが、支那側も敢てことを起さず、二十九軍の大部は二十九日夜竊かに保定方面に退却し、宋哲元も亦秦德純、馮治安などを帶同して保定に遁走したと傳へられてゐる。そこで市内の治安を維持するため地方自治會が組織され、三十日江朝宗を會長におした。

次に天津方面に於ては、日本側は北平と同樣戰禍の巷となすことを避けてゐたが、支那軍はわが兵力少しと見るや、第三十八師の一部は保安隊とともに、二十八日夜半より、主として日本人の居住する方面を目がけて攻擊してきた。わが軍は少部隊を以て困難なる市街戰を敢行しつゝ、翌朝までにこれを擊退した。然るに支那軍は依然として執拗なる攻擊を續けたので、わが軍は自衞上已むを得ず支那軍の占據せる主要地點を爆擊することゝなり、駐屯軍司令官は、右の爆擊は天津市内の治安を維持し、居留民を保護するための已むを得ない行爲である。勿論列國の權益尊重、居留民の保護に關しては最善を期する旨を聲明した後、二十九日午後に至り、保安總隊本部、警備司令部等を爆擊し、多大の効果を收めた。かくて天津も亦略ぼ平定したので、こゝでも北平同樣治安維持令が組織さるゝ運びとなつた。



冀東防共自治政府の所在地通州では、三千の保安隊が、支那側の甘言にのせられて二十八日叛亂を起し、防共政府や日本人を襲ふた。日本側は二十九日飛行機と援軍を送つてこれを救援したが、保安隊は四分五裂して逃走し、一部はわが軍によつて武裝解除を行つた。かくて平津方面に於ては、支那軍は潰滅し、大部は中央軍の所在地なる保定方面へと遁走したので、同方面の治安はわが軍によりて維持さるゝことゝなつた。

二十九軍の掃蕩が一段落を告ぐるとともに、北支事變の重點は變つてきた。

日本はこれまで北支の現地解決を目指し、主として冀察當局を當の相手となし、南京政府を從の立場においてきた。その冀察當局は逃げ出し、北平方面には自治體が出來上つた。日本は今や南京政府に向ひ、この既成事實を承認せしむるの外なきに至つた。

然るに一方南京政府側をみるに、かゝる既成事實を全面的に拒否しつゝ、對日戰備を整へて大兵を北上せしめ、その大兵を以て平津一帶の外廓に包圍陣形を張り、いつでもわが軍と決戰するといふような姿勢をとゝのへてゐる。況んや蔣介石氏が發した無謀なるステートメントは支那の軍隊や民衆を刺戟して、日本の軍民に對し、一層の挑戰態度をとるのみか、北支の平和

を攪亂する恐れも十分にある。

即ち北支事變は、今やその重點を對冀察即ち宋哲元との關係で見ることは從となり、對南京政府即ち蔣介石氏の態度行動が主なりて、日本は北支事變を全支那問題として考へねばならぬことになつた。

## (6) 第二上海事變の突發

二十九軍の掃蕩により、あくまでも事件の不擴大と現地解決を堅持してきた日本は、ひたすら事變が北支以外の支那各地に波及することを防止するため、最も愼重且公正なる努力を傾注してゐた。

然るに支那各地に於ける抗日、侮日は、支那當局の再三の取締り誓約にも拘らず、日を逐ふて陰險猛烈となり、邦人經營工場の操業を不可能ならしめ、商取引を停止し、遂には食糧品その他の生活必需品の不賣等、邦人に對する脅迫、露骨なる侮辱等、あらゆる惡辣なる手段を以て壓迫した。加ふるに漢口、上海、青島はじめ、中南支各地では邦人居留地を包圍して陣地を





構築し、兵力を增加して挑戰的態度をとる等、事態はいよ〳〵急迫して來た。

こゝに於てわが政府は、斷然意を決して、多年にわたる苦心經營の結晶たる、わが居留民の財產權益等を一時遺留して居留民を引揚ぐるに決し、先づ揚子江沿岸居留民の引揚げを行ひ、又南支方面の居留民に對しても同樣の措置をとつた。しかるに支那側はこれを以て日本與みし易しと考へ、かへつて益ゝ抗日、侮日の氣勢を高め、挑戰的態度を增長して、自ら戰ひを求めんとする態度に出た。そこに大山事件が起つた。

上海のわが特別陸戰隊第一中隊長大山中尉（勇夫）は、部下一水兵の操縱する自動車にのり、八月九日午後五時頃、上海共同租界越界路のモニューメント路を通行中、道路上で多數の保安隊に包圍され、機銃小銃等の射擊をうけ、數十發の彈丸をうけて即死し、運轉員の水兵も亦殺害された。

こゝに於てわが岡本上海總領事（季正）は、上海市長を訪問して、日本人居留地附近の保安隊を撤去し、又停戰區域內の防備施設を撤收することを要求したが、市長は自發的にこれ等を實行してゐる旨を答へた。しかるに事實はこれを裏切り、かへつてます〳〵兵力を增加し、保

安隊による停戰協定の違反に加へて、正規兵たる中央軍第八十七師八十八師をくり出し、かねて構築せる攻擊陣地につかしめる等空氣はいよ〳〵險惡を加へてきた。そこでわが方では萬一に備へるため、居留民の安全地帶への收容を行ふとともに、陸戰隊をして防備配置につかしめた。

日本は尙も和平解決を望むので、十二日午後には、わが岡本總領事の請求により、工部局參事官室に於て、日・英・米・佛・伊・支關係國委員の出席の上に會議を開き、支那側の反省を求めた。外國委員は、日本が上海の治安維持のため、熱意をもつて努力しつゝあることを認め、支那側委員愈市長に向ひ、北停車場附近より第八十八師の撤退を要求した。然るに愈市長は

余は委員として、こゝに如何なる要求をも承諾するを得ない。かゝる要求は南京政府に對してなさるべきである。

と云つてこれを拒絕した。そこでわが岡本總領事は、

外交々涉は現に行つてゐる。日本としては當面の衝突を避くるのが最も緊要であると思考する。



とて愈市長の再考を求め、英米伊委員もこれに和した。しかるに愈市長は頑としてこれをきかず、

余としては、如何なる方法を以てするも、如何ともすることは出來ない。

と逃げを打つた。こゝに於て岡本總領事は

しからば日支を除く第三國のみによる委員會に付託しては如何

と提議したが、これも愈市長の反對で採擇されなかつた。結局日支双方とも、相手側が發砲せざる限り發砲しない、との諒解だけ出來て委員會を閉ぢた。

形勢はます〳〵切迫してきた。そこに十三日午前十時に至り、支那側便衣隊はわが軍に向つて發砲したので、彼我兩軍の一部は遂に銃火を交へた。午後四時に至り、支那正規軍はわれに向ひ遂に砲擊を開始したので、こゝに全面的戰鬪は開始され、日支兩軍の決戰は、こゝにいよ〳〵展開さるゝに至つた。

十四日午前十時頃、支那側飛行機十數機は、わが艦船、陸戰隊本部及び總領事館等に對して爆彈を投下し、不法にも共同租界にまで爆擊を加へて、數百名の死傷者を出させ、その中には

外人も交つてゐた。

この非人道的なる支那側のやり方に對しては、わが政府も默する能はず、斷然支那軍を庸懲するとゝもに、南京政府の反省を促すに決し、政府は十四日夜緊急閣議を開き、十五日午前一時

支那軍が、かくの如く國際信義を無視し、暴戾の限りをつくし、言語同斷なる血迷へる行動に出づる以上、隱忍に隱忍を重ね、あくまでも東洋平和のため事態の擴大を防ぎ、能ふ限り犧牲を少くして、東洋平和の根本を固めんとしたるわが方としては、方針に變更なきも、行動は自らこの事態に副はざる可らず

との見地に立ちて斷乎たる聲明を發表した。

勿論南京部內には、大局を見るの明を有するものはある。かれ等は日本と戰つて到底勝算なきを熟知してゐるのである。しかるに親ソ派と青年將校連の强硬論に引きずられた蔣介石は、進退兩難に陷つて遂に日本と一戰を交ふるに決し、こゝに上海事變への展開となつたものと思はれる、





かくて北支事變は上海に飛火して第二の上海事變となり、日支兩國はこゝに全面的に兵火の間に相見ふるに至つた。

# 三　北支を挾んで

## (1)　南京側から見た北支問題

われ〳〵は前章に於て、蘆溝橋事件を中心とする今回の北支事變の經過を述べてきた。そして北支問題の重點は、これまでは日本對冀察政權の局地的關係であつたものが、北支に於ける現地解決案の成立以來、重點は日本對南京政府の問題となり、南京側が國家全體をあげて解答を與へんとするに至つて、北支問題は全支問題となり、全支那民族を相手にして解決せねばならぬといふ、極めて複雜なる關係となつたことも述べておいた。

然らば北支問題は何ゆへに全支那問題となつたのか？　北支事變の見透しをつける爲には、先づこの疑問に解答を與へておくことが何よりも必要であらふ。

南京政府の北支中央化は、蔣介石の國内統一工作に伴ふ必然の結果であつて、それが單に時





間の問題に過ぎないのは、早くから豫想されてゐた。

蔣介石氏の國内統一工作は、北支の探題として餘命を保つてゐた張學良に詰腹を切らせた時にスタートする。當時學良麾下の東北軍は、滿洲を追はれて北支方面へと入りこみ、義勇軍や匪賊を操縱して滿洲國の攪亂を企てたので、わが軍は熱河に入り、更に長城をのりこへて北平天津さへも占領せんとする氣勢を示した。一九三二年の始め、南昌行營にあつて共匪討伐に專念してゐた蔣氏は、この形勢を見るや、この機を利用して北支那の布置を考へ、南京政府への統一を企てた。そして急速北上して學良には下野外遊を條件として詰腹を切らせ、腹心の何應欽を後釜にすへた。總ては電光石火の早業である。蔣氏が非凡の人材であるのは、この一事だけでも既にスタンプを貼られた。

だが南京政府には尙獅子身中の虫が殘つてゐる。卽ち國民黨は分裂して浙江派と廣東派に分れ、廣東派は獨立して所謂廣東政權を樹立し、南京政府の指令には一向に從はない。北方では首領の張學良を失つた舊東北軍の殘類は、所謂ルンペンの形でとぐろを卷いてゐる。それに山東の韓復榘でも山西の閻錫山でも、泰山の馮玉祥でも、いつ南京政府に對して反旗を翻へすか

わからない。

加ふるに南京政府にとつては、最も恐るべき共産黨が、赤い手をじり〳〵とさしのばし、江西省を中心として、湖北、湖南、福建、四川省に猖獗を極めてゐる。

一九三三年の四月十日、南昌の行營にあつた蔣氏は、要人千餘名を並べて、次のような大膽な演說をした。

「剿匪は抗日より先にすべきである。歷史に徵するも、國內安定せずして攘夷に成功した例はない。余は剿匪各部隊に對し、匪軍を肅淸せずしては斷じて抗日を云爲してはならぬ。違反者は嚴罰に處すると嚴命しておいた」

彼は日本に抗するには先づ國內を統一し、南京政府の下に治めねばならぬと考へたのだ。だが彼の剿匪には重要なる他の目的も含まれてゐた、それは共產軍の追剿に名をかりて、先づ四川、雲南の中央化をはかることである。果せる哉彼は四川の行營に進駐すること半歲の間に、劉湘以下の雜軍を整理して、先づ四川を中央の勢力下に確保し、次で貴州、雲南をも懷柔して邊境各省の中央化に成功した。





次に眼をつけたのは西南派である。たま〳〵昨一九三六年廣東派の長老胡漢民が逝き、西南の政情紛糾すると、蔣氏は好機逸す可らずとして、その中央化を策した。これを知つた兩廣派が中央の壓迫に對して憤激し、反蔣抗日を呼號して起ち上ると、蔣氏は逆に和平統一方針を闡明し、內部の切崩しを行ひ、一兵をも用ひずして完全にこれを中央の統制下に收めた。

これより嚮き、惑星馮玉祥は、蔣氏に懷柔されて南京に來り、殘るは山西の閻錫山と山東の韓復榘並に冀察の宋哲元のみとなつた。こゝに於て蔣氏は先づ西北問題を解決せんとして、三十萬の中央軍を山西に入れ、これに睨みをきかせて閻錫山を威壓せんとする計畫を進めた。恰もよし日支間には、成都、上海、北海等に於ける抗日不祥事件が續發し、抗日の氣勢は全支に漲つたので、彼はこの機會を逸せず、專ら抗日戰線の擴大强化につとめ、西北の中央化工作に拍車をかけさせた。そこに綏遠問題まで起り、西北邊陲はいよ〳〵多事多端を極めた。そこで蔣氏は福建の蔣鼎文を前敵司令に、衞立煌を邊區剿西總司令に任命し、前記した山西中央化の豫定計畫に移らんとした時、あの西安事件は勃發したのである。

かくて蔣氏の計畫は水泡に歸したが、しかしながら事變の結果は却つて中央に有利に展開し、

統一の氣勢を强めるとともに、抗日意識を煽つて國民の一致抗敵を强調する結果となつた。

蔣氏の全國統一の事業は、かくの如くにして着々と成功し、殘るは冀察と山東のみとなつた。

冀察政權に對する中央化の觸手が活潑に動き始めたのはこの時からである。

このことは南京側の放送によつて既に前觸れがされてゐた。例へば蔣氏の代辯者と目さるゝ大公報の如きは、昨年大晦日の送年の辭並に翌日の新年の社說に於て、

一九三六年度に於て、支那は始めて近代國家としての自信を立證した

と云ひ、その例證として第一に西南問題、第二に綏遠問題、第三に西安事件をあげ

支那の欲するところは勿論平和である。しかしながら平和は支那の一方的意思に依てのみ贏ち得るものでない。これを現實に確保するには內部の建設統一が第一である。日本との間には勿論平和以外のものを欲するものでないが、しかしながら日支の全面的融和は、支那の一切の失地の主權と領土を收回して然る後に始めて談ずべきものである、われ〳〵の日本に對する全意思は、この簡單明瞭なる原則の中に盡されてゐる。

と述べて意氣昂然たるものがあつた。





支那の評論家胡適も亦本年早々の論文に於て、大公報と同樣、昨年度に於ける如上三個の事件をあげ、支那の國家主義の大なる飛躍の兆としてこれを祝福した後、支那は今年度に於て何をなすべきかを指摘してゐる。

彼によれば、支那の今年度の問題は失地の回復である。卽ち第一には綏遠・察哈爾に於ける完全なる肅淸、所謂綏東と張北の回收である。第二には冀東自治政府の完全なる解消とともに、變態的なる冀察政權の現狀を完全なる支那の一地方政權としての形態にまで回復することである。換言すれば、日本側の要求する北支の特殊化を完全に一蹴するのみならず、更に支那側の一方的意味で、現狀より前進せよといふのである。

彼は更に筆を續ける、曰く、これだけのことが完成したならば、中國の國權回復問題は十分の八まで片づいたことになる。たゞ殘りの二分だけは問題は決して簡單でない。故に支那は今後數年に亘りて實力を培養し、その時の國際情勢を見て、然る後に初めて取りかゝるべきであるといふのである。

然らば殘る二分とは何か？　それは滿洲國の奪還であることは云ふまでもない。滿洲に手を

觸れぬのは、今日の支那の實力が不十分であるからで、實力が充實し、國際情勢を有利に導き得たならば、滿洲奪還にとりかゝる。從つて滿洲國の獨立を取消さぬ限り、日支融和は絶對に不可能であるといふ意味が言外に明白である。

これが今日の支那人の意嚮である、彼等は北支問題の解決のみでは滿足しない。更に滿洲國を奪回しようと企てゝゐるのである。

果せる哉西安事件の前後處置を講ずるため、二月十五日から南京で開かれた三中全會議では國・共の妥協問題とともに、北支問題の解決、即ち冀察の中央化、冀東の解消問題が討議されその結果先づ第一段として北支問題の解決に猛進し、次で第二第三段の工作として、滿洲國の奪還にまで邁進することを決議したのである。

こゝに至つて彼等が自己の力を過信し、誇大妄想狂に襲はれつゝあることは一目瞭然である。北支問題が日本對全支の問題となるのも怪しむにたらない。

## (2) 日本と北支問題



日本にとつて、北支が如何に重要なる關係をもつかを知るには、先づわが國策の基調を掲げることが捷徑であらふ。

わが對外國策の基調は

**新興滿洲國の健全なる發展を保障し、日、滿、支三國の完全なる提携を遂げ國力の飛躍的增進と相俟つて、東亞安定勢力としての確乎たる地歩を堅め、依つて以て世界平和に貢獻すると共に、國際正義の確立により、人類の福祉を增進する。**

これはわが對外國策の基調である。即ち (1)滿洲國の健全なる發達 (2)日・滿・支三國の提携 (3)國力の飛躍的增進を本として、東亞安定勢力としての確乎たる地歩を堅めようといふのである。

この東亞安定勢力としての地歩を堅むるため、上記した三つの條件を遂行するためには、滿洲國について北支方面が日本にとり殊に重要な舞臺となる。

このことを說明するには、われ〳〵は先づ廣田前外相が昨年一月二十日の帝國議會に於て公

表した對支三原則を顧みる必要がある。この三原則といふのは、

一、支那は排日運動を停止し、歐米依存主義を捨て、日支協力の實現を期すること。

二、支那は滿洲國を承認し、特に北支に於ては、日滿支三國關係の調節を圖ること。

三、赤化運動防止のため、日支共同の防衛を策すること。

この三原則は、昨年九月から南京で行はれた日支交渉に對する日本の交渉方針の基礎をなすものである。その交渉方針中には、南京政府に對して要求さるべき次の項目が含まれてゐた。

(1)北支に於ける特殊地帶の設置

(2)排日抗日の取締り

(3)共産黨に對する共同防衛

(4)密輸入問題解決案として高率關稅の引下げ

(5)日支間飛行連絡を圖るため、交通に關する協定の締結

この五つの條項は、何れも北支問題に關聯するもので、多くは相互的に不可分の關係にある。例へば日本の北支進出は、日・滿・支經濟ブロック形成上の必然的要求に基くは勿論、一面



に於ては、日滿不可分關係からくる赤化防衛の政治的意味を有し、又對ソ策戰上の軍事的要求にも基くものである。元來日・滿・支經濟ブロックそのものは、單なる經濟的原則のみに基くものでない。それは一の戰時經濟體制として要求せらるゝものであるから、北支問題と防共協定は一體不可分の關係にある。又北支問題の重要なる內容をなす冀察や冀東政權問題、密輸取締りの問題は、支那側の高率關稅引下げと密接に關聯し、航空路問題も當然南京政府の指令による北支軍事飛行中止問題に絡んでくる。

以上は問題を日支間に限定しての考察であるが、更にこれを外國との關係からみれば、問題はます〳〵複雜してくる。例へばソヴエット・ロシヤとは防共問題並に軍事的意味に於ける北支問題に、英・米・獨・佛・白等は、經濟的意義に於ける北支問題並に關稅問題に、又英・米とは航空問題に關して特殊の利害關係をもち、こと毎に支那の行動を制肘しつゝある。

ことに南京政府が、その本質上英米資本の買辨的立場にあり、英米資本と密接な關係をもつ浙江、江蘇財閥の上にその財政的基礎をおく關係上、南京政府を相手にする懸案の解決には、常に背後に控へるこれ等の諸勢力も考慮せなければならぬ。

こゝに至つて支那問題が複雜多岐なることは容易に看取出來る。何れの國でも、隣國間との國交關係はと角複雜困難を極むるものであるが、日支の關係は中間に滿洲國といふ特殊な存在があり、その滿洲國の健全なる發達を保障するためには、更にその隣接區域に北支といふ緩衝地帶を必要とするので、三重の複雜性をもち、その解決はなか〳〵に容易でない。

而してこの場合、全體を貫く基本的な要因は、日本の大陸政策であつて、これが全體の問題を解決する上の基準となる。從つて日支間のあらゆる問題は、この大陸政策の方向を基礎とし、これを前提として論ずるでなければ意味をなさない。

以上で北支問題の日本にとり重要なる理由は容易に理解され得ると思ふ。しかしこのことは極めて重要であるから、次に重複をいとわず、北支問題が日支間に於て重視さるゝ理由を列擧してみる。

一、北支は地理的に滿洲國と接壤するので、政治的、經濟的並に軍事的に、特殊の關係を日滿兩國との間にもつてゐる。

二、第一にこれを政治的にみれば、わが國策の一たる滿洲國の健全なる發達を保障するためには、北支を緩衝地帶として、滿洲國に對する安全地帶たらしむる必要がある。

然るに南京政府はいろ〳〵な中央化工作を施して北支の緩衝地帶たる役目を去勢し、あわよくば滿洲を奪回せんとするから、こゝに日支間の衝突が起る。

三、第二にこれを經濟上よりみれば、資源に乏しい日本は、滿洲國のみならず、進んで北支の天然資源をも開拓し、同時にそこをわが製成品の市場とする必要がある。所謂日・滿・支經濟ブロックが提唱さるゝ所以である。加之ならず、この日・滿・支經濟ブロックは、單なる經濟原則以上に、戰時經濟體制としても要求さるゝものであるから、問題は日本にとつて一層重要となる。

然るに南京政府の中央化は、この經濟ブロックの結成を妨げ、これをして水泡に歸せしめんとするから、こゝでも亦日支間の衝突が起る。

四、第三にこれを軍事上からみれば、ソヴエット・ロシヤは、外蒙を赤化して、內蒙方面より北支、滿洲國に對して赤化の魔手をのばさんとするので、赤化防衛の政治的意味からも、對ソ策戰上の軍事的意味からも、日本は北支に對して重要關心をもつものである。

然るに南京政府側は聯ソ容共を策し、ソ聯を味方にひき入れるのみか、共產軍と妥協して北支の緩衝地帶や滿洲國の治安を紊さんとするから、こゝでも亦日支間に衝突が起つてくる。五、次にこれを現實の問題としてみれば、昭和八年五月の塘沽停戰協定、同十年六月の梅津・何應欽協定により、北支の特殊性は、ある程度まで南京政府の承認するところとなつてゐるが、この特殊關係から生れた冀東、冀察兩政權が、その內容に於て不安定極まるものであり、同時に又兩政權並立の事實が北支の政局を不安定に導き、そのためにこの兩區域內に於ける總ての事態が安定と明朗を缺いでゐる。

その安定と明朗を缺ぐところにつけこんで、南京政府の中央化の魔手は、いよ〳〵ますます露骨に働きかけ、ことに最近は日本を侮辱した橫暴振りを發揮するので、こゝでも亦日支間に衝突が起る。

以上によつて明らかなる如く、日本の北支に對する要求は、(1)滿洲國に對する緩衝地帶(2)日滿支經濟ブロック(3)赤化防衛(4)對ソ策戰上の要求に基き、その特殊化を主張するもので、北支に對する領土的野心は毛頭抱いてゐない。このことは歷代の首相が幾度か中外に向つて聲明した通りである。從つてこれだけの問題ならば、支那の獨立的感情を刺戟することなしに妥協出來ることであつて、なにも戰爭までして日本の主張を拒否する必要はない。

然るに支那側では、日本は恰も北支に領土的野心でもあるように考へ、日滿支の經濟提携を以て、日本は北支を經濟的に侵略するものと呼號し、日支兩國の實力的發展に限界を與へるような合法的措置を拒否するのみか、更に增長して滿洲國を奪回するに非れば、日支國交の根本的解決は望み得べからずと稱する。これでは日支國交の調節もなにもあつたものではない。要は支那から日本人を追ひ出し、日露戰爭と日獨戰爭の結果、露獨の併呑から取戻してやつた支那領土の一部を、日本人を足蹴りにしながら、支那の方へ返せといふのと同じである。

なるほど山東は、歷史に類例なき寬大さを以て、日本は支那に返してやつた。しかしこと滿洲國となれば、そうはゆかない。滿洲を返せといつたら、恐らく日本人は最後の一人までも反對し、魏然たる態度をとるであらふ。この日本の決然たる態度を知らず、却て日本の國力を輕侮するところに、支那側の日本に對する認識不足があり、戰爭の危險がある。

# 四　排日から抗日戰へ

## (1)　排日から抗日へ

滿洲事變と北支問題を背景として、全支に横溢しつつあるのが、抗日と抗日戰の氣勢である。北支事變はかゝる反日の結果に外ならない。

この日本に對する反感は、始めは排日として現はれ、それが長期抵抗と抗日に變り、遂には對日戰にまで展開して、經濟戰から武力抗爭へと移り、その目的は極めて深刻となつた。

支那に於て排日が始めて起つたのは、辰丸事件の時である。その後大正四年の對支二十一ヶ條問題の時にも起つたが、この二つの場合にはたいしたことはなかつた。それが思想的背景を控へて重大視すべきものとなつたのは、大正八年以來のことである。即ち滿洲を接觸點として、日支兩國が眞劍に爭ふようになつてからである。





だが當時にあつては、支那は四分五裂して武力では到底日本に勝てない。そこで現實的な支那人は、日本を屈する方法として、次のような手段を考へた。

「今支那は武力では日本に敵はないが、經濟的には日本は支那に依存してゐるから、先づボイコットで經濟的に日本を虐め、日本がいよ〳〵弱つたところで武力を用ひよう」

即ち支那は弱者の武器たる對日ボイコットを採用したのである。そして濟南事件後に起つた排日運動の際には、全國反日會の組織が完成し、系統ある組織の下に對日經濟絶交を行つた。この排日の實行機關は、始めは學生であつたが、後には商人團體、勞働者が加はつた。かゝる際にいつもつけこむのは共産黨である。果して英米系の基督教青年會の幹部で指導されてゐた學生の排日運動は、爾來共産主義青年團の幹部に卒ひらるゝ赤い運動と化し、その手段も惡辣を極めた。

次で國民黨が指導權を握ることになると、容共を標榜した同黨は忽ちにして赤く染り、實行機關として、國民黨と同じ組織を有する反日會を全國的に組織し、政府機關がこれを援助し、後には中央政府が直接排日に指導を與ふるようになつた。その結果ボイコットは漫性化し、第

三期的症狀を呈するに至つた。

この第三期的排日症狀に一大變革を與へたものが、昭和六年の滿洲事變である。

滿洲事變は、一面からいへば、支那人に覺醒の機會を與へて、統一の氣運を釀成するとともに、他の一面では、支那の對日ボイコットに根本的な變革を與へる導因ともなつた。支那は從來の排日から一歩を進めて長期抵抗に轉じたのだ。所謂一面抵抗一面交渉と稱せらるゝものがこの長期抵抗である。

日本ではこの一面抵抗一面交渉の南京政府の對日方針を目して、支那側が抵抗の不可能なるをさとり、態度を緩和して日本との親善を望んできた證據であると見られたが、これは皮相の觀察で、彼等の本意は一貫して長期抵抗を試みるにあつた。ただ一面抵抗一面交渉といへば、日本も支那民衆も、ともに胡麻化すに都合がいゝから、かゝる言葉を用ひたものに過ぎない。

然らば長期抵抗は何を意味するかといへば、支那は武力では尙日本に抵抗することが出來ないから、表面親善を裝ひながら、時日の遲延によつて日本の疲れを俟ち、最後に武力的復讐戰に出でんとするものである。詳言すれば、日本に對してはその鋭鋒を鈍らすため、表面親善を





裝ふて。わが國を僞瞞しながら、裏面ではボイコットを徹底的に續行し、その間に國內の統一を行ひ、國際關係を次第に支那に有利に展開して日本を孤立に陷れ、時機よしと見れば、猛然起ち上つて日本に復讐戰を試みようといふのである。

この長期抵抗の期間までは、支那は獅子身中の蟲をもつてゐた。それは共產軍の跋扈である。蔣介石は先づこの身中の蟲を退治するため、剿匪に成功するまでは抗日を云ふなと嚴命しながら、自ら軍を率ひて共產軍の討伐にとりかゝつた。そして前後數年を費やし、數十萬の兵を指揮しながら、昭和九年の末共產軍の本據江西の瑞金を陷れ、逃ぐるを追ふてこれを雲南、貴州、四川の邊境に驅逐してからは、こゝに共匪の脅威は緩和し、抗日の正體を現はすにも都合よくなつた。支那が極力軍備の充備につとめ、ことに飛行機の整備にとりかゝつたのは、その時である。

抗日とは積極的抵抗の別名である、卽ち支那は始めの經濟的ボイコットといふ消極的抵抗から長期抵抗に移り、最後に積極的な抗日に轉じたわけである。

この長期抵抗より抗日への轉換線を劇したものは、共匪討伐の成功であるが、恰もよし昭和

十年には北支問題が起り、抗日の空氣が全國に漲つたので、南京政府はこの氣勢を利用し、それ以來抗日に轉じた。

即ち昭和十年冀東冀察兩政權が出來ると、これはてつきり第二の滿洲國をつくるものと考へ先づ北平學生間に反對運動が起り、それが上海に飛火して、同地の言論界は領土完整擁護の宣言を發し、總工會も亦北支自治運動の反對を表示した。

この抗日運動を更に進展せしめたものは、わが北支增兵と密輸入問題である。

平津一帶には、わが在留邦人二萬を算し、わが權益も相當にある。然るに抗日を標榜する共產軍の脅威と、平津地方に於ける共產黨及抗日團體の策動は、わが在留邦人に甚深の脅威を與へ、しかも支那駐屯軍の兵力は極めて僅少であるから、萬一の場合その任務を遂行することは頗る困難な狀態にあつた。そこで昭和十一年五月、わが政府は天津條約により、北支駐屯軍を增兵した。然るに支那側はこれを以て不脅威不侵略の原則に反するものと認ひ、民衆の感情を煽動したので、こゝに抗日の氣運は猛然として起るに至つた。

次は密輸入問題である。元來この密輸入は何も今に始まつたものではない、支那では古くから



これが慣行され、北方では北支那、南方では廣東方面が有名なる密輸入場所として常識化されてきた。

然るに北支に自治運動が起ると、支那側ではこれを北支獨立運動の一側面と見、密輸を以て天津海關の獨立と早合點し、支那の民衆を煽り立てた。けだし天津海關の獨立は、關稅の低下又は海關制度の崩壞により、國民政府の財政を危くするものと考へ、支那の海關制度に利害關係を有するイギリスを拜み倒して、日本に對し共同戰線を張つた。一方國民政府の反對運動は、民間の商人側にまで影響し、學生方面これに和し、全國的に抗日の氣勢をあげた。

そこに廣西問題まで起つて、抗日の氣勢は更に油をそゝいだ。

西南派は蔣介石政權から獨立してゐる。そこで蔣介石はこれを南京政權に統一するため、これに中央化工作を施さんとしたが、早くもこれを察知した西南派は、蔣介石討伐の代名詞として抗日救國を叫び、これによつて國民の同情をよびよせ、蔣が應ぜざるに於ては、これを理由として蔣を討伐せんとしたのである。日本こそまことに迷惑至極であるが、そこが支那なればこそである。

かくて昭和十年の夏から今年にかけて、支那人の對日空氣は、北から南に至るまで抗日で塗りつぶされ、非常に惡化した。ことに綏遠問題が起り、その背後に日本の煽動があるかのように邪推してからは、右の抗日は一層激化した。

かゝる抗日氣分は極めて露骨であつて、民衆は日本人に對し露骨に敵愾心を現はし、日本人の旅行者に對しては、官憲は一擧一動を注視し、まるで交戰國民そのまゝの取扱ひ方である。

この排日抗日の裏に、一部の英米人が策動し、これを煽動したことは隱れもない事實である。就中英米系の學校と教會がその導火線となつたことは、幾多の事實がこれを證明してゐる。

## (2) 抗日と共產系

かゝる排日抗日の背後にあつて、これを助成したものに、前記した一部英米人の策動以外に、共產系の活動が與つて大に力があることは、こゝに特記せねばならぬ。

中國共產黨は、武力を以てする革命に失敗するや、江西を去つて支那の西北に走つたが、江西にゐる時から既に目標を抗日運動に轉じ、ロシヤの極東政策に呼應してゐた。



この抗日運動が具體的になつたのは、昭和九年に上海に中國民族武裝自衞委員會準備會が組織されてからである。當時は日本軍の北支進出で塘沽協定が結ばれた時であるから、抗日熱を煽るには都合がよかつた。この準備會には、孫文未亡人宋慶齡や何香凝女史などが名をつらね、對日作戰宣言とか對日作戰基本綱領などを發表して民衆を煽つた。彼等によれば、日本に對しては無抵抗主義は不可である、國際聯盟は信賴出來ない、これ等は何れも敗北主義である。ゆえに今後はかゝる主義を捨て、全民衆が立つて抗日戰線に參加すべきであると高調した。彼等はこれを民族戰爭と呼び、陸海空軍の總動員の外に、全人民の動員と武裝を叫んだ。

翌昭和十年になつて雜誌新生の不敬事件が起り、北支の風雲も亦波瀾萬丈の形勢を呈すると、共產黨は更に氣勢をあげ、次のような對日作戰綱領六ヶ條を定めて、これを一般に宣傳普及した。

一、全國の陸・海・空軍を對日作戰に動員すること。

二、全國民衆を以て義勇軍、抗日會、救護隊、募損隊をつくり、對日作戰をなすこと。

三、全國民を悉く武裝させ、兵工廠內、國庫內、及海外から輸入された武器を使用して武裝

させ、對日作戰をなす。

四、日本人の在支財産、工場、銀行、商店の如き、及び日本に通ずるものの財産を沒收して抗日戰爭の經費にみて、又全部の國庫收入、及び全國からの寄付金で、對日戰爭の經費にみてる。

五、各工場内、作業場、各鄕鎭、及び各地方に中國武裝自衞委員會を組織し、これを全國的に統一し、抗日戰爭を指導させる。

六、日本の壓迫下にある民族及び一切の支那民衆の對日作戰に同情する國家、民族、階級、或は個人と聯合して、抗日戰爭を進行せしむる。

そこに北支自治運動は起つた、果然彼等は大に氣勢をあげ、學生、智識階級の間に潛入してこれを煽動し、後には學生運動を指導するに至つた。

その後學生運動と抗日と共産運動の三つが結びついてからは、かれ等の運動はます〳〵辛辣となり、ことに北平の學生を煽動しては、日本の北支增兵反對、廣田三原則反對、武力を以て失地回復、日本帝國主義打倒を叫ばせた。





かように共産黨は學生や智識階級の抱きこみ戰術には成功したが、肝心の南京政府は相手にしてくれない。それもその筈だ、聯ソ容共を掲げて支那の統一を圖らんとした國民黨の痛ましき失敗は、蔣介石には眼のあたり記憶が殘つてゐる。この失敗に懲りた彼は、先づ身中の蟲たる共匪を掃蕩することが、抗日よりも急務と考へ、自ら軍を率ひてこれを邊境に驅逐した。その蔣介石であるから、おいそれと共産黨と手を握る筈はない。こゝに於て共産黨は、行詰つた進路を打開するために何等かの方向轉換を餘儀なくされてきた。

恰もよし西安事件は勃發し、蔣介石は張學良のために監禁された。張の部下には形勢の非なるを見て共産黨と妥協したものも相當にある。そこで共産黨は學良を說服して、國共の妥協合作を蔣介石に强要させ、見ごとにこれに成功した。

これ等共産黨の新たな目標は抗日決戰である。彼等はこれをスローガンとして抗日第一線に立ち、日本をして、東北四省と察北を返還せしめ、北支駐屯軍を撤退させよと呼號しつゝある。

今回の北支事變が起ると、彼等は國民政府援助、對日徹底的抗戰を叫び、モスクワのコミンテルン本部と連絡をとつた上、南京政府に對し、次のような提議をしたと報ぜられてゐる。

一、ソ聯は支那共産黨を通じ、極力國民政府を援助する。

二、中國共産黨は、速かに義勇軍を組織して、陝西、甘肅、山西諸省の諸軍と協力し、西北地區に活躍する。

三、滿洲、朝鮮及び日本の共産黨員と協同して、日・滿・鮮内に暴動を起す。

四、在支日本紡績會社に暴動を起す。

又朱德、毛澤東等の共産軍幹部は、蔣介石に打電して、

「日本に對しては國民等しく憤慨するところである。われ等は至誠を以て一致團結し、これに當るから抗戰命令を發せられよ。われ〳〵は所屬部隊を率ひて國防の第一線に立つであらふ」

と云ひ、これに對して蔣介石は、

「卿等の誠忠を喜ぶ、適當なる時機に至らば卿等を重用すべし」

と返電したと云はれてゐる。

紅軍はわが精鋭なる軍の威力を知らない、彼等は二十九軍に比べてすら頗る劣つてゐる。そ





の二十九軍でさへ、わが軍の一擊を喰つては縮み上つてゐるのである。況んや井中の蛙たる紅軍に於てをやだ。見せしめのために、彼等に一擊を加へておくのも亦妙であらふ。

## (3) 抗日から抗戰へ

上述するように、支那の抗日意識は非常な勢ひを以て強化され、全國に普遍されてきた。それに國内の統一工作も着々として進み、日支交渉ではわが要求を斥け、綏遠・西安事件では一層國内の團結をかため、共産軍との交戰も終熄して、共産黨が熱心に宣傳した抗日民族統一戰線も事實に於て完成された有様となつたから、抗日意識は尙更徹底してきた。一方國内の軍備もだん〳〵に改善整備されてきた。

この形勢をみた支那人は傲語し始めた、

「現在われ〳〵に殘された問題は一つしかない、それは日本といつ戰ふかといふことである」

と。彼等は慢心のあまり、獨立で日本と戰へるものと輕信するに至つた。

凡そ青年の陷り易き弊害は空論を弄ぶことである。ことに支那の青年軍人並に青年官吏の間

には、ともすれば感情論にかられ、今日直ちに全國力を動員して日本に當つたならば、日本を壓倒し得ると考へるものが相當に多く、これが下刻上の形をとつて政府當局に迫るといふ有樣である。

これに反して政府首腦部は、抗日卽時斷行に出ても成功の自信なきことを知つてゐる。そこでこれまでは愼重の態度をとつてきたが、最近には青年達の强硬論に引きずり込まれたものとみへ、その態度も變つてきた。

例へば思慮深き汪兆銘すら、過般の公開演說では、支那は排日にあらずして抗日であるといつて、日本が侵略してくる時には、あくまでも抵抗するものであると公言してゐる。

蔣石介は、一昨年一月に開かれた第五次中國々民大會に於ては、

「われ等は國家と民族の利害を主要の對象として、一切の枝葉問題は最大の忍耐をなし、主權を侵犯せざる限り、友邦の政治と協調し、互惠平等の原則を以て友邦との經濟合作をはかるべく、そうなれば、黨國の命に從つて最後の決心をなすであらう。和平未だ完全に絕望の時期に至らざれば決して和平を棄てず、最後の關頭に達せざれば犧牲を云はない。和平の限





度と犧牲の決心の程度に從つて、最後の犧牲の決心を定むべく、しかも和平のため最大の努力をなし、國家の安全と民族の復興の目的を達せなければならぬ」

と演說したが、今年二月に開かれた三中全會では、

「領土主權の侵害の事實が發生して、政治的方法を盡すもその効なく、損害を受けて忍耐の限度を超ふる時は、決然抗戰すべし」

といふ意味を宣言中に述べてゐる。南京政府が抗戰の文字を用いたのはこれが始めてゞあつて、支那側の鼻息が如何に荒くなつたかは、これでも想像出來る。

この荒い鼻息は、今回の北支事變が起つて間もなく發表された蔣氏の聲明中にも現はれてゐる（第一篇二の四參照）曰く、

「中國の犧牲の最後の問題は刻一刻に近づきつゝある……日本の態度如何によつては、日支全面的開戰も已むを得ない……不幸にも犧牲が最後の關頭に至つた場合、われ等に殘された途は、唯だ抗戰の一路あるのみである……」

約言すれば、南京政府は、北支事變の起る五ヶ月前旣に日本に對して「抗戰」の宣戰布告を

たし、北支事變が起つてからは、日支兩國間には尙平和交渉の餘地があるにも拘らず、血眼になつて、國民に對日宣戰布告を發布してゐるのである。

然らば支那側の態度が、抗日から抗戰へと變つた原因はどこにあるか？　換言すれば、日本と戰つても負けないと自負するに至つた原因はどこにあるか？　支那が日本と戰つて果して勝算あるか否かを知るには、先づこれから檢べてかゝらねばならない。

この原因の一つが、青年層の陷り易き向ふ見ずの空論に引きずられた結果であるのは、われ〳〵は既にこれを說いてきた。

かゝる空論が有力視さるゝに至つた一つの原因は、支那の官民が近時に於ける自國の跋行的發達に慢心して、自己陶醉にかゝつた結果である。

なるほど支那近時の發達は劃期的のもので、國內に於ける諸般の建設、軍隊の統制並に中央政府の組織化に伴ふ國內の統一は目覺ましきものがある。しかしながらこれ等の發達は以前の混沌時代に比較しての話しであつて、これがため支那は國家の完整を遂げたものでもなければ、國民性が全然一變したものでもない。中堅層の躍進的氣魄の旺盛なる反面には、國家として幾



多の脆弱性を存し、國をあげて强敵と戰ひ得るほど國力は增進してゐない。このことは上層指導者もこれを熟知してゐる。不幸にして誤つた國內宣傳を濫發し、國民をして一擧に外敵を屠り得るかのように誤信させたのみか、その宣傳の藥がきゝ過ぎたのと、赤い共產黨と手を握つたゝめに、今は自繩自縛に陷つて、止めんとしても止めることの出來ない窮境に陷つてゐるのが支那の現狀である。

支那人が增長した他の一つの原因は、日本に對する認識の錯誤から、日本與みし易しといふ悔日の感念から來るものである。

日本は滿洲事變以來孤立に陷り、殆んど包圍された形になつてゐる。國民の負擔は增し、それに國內には相剋關係があつて、外交もとかく統制を缺いだ憾みがあつた。この形勢を平面的に觀察するときは、日本にも若干の脆弱性が無いでもない。しかしながらこれはあくまでも平面的の觀察であつて、一たび對外問題が起れば、日本民族は悉く一致して異常の能力を發揮することは、今度の北支事變が何よりの證據である。この日本國民の特有的心理狀態は、外國人にはなか〳〵に判らないものとみへて、日淸戰爭當時の支那でも、日露戰爭當時のロシヤでも

誤算をした。その認識不足を現在の支那が繰返しつゝあるのである。

第三の原因として擧ぐべきは、支那がソヴェット・ロシヤの軍備を買被つた結果、こゝでも亦日本與みし易しと考へた認識不足である。

支那が日本と戰ふ場合、外部から兵力を以て支那を援けてくれるものは、英・米・ソの三國であるとは、支那人の一般的な考へ方である。然るに英米の方は歐洲方面の事情や軍備の擴張が完整せないので、今直ちに支那を援けるものとは思はれない。然るにソ聯の方は日本と政治的にも思想的にも對立して居り、それにいろ〳〵な事件までも起つて、ソ滿國境方面では血腥き戰鬪が繰返され、一觸卽發の關係にある。

そのソ聯はソ滿國境に大軍を集中して日滿兩國を脅威し、モトロフにしてもウオロシロフにしてもトハチェフスキーにしても、責任ある軍事當局は、ロシヤの戰備は完整したと傲語し、この上は如何にして犧牲を少くして勝つかを研究するのみだと放言するものだから、支那人は額面通りに受取つた。そして支那が起つて武器をとれば、ソ聯は當然に支那を援けてくれるであらふ。さもなくて日ソ間に先づ戰爭が起つても、支那は何も心配する必要はない。滿洲を奪



回する時期は刻々に近づきつゝありと輕信するに至つた。

勿論支那の識者中には、日本はソ聯に負けるものでないと信ずる者も相當にあるが、ソ聯の國內事情が外部に漏れることを一切禁じてゐるのと、ソ軍の首腦部が傲語するので、大部分の支那人は、日本の武力は到底ソ聯に對抗し得ないと考へたようである。

然るにソ聯では合同本部や併行本部事件が起り、又トハチェフスキー元帥銃殺事件などが起つて、內部の脆弱性が暴露し、ソ聯に日本と戰ふの力なきことが明るみへ出された。しかし、一度支那人の頭にしみこんだ侮日は一朝一夕にして拔げるものではない。彼等は尙もソ聯を健康體と考へて、武力的援助を期待してゐるのである。

次に指摘せねばならぬのは、支那に對する英米の經濟的援助である。支那ではこれを以て、支那自身の國力を增進せしむるため、英米が眞摯に援助しつゝあるものと考へ、これはやがて間接に日本を壓迫する結果となるといふて大喜びである。そしてこゝでも亦これが日本を輕侮する一因となるに至つた。

支那の識者は考へた、滿洲の回收を如何にヒステリー的に叫んでも何等の効果はない。畢竟

國力の增進向上をはかり、實力を以て滿洲を奪回し得るでなければ、滿洲回收の如きは一片の夢である。その國力の向上をはかるには、國民精神の作興とともに、物質的には經濟建設によりて、日本に對抗し得る國力を養はねばならぬ。これがためには外國の經濟力を利用するのが最捷徑であると。支那はこれ等の考へから英米に接近し、又ドイツとも親善關係を結んで、列國の經濟援助を誘致するに大童である。

だが當の支那人は、列國の經濟援助を熱望するのあまり、相手の英米などは如何なる魂膽から支那に經濟的援助を與へつゝあるかを忘れてゐる。日本の國力の增進をねたむ英米は、日支を爭はせておけば、日本の國力はそれだけ發展を制限さるゝことをよく心得てゐる。しかしながら日支が度をこへて相戰ふことになれば、支那の經濟は崩壞し、その結果は英米の對支投資が臺なしになるのみか、對支貿易も滅茶〳〵になる。ゆへに英米の望むところは、支那への經濟及貿易上の發展に害にならぬ程度に、日支關係が惡化することである。日支が爭へば日本の對支貿易が阻害され、それだけ英米の對支貿易は盛んになる。これが英米等の狙ふところである。





然らば英米の自己本位主義の對支經濟援助は、支那のためになるかといふに決してそうではない、元來經濟發展の背後には政治的意味が包藏されるもので、純然たる經濟發展は意味をなさない。されば支那が日本を抑へるために英米に經濟的發展を許せば許すほど、終には背後に潜む政治的意義のために縛られて、二進も三進もつかぬ結果となることは明々白々である。この明白なる事實を忘れて、支那人が有頂天になりつゝ、英米の經濟援助を楯に、日本を輕侮しつゝあるところに、支那の對日抗戰の一原因が潜んでゐる。

支那人は今や國力を過信して自己陶醉に陷り、日本を輕侮しながら、自ら噴火山上に亂舞しつゝある。これが現在の支那である。

こゝに支那崩壞の危險がある。

# 第二篇

## はにるす屈を那支


1 支那の狙ふところは?

(1) 三つの目的

(2) 雑軍一帯の計畫

2 支那は單獨で本日戰ひ得るか?

(1) 支那の軍陸と素質

(2) 支那の隊軍と武裝

(3) 支那の空軍

(4) 國防資源の現況

3 支那の作戰計畫を檢討する

(1) 支那の北方面軍

(2) 支那の防禦線

(3) 支那の側對日戰略

4 支那を屈するには

(1) 日本は支那を征服し得ないといふ輿論の所

(2) 支那人の妄想

## 一　支那の狙ふところは？

### (1)　三つの目的

われ〳〵は前數章に於て、支那の排日が抗日となり、最近には對日抗戰となつて、一戰敢て辭せずと傲語するに至つた經路を述べてきた。この風潮にのつた蔣介石は、今度の北支事變が起ると、一國の獨裁者としては、殆んど冷靜を失つた態度を以て國民に訴へ、恰も宣戰布告文のような聲明を發して、必要以上に强硬態度を裝ひ、汪兆銘亦これに和して、支那人獨有の眦を裂くような演說を行ひ、こゝにも亦一戰敢て辭せざる態度を示してゐる。

他の一方に於ては、中央軍は漸次に北上して、その一部は河北省内に入り、われに對して挑戰的態度を示してゐる。卽ちそれ等の中央軍は、事變突發直後の七月十日頃より、平漢鐵道に沿ふて逐次北上を開始し、二十二三日頃には、河北省に進入せる兵力約七萬を算ふるに至つた。

これ等の中央軍は、保定から以南河北、河南兩省の省境附近に亘つて集中し、その前方良鄕（蘆溝橋南方約四里）附近に亘る間にゐた河北省在來の舊東北軍系たる萬福麟、馮占海の軍約三萬とともに、昨今は前方に詰めかけてゐる狀況である。その後方鄭州附近にも、各方面から兵力を集めて、現在では約十二三萬に達してゐる。

次に津浦鐵道方面では、徐州及海州に約四五萬のものがゐる外、最近には濟南附近にも若干の中央軍が進入してゐる。中央軍中の最精鋭部隊たる南京軍官學校の敎導部隊も既に出動したと報ぜられてゐる。

次に支那の空軍は、まだ一度も平津地方に現はれては來ないが、戰鬪準備は隴海鐵道沿線及びその以南に於て、着々實施されてゐる。

南京政府は又從來稍もすれば態度の曖昧であつた山東の韓復榘、山西の閻錫山をも口說き落して、綏遠方面の博作儀とともに、日本軍に當らしめんとしてゐる。

以上が最近の情勢である。一言にしていへば、北支方面のわが軍は、東西南の三方面から包圍されんとしてゐるのである。



然らば南京政府は本氣になつて日本と戰ふつもりであるか？

つら〳〵南京政府のとり得る對策を豫想するに、恐らくは左の三つを出でないであらふ。

一　日本と戰つて勝算ありとの確信の下に、斷然日本と一戰するか。

二　速戰卽決主義は、支那側に不利なりとの理由の下に、持久的消耗戰を計畫し、消極的抵抗戰を試みるか。

三　この機を利用して態度の不明なる雜軍を整理し、國內の統一に邁進するか。

右の中第一は眞に日本と決戰せんとするもので、これには次の三つの場合を考へ得る。

(1)單獨に日本と戰ふも勝利ありと考ふるか。

(2)ソヴエット・ロシヤよりの兵力的援助を期待し得るか。

(3)列國殊に英米よりの積極的對日干涉を期待し得るか。

第二は長期抵抗による消極的抵抗戰を試み、又共產軍と聯携して人民戰線を形成し、かくして日本が戰ひに疲れるのを待つか、又はその間に列强の對日干涉を誘致せんとするものである。

第三は、この機を利用して舊二十九軍や舊東北軍、山東の韓復榘、山西の閻錫山などの雜軍

を整理し、國内の統一に邁進しつゝ、日本に對しては、從來のように長期抵抗を試みるか、又は第二の消極的抵抗戰を試みんとするものである。

支那がソヴエット・ロシヤよりの兵力的援助又は英米よりの積極的對日干渉を期待し得るか否かは、これを後篇に說くであらふ。こゝではそういふ小兒病的期待は、一片の空想に過ぎないことを一言するに止めておく。

支那は一種異樣の國柄である。そこではわれ／＼が常識で考へ得ないことが平然として行はれる。第三に揭げた雜軍の整理といふ火事場泥棒的のやり方がそれだ。これは支那式の戰爭を知る上に必要であるから、次には先づこれから說いてみよう。

## (2) 雜軍一掃の姦計

日支間に事變が起つて、いよ／＼戰爭になると、日本軍の鋒先を利用して、中央政府に灰色の態度をみせてゐる雜軍を掃滅し、これで國内の統一を圖るのは、いつもながらの蔣介石のやり方である。彼は抗日を利用して國内の統一もやれば、日本軍を利用して雜軍の整理もやる。





この兩刀使ひがかれの奥の手であるのだ。

かれはこの手を利用して、これまで二回雜軍の整理をやつてゐる。第一回は上海事變の際の十九路軍であり、第二回は熱河戰での舊東北軍及舊西北軍である。二度あることは三度あるといふから、今度の北支事變なども、また／＼この手であるかも知れない。

上海事變のときには、蔣介石は已にとつて隱然一敵國の觀があつた十九路軍をして、日本軍にけしかけ、遂に上海事變を起させた。然るに蔣介石の中央軍はどうかといふに、十九路軍の後方にあつて、しきりに同軍をけしかけるだけで、中央軍自身は出で〻戰はうとはしない。否かへつて十九路軍にして退却するならば、中央軍で打ち潰ぶすぞといふ態度をとつた。かくて十九路軍はわが軍のために打ちのめされて敗走したが、南京政府はけろりとした顏で日本との間に上海停戰協定を結んだ。その十九路軍は負けたといふので、その後福建に移駐させられたが、怨みをのんだ十九路軍の首腦部は、この後西南派の陳銘樞、李濟琛等と結托し、福建に獨立の一旗をあげたが、不幸蔣介石のために一たまりもなく潰滅した。

一九三三年二月の熱河戰では、蔣介石は舊東北軍や舊西北軍を煽つて抗日一戰せしめた。當

時熱河の主人公は湯王麟で、かれは滿洲國に歸順したい氣持ちももつてゐた。これを知つた蔣介石は、財政部長の宋子文をわざ〳〵承德までやつて慰問激勵させ、三百萬元の金をばらまいて日滿軍に抵抗させた。湯は平津に多大の財產を隱匿してゐたから、それも惜しかつたであらふ。これ等が手傳つて、遂に南京政府に與みした。

ところが舊東北軍が日本軍にたゝかれて河北になだれこむと、やがてこれを甘陝荒蕪の僻地に追ひやり、張學良には剿匪副司令といふ有りがた迷惑の職を授けて、東北軍の自滅をはかつた。その結果于學忠等の憤懣となり、爆發して西安事件となつた。西安事件は、一面からいへば福建事件と好一對であつて、蔣介石の姦計に對する復讐戰に外らない。

然らば今度の北支事變ではどうかといふに、蔣介石はわが軍に敗られた宋哲元の二十九軍を第一線に立て、舊西北系舊東北系の傍系軍を第二線に立て、自己直系の中央軍は第三線に配備して、先づ第一第二線の雜軍をわが軍にだゝかせようとしてゐる。

二十九軍がわが軍の猛擊にあつて敗走すると、蔣介石は七月二十九日夜新聞記者との會見に於て、二十九軍の敗北を責め、これを次のように言明した。



「平津方面に於ける二十九軍の交戰は完全に敗北に歸した。余は軍事委員長として且行政院長として、右の慨歎すべき狀態につき全責任を負ふものである。

蘆溝橋事件發生とともに、余は宋哲元に對し、即時保定に赴くよう命令したが、宋は右の命令を無視して天津に赴いた。華北の情勢惡化を傳へるとともに、中央軍は北上したが、宋の再三の要請によつて、一定地點に於てその北上を停止した。その結果宋が結局抗戰を決意した時には、日本軍に對して組織ある抵抗を試みることが出來なかつた。既に北平に通ずる交通線は悉く日本軍の掌中にある。宋哲元又何等効果的抗爭の用意が出來てゐなかつたから、七月二十六日以後今日に至る事態は蓋し當然の結果である。

しかしながら平津地方の戰鬪は、まだ本格的戰鬪といふを得ない。組織的抗爭はまだ開始されてはゐない。政治上歷史上の中樞地點たる北平を喪失したことは、勿論重大打擊ではあるが、軍事的見地からみれば、必ずしもしかく重大ではない。故に全國民は今回の敗北によつて失望落膽することがあつてはならない。

日本政府は川越大使へ訓令して、交渉開始のため南京に急行するよう命じたと傳へられる

が、現狀のまゝに於ては、如何なる交渉にも應ずることは出來ない。日本政府が、去る十九日の聲明に於て余の闡明した最低限度の立場卽ち四ヶ條を承認せざる限り、中央は斷じて交渉に應ぜない、更に今後は地方的解決なるものは絶對に許さない。今や事態は全國的問題となつて居り、中央政府によつてのみその解決をはかるべきである。

中國は戰場に於て最後の勝利を得ざる限り、日本をして支那の權益を尊重せしむることは出來ない。また名譽ある平和と正義をも確保することは出來ない。全國民は擧國一致國力と民力とをあげて、民族的抗戰に邁進せねばならぬ」

この聲明は、二十九軍の敗北は余の責任であると蔣氏自ら云ひながら、宋哲元の罪狀を完膚なきまでに糾彈したものであるから、蔣氏自身の責任はそれで免れた形になる。換言すれば、二十九軍整理の口實は旣に出來上つてゐるのである。

もし蔣氏にして眞に日本軍と戰ふつもりであるならば、わが軍に打ちのめされて戰々兢々たる狀態にある二十九軍の殘兵を第一線に立てるよりも、蔣氏直率の中央軍を先頭に立てゝ戰ふのが至當でないか。然るに蔣氏は中央軍を三線に引きこめて殿軍となすのみか、宋哲元からの





速かに中央軍を援助されたしとの電報も握りつぶし、依然として形勢觀望の態度をとつてゐる。これでは宋哲元も怒るにちがいない。果してかれは憤意のあまり辭職の電報を南京政府に打たせ、病と稱して姿を隱してゐる。

そういふ有樣では、中央軍はほんとうに戰ふつもりであるのかと、宋哲元が迷ふのも無理はない。もしかしたら上海事變の十九路軍や熱河戰の舊東北軍の二の舞ひを演じはしないかと、かれがかれ自らを疑ふのも尤もなことである。

しかしながら中央政府の眞意を疑ふものは、只だ一人宋哲元のみではない。山東の韓復榘も、山西の閻錫山も、保定の萬福麟も、煎じつむれば同じ惱みを抱くことは免れない。從つて南京政府の眞意を見屆けなければ、うかとは動けないといふのが、かれ等の眞意であらふ。

しかし蔣介石になつてみれば、雜軍の整理も必要であるし、先づこれ等の雜軍を日本軍と戰はせておいて日本の戰鬪力を弱め、日本が弱つた時機に中央軍の精鋭を以て日本軍と決戰する方が得策であると考へて居るかも知れない。これ卽ち長期に亘る抵抗を意味する消極的消耗戰であつて、その結果は却て支那を崩壞せしめ、南京政府權瓦解の本となるのは後述する通りで

ある。

この雜軍を第一線に立たせ、中央軍を第三線においてお目付役となし、かくして雜軍に背水の陣をとらせる蔣氏の戰法は、支那一流の戰略で、何も蔣氏に始まつたものではない。

例へば孫子の如きは、九地篇に、

「帥ねて之と期すること、高きに登りてその梯を去るが如し。帥ねて之と與に深く諸侯の地に入りて、この機を發すること、群羊を驅るに、驅りて往き、驅りて來り、ゆくところを知るなきが如し、三軍の衆を聚めてこれを險に投ず、これ將軍のことなり。九地の變、屈伸の利、人情の理、察せざる可らざるなり」

と說いてゐる。この意味は、軍を動員したときは、全軍の士卒に對しては、たとへば高いところに昇らせて下から梯子を取り去り、下りることも逃ることも出來ないようにしなければならぬ。又軍を率いて諸侯の地に深く侵入したならば、機から矢を發するように士卒を拋り出し、恰かも牧夫が鞭を以て群羊を追ひまわし、驅られては彼方へ行き、追はれては此方へ來るといふやうに、何の目的を以て軍が動くのであるかを知らしめないやうにせねばならぬ。かくの如



くして、三軍の大衆を聚めたまゝ、これを死の淵ともいふべき危險なところに投ずるやうにするのは、將軍の爲すべきことである。これが卽ち散地、輕地、……など九地に於ける用兵上の變化であつて、しかも兵卒を統卒する屈伸の途であり、人情の機微を穿つた理法である。以上のことは深く考へなければならぬといふのである。

孫子の說くところのこの戰略は、實に陰險惡辣であつて、正義の士は斷じて與みせない。高きに登りて梯を去るが如しとか、群羊を驅るが如しとか、これが三軍統帥の要道であるといふに至つては、たゞ〳〵驚き入るではないか。それを蔣介石は平然として斷行する、そこに支那人特有の心理狀態がうかゞわれるのだ。そういふ筆法でゆくから、滿洲を喪ひ、北支那までも失ふことになるのである。

蔣介石の戰法は、斷じて正義の士のやり方ではない。

## 二　支那は單獨で日本と戰ひ得るか

### (1)　支那の陸軍と素質

支那人は日本と戰つても負けないと思つてゐる。然らば彼等は眞に單獨で日本と戰ひ得るのか。もし戰ひ得るとしたら、如何なる作戰計畫をとるか？　これを豫想するために、こゝに先づ支那自身の國防力を檢討してみよう。

支那の陸軍は、中央軍、及びその他の雜軍を合せ、總計二百餘師兵力二百餘萬で、これを大別すれば次のやうになる。

| | | | |
|---|---|---|---|
| (1) | 中央直系軍 | 約四七師 | 兵力約四八萬 |
| (2) | 中央傍系軍 | 約四五師 | 約四六萬 |
| (3) | 舊東北軍 | 約一五師 | 約一一萬 |
| (4) | 廣東軍 | 約一〇師 | 約一二萬 |
| (5) | 廣西軍 | 約七師 | 約五萬 |
| (6) | 宋哲元軍 | 約四師 | 約八萬 |
| (7) | 山西軍 | 約八師 | 約九萬 |
| (8) | 山東軍 | 約五師 | 約六萬 |
| (9) | 萬福麟軍 | 約三師 | 約二萬 |
| (10) | 馮占海軍 | 約一師 | 約二萬 |
| (11) | 四川諸軍 | 約二六師 | 約二五萬 |
| (12) | 其他邊境軍 | 約一五師 | 約二六師 |
| | 計 | | 約二〇〇萬 |

かように數の上からみれば、支那は約二百萬の陸軍をもつてゐるが、しかしその大部は近代國家の組織的國防軍と同一視することは出來ない。たゞこの中で蔣介石直屬の整理師團四十八萬位のものは、國軍としての體裁を備へ、その內容も充實してゐる。たゞし對外戰となれば、

支那總兵力の大部をこれを使用することは可能であるが、その價値には大なる疑問がある。

次は支那軍隊の素質である。これは各部隊によつて著しき相違があり、齊一でないところに、その特色があるといへる。例へば蔣介石直屬の中央軍などは、ドイツからフォン・ゼークト將軍を軍事顧問に招聘し、同將軍は約六十名の將校を率いて渡支し、熱心に國軍の建設に着手したゞけあつて、その素質は中々に良好である。

この整理師團の師團長は、いづれも黄埔軍官學校の第一期第二期卒業生に限られ、旅團長、聯隊長、その他の幹部の大部も軍官學校の卒業生である。

これ等の師團長は精々二年か三年で更送させられる。それは、從來の支那軍隊には、上官と部下との關係は封建時代の親分子分的なつながりであつて、軍隊は全く上官の私兵たる觀を呈し、中央政府の統制が及ばなかつたものである。そこで蔣介石は、この部隊に對しては、師團長の瀕繁なる更迭を行つて私兵化を避けることにした。

これ等二十三個の整理師團は、蔣直系の三羽烏といはるゝ陳誠、顧祝同、劉時の三巨頭に分轄させ、その上に何應欽、そのまた上に蔣介石が統轄してゐる。





中央軍直系以外の各種雜軍に至つては、編成も素質も訓練等も全く區々で、命令系統からいつても雜然たるものがあり、甚だしく統一を缺いでゐる。だがその一部は再編成されて國軍化されたものもある。

雜軍の中でも、比較的眞面目に訓練されたものは山西軍である。綏遠の傳作義軍が、內蒙古の戰鬪で百靈廟をとつたなどは、かゝる眞面目な訓練の結果である。一體山西軍は兵工主義といふのをとつてゐる、兵隊が總ての工業をやるといふ意味である。だから兵隊には平時は鐵道や道路をこさへたり、地方開發事業もやらせる。この方法は軍備の經濟化といふ點からみればいゝようであるが、そのために軍事教育は勢ひ行屆かない。

次は廣西軍だ。これは蔣介石の中央化工作の壓迫をうけて、二三年前廣東派と連繫しつゝ反蔣軍を起そうとしたが、中央軍に敵はないのと、蔣の切崩し策に負けて、今では表面上は南京についてゐる。廣西省は兵隊が少いので全省の人民が皆兵になる、女まで兵になるといふ徹底ぶりだ。それに訓練も亦行屆いてゐる。始めは日本から教官を招聘したものだが、後に排日になつたので引上げた。それに青年團、婦女團をこさへて、これにも教練を施してゐる。

以上は雜軍中の特色あるもの二三を引拔いで、その素質を述べたものであるが、しかし雜軍中には如何がわしいものも多數に混つてゐる。まかり違へば共產軍ともなり、又土匪ともなるといふ連中も相當にある。

## (2) 支那軍隊の武裝

以前では支那陸軍の武裝は著しく劣り、兵隊の數よりも鐵砲の數が少く、鐵砲の數よりも彈丸の數が少いと云はれたものだ。實際小銃をもつたものは兵隊の一部に限られ、しかもその小銃も新舊とり混ぜたものであつた。殊に大砲や機關銃などは極めて少く、本とうの戰鬪は勿論出來なかつた。そこで鐵砲を打たない對峙戰をやつたり、金で相手を買收したりして、それで敵に勝つといふ變てこな戰さをやつたものである。

支那で軍隊の武裝が一番早く改良されたのは張作霖の奉天軍である。そこは日本とたへず觸接し、それに張作霖の懐中も、他の督軍連に比べては豐かであつたから、大砲もかへば小銃も新式のものを買ふ、飛行機も買入れるといふ有樣で、支那の軍隊中では、奉天軍が比較的新式





の兵器をもつてゐた。第二奉直戰のとき、奉軍が勝利を得たのは、優勢なる砲兵の力であつた。それから昭和五年の反蔣戰には重砲が現はれて陣地戰で効力を發揮し、飛行機も活躍した。

現在の支那陸軍の武裝は　小銃は概ね整備してゐるが、中には軍隊の半數位しかないものもある。しかもその小銃も新舊まち〳〵で、日本の三八式などはまあい〻方である。もつと古いのになると前込銃をもつてゐるのもある。

しかし蔣介石直屬の中央軍だけは流石に整備して居る。或る師の如きは小銃二七〇挺、重機關銃九〇挺、歩兵砲約三〇門、追擊砲約三〇門、野山砲三〇門、拳銃約四〇〇挺をもつてゐる。

總じていへば、野砲、山砲は餘りもつて居ない。山砲をもつてゐるのは旅團以上で、支那全國で四個旅團位しかない。砲兵も割合に少く重砲もその數は少い。裝甲車はこれを有するものが一・二隊あつたが、裝甲車、裝甲自動車は最近著しくその數を增した。又最近防毒具も準備中で、鐵兜も平常から冠つてゐる。

支那の武器は、多くは海外から輸入されたもので、支那內地では、軍隊の需要を充たすだけの工廠能力はない。かように支那の武器は外國から輸入されたものが多く、軍閥連はこれを利

用して勢力爭ひの具に供したから、武器の輸入は支那の內亂を助長する虞れがあるといふので、一時は列國間に武器彈藥禁輸の協定が出來たものだ。しかし密輸は依然として行はれ、中にもイタリーなどは最も甚だしかつた。歐州大戰後はこの禁輸協定が廢止されたので、武器の輸入は自由となり、各國は競ふて武器の輸出をなしつゝあるが、その最も甚だしいものは獨伊の二國である。

支那で兵廠のあるのは、南京、漢陽、成都、重慶、廣州、太原、杭州位で、その中でも、南京のものは修理工場である。目下南京政府は、湖南省の長沙から南に下つた株州といふところに、軍需品の修理場をつくつてゐる。これ等の工廠は主として小銃、機關銃を製造し、又各種兵器の修理を計つてゐるが、その能力は甚だ低い。例へば支那最大の工廠であり、最近米國から新式機械を買入れた漢陽兵工廠でさへ、小銃彈一日十三萬發、騎兵銃一ケ月二百、モーゼル式ピストル一ケ月百、ブローニング水冷式機關銃一ケ月五十位の製造能力に過ぎない。その他はおして知ることが出來る。





## (3) 支那の空軍

南京政府は、滿洲、上海事變の苦き經驗から、航空救國を高潮し、主としてアメリカの援助の下に空軍の大擴張を圖つてゐる。

中央所屬の飛行機は、上海事變當時は僅に陸上七隊、水上一隊計百機に過ぎなかつた。しかもその飛行機は、事變中は遠くへ逃避して漸く全滅を免れた位である。

この苦き經驗をなめた蔣介石は、空軍の刷新と國民の航空智識普及に專念し、航空三年計畫を立てゝ擴張へと邁進した。即ち昭和八年三月十六日、南京政府はアメリカと密約を結び、昭和十一年末までに增加する兵力は、偵察機三五〇機、驅逐機三〇〇機、輕爆機二〇〇機、重爆機一〇〇機、合計約千機に及び、それを七乃至八聯隊に編成するものである。その後張學良のイタリー訪問以來、同國の進出も著しきものがある。

現在南京政府の有する空軍兵力は、中央軍約八五〇機、その他の空軍約九〇機計九四〇機に達し、これに豫備機を加へると、約一二〇〇機に達してゐる。そのうちで第一線に使用される

ものが約三〇〇、第二線卽ち黃河流域に使用されるものが約二五〇機である。その他のものは十分な戰鬪力をもたない。從つて實戰に使用し得るものは、戰鬪機と偵察機が各々二五〇 爆擊機は五〇機位であらふ。

操縱者の數は、現在支那人約九〇〇名で、その大部分は杭州及び廣東の各航空學校で教育をうけたものである。これ等支那人操縱者の操縱技術は逐年進步し、最近に於ては、航空學校教官に右の支那人を多數任用してゐる。又空軍の建設維持に關しては、中國航空協會を組織して、その活動により、防空思想の普及並に民間航空獻金の吸收につとめ、現に蔣介石氏の祝壽獻納機の如きも、約九十機に達してゐる。

次に民間航空の主なる會社は、中國航空（米支合辦）歐亞航空（獨支合辦）西南航空（官民合辦）の三社である。その所有機は三十餘機で、その大部は大型優秀機である。

支那は黃海、支那海方面にかけて幾つかの飛行場をもつてゐる。例へば北から數へて、靑島、海州、上海、杭州、厦門、廣東などがそれである。それ等の飛行根據地は、日本と戰ふ場合、日本本土や臺灣等を空襲する根據地となり得るものである。しかしながら空襲そのものは、實





際の被害よりも寧ろ人心の恐怖の方が効果多く、從つて冷靜なる態度を保てば空襲敢て恐るゝに足らない。これを戰爭の本質からみても、空襲そのものは戰爭の勝敗を決するものではない。從つて敵の空襲をうけた場合には、徒らにこれを恐れるよりも、主戰場に於けるわが軍の勝利を促進する心掛けをもつのが戰勝の要件である。

## (4) 國防資源の現況

支那は人的及物的資源に惠まれてゐるが、人多くして良兵なく、物多くして必要なる物品がない。これが戰爭に對する支那の最大なる弱點である。

その財政狀態の如きも、平時豫算そのものが既に尨大なる赤字に面し、外國からの借款によつて漸く辻褄を合せてゐる。そういふ狀態にある國民政府の財政が、一度戰時狀態に陷つたとき、更に不安定性を增すのは云ふまでもあるまい。

元來支那に於ける財政收入は、關稅、鹽稅、統稅を以て主要なるものとし、その他の財源は、菸酒稅、印花稅、國有營業、並に所得稅で賄つてゐる。その中でも關稅、鹽稅、統稅は民國二

十四年度に於て合計六億五千萬元に達し、總稅收入の六割六分以上である。後の四者は僅かに一割にも足らない。

そこで今戰爭が勃發すれば、各海港は封鎖を受け、貿易は停頓し、關稅、鹽稅、統稅からの收入は著しく減少してくる。それのみか公債市場も混亂して、新公債が發行困難となるから、所得稅や遺產稅、戰時利得稅等の徵集並に一般の增稅等によつて、軍費の財源を捻出する外なきに立至るであらふ。しかもこれ等の增稅には限度があるから、軍費の調達に苦しむ結果は、一般民衆に對する生活の壓迫となり、又外國に對する借款ともなりて、支那は政治的に分割の運命を免れないことになる。

次に軍需資源はどうか？　支那が外國と開戰した場合の狀況について、宇治田直義氏は次のように說いてゐる。

平時支那の鋼鐵需要量は、年額約十萬噸を要する。もし戰時最少限度五十萬の兵を第一線に動かすものと假定し、一人當り鋼鐵三噸を使用するとすれば、百五十萬噸を要する。然るに支那の銑鐵生產額は、每年僅かに十萬噸、鋼材は僅かに一・二噸に過ぎず、殆んど零に等



533110



しい。

次は銅であるが、平時支那の消費料は年約六千噸である。然るに支那の年產額は僅に五百噸に過ぎない。平時既に五千五百噸の不足を來してゐる。もし戰時に於て兵士一人當り二噸づゝを消費するとすれば、五十萬人で百萬噸不足する。

次に飛行機材料たるアルミニユムは、全然外國に仰がねばならぬ、プラチナ、ニツケルなども同樣である。タングステン、アンチモニーの如きは、自給自足し得る資源を有するも、現在の支那には製煉工場がない。

然らば石油は如何、平時支那の石油消費量は、年額百萬噸であるが、戰時には飛行機自動車等が活躍するため、結局五百萬噸を要するも、支那には石油資源が頗る貧弱で、每年僅かに六七百桶を產出するに過ぎない。

これを要するに、戰時支那に於て自給自足し得る物的資源は、僅かに石炭のみで、每年約八十一萬噸と計算されてゐる。

更に軍需品についてみるに、五十萬の軍隊を動かすとして、その使用量は步兵銃五十萬挺、

輕機關銃五千五百臺、重機關銃三千臺、飛行機一千臺、重砲二百門、高射砲二百門、迫擊砲六百門、戰車（タンク及鐵甲車）三千臺を必要とする（張暑天氏による）

以上の計算は稍や大に失するの嫌ありとしても、後續部隊の分は全然計算外におかれてゐるから、必ずしも大に失するとは云はれない。しかも支那にはこれに應ずるだけの準備はないのである。

更に戰時用彈藥についてみるに、張氏の計算によれば、歐洲大戰當時步兵銃は一分間に理論上十二發（實際は十發）の彈丸を發射し、機關銃は百發（實際は二百五十發）大砲二十發（實際は十二發）を要した。これに基いて戰時支那が每日要する彈丸數は、步兵銃四億五千發、輕機關銃八億發、重機關銃四億五千發、重砲二十一萬發、高射砲十六萬發、迫擊砲五十五萬發といふことになる。この補給は現在の支那では夢想だも出來ない。

飜つて戰時軍費を研究してみよう。先づ第一に問題となるのは全支の金保有量である。元來支那に於ける在金根源は(1)古來の蓄積(2)國內の產金(3)外來金の三者を出でない。古來の蓄積金量については、何等的確なる資料がないが、恐らく十八九世紀の間に、その大部を輸出



してしまつたようである。一七七〇年乃至一八九〇年の百餘年間に、支那の金銀比價が一五より二五に昂騰し、更に一九〇〇年までには四〇に達せんとしたことは、海外流出の夥しかつたことを示すものである。過去四十四年間の金輸出入に關する海關統計をみるに、輸出九億元、輸入四億元、差引五億元の出超となり、金は年々流出してゐるものと見なければならない。

次に全支銀保有量は如何とみるに、一九二二年の推定によれば二十二億であつたが、昨年七月末イー・カーン氏が發表した推定額は二十五億とある。但し右計數は過大に失し、實際に於ては十五億內外といふところが適當なる計數であらふ。

もし萬一支那が開戰した場合、どれだけの軍費がいるかといふに、現在約二百萬の軍隊に年三億六千萬元（一九三七年度豫算）の軍事費を計上してゐるから、概算一人年當り百八十圓となる。然るに戰時になれば、如何に支那でも最少限度四五倍の經費がかかるであらふ。そうすれば五十萬を動かすとしても、現在の支那の財政狀態では、全然財源の求むべきものがない。從つて到底本氣に開戰し得る見込みはたゝない。百步を讓つて假令開戰したとして

も、長期に亘る戰爭は不可能である。この意味に於て、支那の宣傳するような長期に亘る戰爭は、たとへ作戰上からは有利であつても、事實上は實現困難と云はれなければならぬ。

以上によつて明らかなるように、支那は兵力に於ても、財力に於ても、國防資源の關係からみても、到底日本の敵ではない。支那が單獨で日本に刄向ふのは、これを譬ふれば螳螂の斧をふるうようなものである。このことは他の何人よりも蔣介石自身が心得てゐるはずだ。然るにも拘らず一戰敢て辭せずと傲語するのは何故であるか？　そも〳〵またかれに如何なる奇策があるのか？

この興味ある問題に答ふるために、われ〳〵は次に支那側のとらんとする對日作戰計畫を檢討してみよう。



## 三　支那の作戰計畫を檢討する

### (1)　北支方面の支那軍

支那の作戰計畫を推斷するには、北支に於ける軍隊の配備と各防禦線の配備如何を知ることが先決條件である。本節に於ては先づ前者を說いてみよう。

八月初旬に於ける中央軍及び雜軍の配備は概ね次のようである。

宋哲元の第二十九軍は、北平方面でわが軍に打ちのめされて以來、南方に退却して、今は保定とその以北の地域に集中されてゐる。この二十九軍は對日戰爭に於ける最前線部隊となるもので、或る意味からいへば、蔣介石から懲罪の意味で背水の陣を布かせられたものである。

次には馮占海の步兵一ケ師團が保定附近にゐる。その南には商震の第三十二軍がゐる。この軍隊はもと河北省の南部に居つたが、中央政府の命令で北進し　今は正定附近にゐる。又別に

保定と石家庄間に居つた舊東北軍系の萬福麟軍は、これも中央の命令で保定附近に向ひ集中中である。その外に山西軍に屬する劉健群の第四十軍も保定の方に前進してきた。この軍は從來石家庄から太原までの鐵道沿線の守備に任じてゐたものである。

次には從來徐州、開封、鄭州方面にあつた軍隊の一部が、鄭州から北に向つて彰德といふところにきてゐる。こゝには彰河といふ河があつて、これに添ふて堅固な陣地が構築中である。

平漢線を更に南下すれば、黃河を中心として、その南北地區には、約十萬の中央軍及雜軍が、東西南の三方面から集中されてゐる。

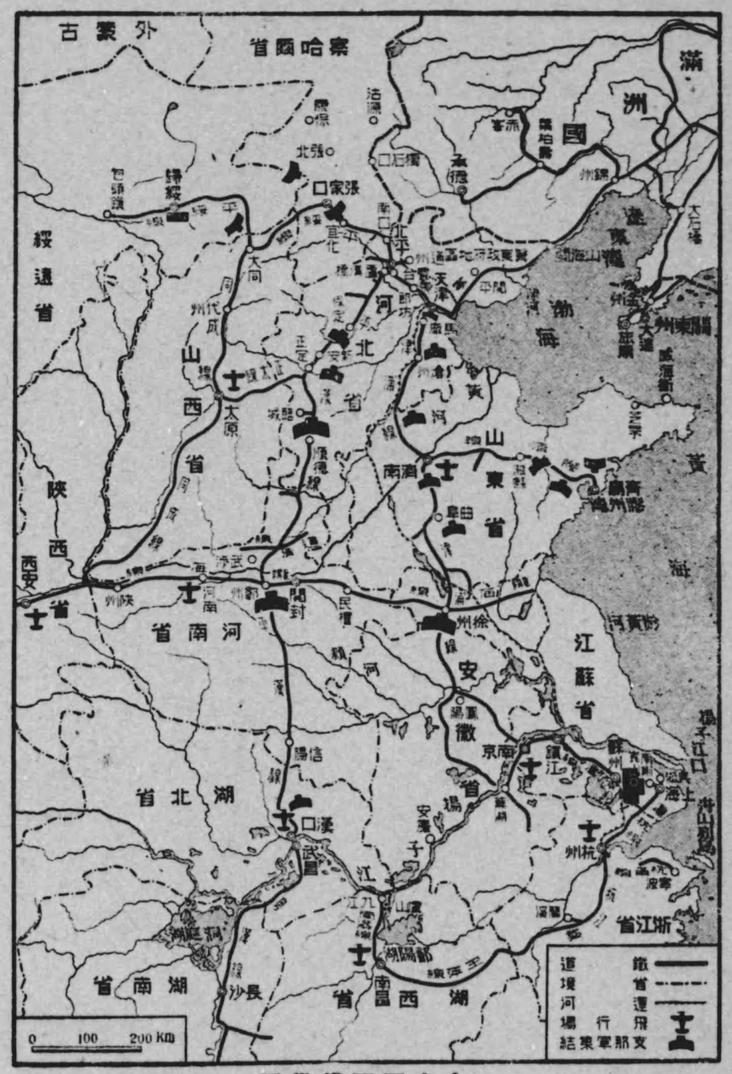
次に津浦線方面をみれば、山東省と河北省の境にある德州には、韓復榘が南京政府からの命令により、約一ヶ師團ほど出して陣地を拵へてゐる。その韓復榘は、山東方面に五師約六萬の兵を擁し、中央との諒解なつて對日戰備を急いでゐる。

更に下つて津浦線上の海州、徐州方面には、約四五萬の中央軍及雜軍がゐる。

又山西省には、閻錫山の第三十四及三十五軍九萬の兵が、これ亦中央の命により石家庄方面に向はんとしてゐる。又山西省の北部綏遠の方から山西省に入つた平綏鐵道の大同には、先頃








中央軍配備狀況

の内蒙事件で派遣された中央軍が二ケ師ほど居るが、これ亦中央の命令で南下しつゝある。

以上は北支方面にある支那の軍隊である。これによつてみれば、同方面にあるわが軍は、南と西の二方面から包圍された形である。

だが一たび日支間に全面的の戰鬪が起るならば、陝西省にゐる毛澤東、朱德などの共產軍も、或はこれに呼應して起ち、山西省や綏遠省なりを通過して、北支や滿洲國を脅かす可能性がないとはいへない。既述したように、北支事變が起ると間もなく、彼等は蔣介石に對して、對日國防の第一線に立つべしと電報してゐるのである。後方攪亂を狙ふこの種のゲリラ戰は、空襲と同樣、戰爭の勝敗には根本的の影響を及ぼすものではないが、たゞうるさいだけそれだけ、稍もすれば主戰場より兵力を割いて、これが掃蕩を餘儀なくさるゝ場合なしとも限らない。かくの如きは明らかに作戰の本旨にもとるものであるから、豫め萬全の策を講じておくことが肝要である。

## (2) 支那の防禦線





蔣介石は、昭和十年九月、新たに對日作戰計畫を立て、これに伴ふ諸般の準備を完成しつゝある。

この作戰計畫は、日本軍が北方の大陸方面と東方の海上方面から攻めてくる二つの場合を豫想し、これに對してそれ〳〵防備施設を講じてゐる。

先づ第一に北方から攻めてくる日本軍に對しては、

(1)彰河線——彰德附近の彰河の線を第一線として、こゝに本防禦線を構築中である。

(2)隴海線沿線——海州、徐州、開封、河南を連ぬる地域に亘るもので、これが第二防禦線である。

(3)揚子江下流地區——上海より宜昌に至る長江沿岸一帶の防禦線で、主力は上海南京間、武昌岳州間においてある。これが第三防禦線である。

(4)揚子江上流地區——宜昌より重慶に亘る防禦線で、揚子江兩岸約二三百米毎にトーチカを造つてゐる。これが第四防禦線である。

次に東方海上より來るものに對しては、

(1)揚子江沿岸の要塞修築――吳淞、鎭江、通州、南京、蕪湖、安慶、九江、武昌、湖口等の各要塞及砲臺を改築又は增築した。殊に首都南京を中心とする要塞及砲臺は、從來主として西方又は西北方に向つて施設されてゐたものを、日本に對するため、悉く東方に向けて改築された。

(2)江蘇、浙江、福建地區――黃海方面、並に臺灣に對する防禦で、海州附近、杭州、臺州、溫州間、福建に於ては、建甌、沙縣、連城等に要塞又は砲臺を造築した。

次に空軍の配備をみると、保定から山東方面にかけた一線を第一線とし、隴海線を第二線としてこゝに主力をおき、その後方揚子江方面に第三線をおいてゐる。

即ち保定の郊外には立派な飛行場があり、山東方面の濟南、青島の飛行場とともに第一線を形成してゐる。

隴海線では、海州、徐州、鄭州、開封、洛陽、西安に軍用飛行場があり、洛陽はこの方面に於ける軍用飛行機の根據地で、總ての設備が出來てゐる。

第三線では平漢線の漢口、津浦線の後方南京に飛行場があり、この兩方を連ぬるために、南昌に飛行場をおき、洛陽の飛行場と同樣、總ての設備を完備してゐる。

以上の外に海岸の方では、北から數へて、青島、海州、上海、抗州、厦門、廣東に飛行場がある。

以上によつてみれば、支那側の配備は、北支方面では、雜軍を主として、それに中央軍の極めて一小部分を混ぜて、平津方面にあるわが軍を西と南の二方面から包圍し、彰河の線を第一線として南方へ數段の防禦線を形成し、空軍の主力はこれを隴海線附近においてゐる。更に東方海上から來攻する敵に對しては、揚子江流域方面を重視して要所々々に要塞と砲臺を構築し、又黃海・支那海沿岸の要所にも防備施設を施してゐる。

## (3) 支那側の對日戰略

次に掲ぐるものは、上海復旦大學文稿社編纂の「文稿」にのせられたものの一節で、支那の對日戰略を推知するに有力なる資料である。

「敵軍（日軍）の戰鬪精神を打破し、その防禦工事構築等を阻み、更に敵軍の根據地を掃蕩

して、短期間内に主力を撃破し、速かに失地を回復するためには、われ等はよろしく徹底的殲滅戰を以て戰爭を開始しなければならない。

平津一帶に於ては迅速に大軍を集中し、敵軍の後方連絡線を遮斷し、その根據地に突擊して敵を包圍殲滅する。華中華南に於ては、敵の攻擊前に陸海空軍聯合作戰により、揚子江、湘江、閩江、珠江内の敵艦を掃滅し、江口を封鎖して敵艦の侵入を阻止すると同時に、漢口及上海の陸戰隊を掃蕩して、内部の脅威を除去する。

もしこの最初の殲滅戰に成功すれば、わが軍は華中華南方面に於ては、單に海岸線を守り、内部の完全なる調整を以て充分である。けだし華北前線に於ける作戰は頗る有利であるからである。

この最初の殲滅戰が成功すれば、華北の敵軍は、必ずや平津地方より驅逐せられ、華北前線は山海關及び察哈爾省熱河省境に轉ずる。

もしこの殲滅戰に成功しなければ、河北省内保定滄州間に、山東半島に、上海に、或は又隔絶省内に大規模の消耗戰を開始する。即ち土地廣大變動不定の戰線に於て、われは經濟的





地理的並に天然的好條件を利用して、機動戰術をもつて奇襲に出で勝を制し、疾風迅雷的突擊、神出鬼沒的包圍を敢行する。

敵軍は内地に深入せるため、敵意を有する人民に包圍されて居り、常に武裝民國民衆に不意をつかれて敗北するであらふ。而して後方連絡線の維持並に後方肅清の手段なく、不斷の襲擊包圍をうけ、終日終夜瞬時の休息をもうることが出來ず、奔命に疲れるにちがひない。

かゝる情勢の下にわが軍は多數の武器彈藥を鹵獲し、これを敵軍の攻擊に利用すれば、敵軍の火力、毒ガスは完全にその効力を失ふであらふ。

わが軍の消耗戰は攻擊を以て主とし、南北戰場、蜿々たる陣地、及び長期の戰鬪に於て、累次莫大の損害を敵軍に與へ、敵は常に疲勞萎縮して支持することが出來なくなる。

敵軍の計畫は、短期間内にわが沿海重要地帶及び揚子江沿岸重要城市を占領し、わが軍の降伏をまつにあると思はれるが、これは彼等の幻想に過ぎない。

かりに一歩を讓り、われは完全に成功せずとも、揚子江沿岸の敵軍は、將來必らず我が軍に完全に肅清せらるゝであらう。又海軍は沿岸攻擊を續行しても、わが陸海空軍の包圍攻擊

は、これを完全に殲滅することが出來る。敵陸軍は亦終始河北、山東、上海近郊の陣線を突破することは出來ない。しかも敵が最後の失敗を決定するのは、これ等の戰線上に於てである。

敵軍の他の一利器は封鎖である。しかし果して完全にわれを封鎖することが出來るかどうか。たとへわが當初の殲滅戰が完全に成功せずに、上海の交通線が敵軍に封鎖されても、封鎖の出來ない數個の港がある。廣州灣、九龍の二港をわれ〳〵が利用し得ることは、英佛と中國との關係上問題はない。わが當初の殲滅戰は、既に珠江内の敵艦を掃蕩するにある。粵漢線も亦敵軍の爆擊を被るを免れないかも知れないが、この交通線遮斷のみでは充分でない。この鐵道は縱横に交錯する自動車道をもつてゐるからである。

その他に南北陸路交通線がある。南路は一は滇越鐵道にして、安南の海防より雪南省昆明に至り、一は海防より廣西省境鐘南關に至るものである。湘黔鐵道の完成前に於ては、昆明、鐘南關は粵漢鐵道に至る自動車道路あり、代つて運轉連絡をなす。北路交通線は隴海線西端にして、ソ聯のトルキスタン鐵道に達する甘肅新疆自動車道に接し、重載自動車の搭載範圍



内では、種々の軍需品の運輸も可能である。從つて敵軍の封鎖手段は、徒勞に歸することは明らかである。

戰爭物資の消耗、窮乏の增大、軍人精神の弛緩、及び社會危機の進展は、必然的に敵の滅亡を決定すべく、且つ過去の事實では、吾人の豫測することの出來ない幾多の新要素や、算出することの出來ない潛在的要素があることも忘れてはならない。かくの如き情勢の下では、敵の崩壞過程を速かならしめるであらふ。

以上が「文稿」の所論である。隨分思ひきつた手前味噌で、支那人の己惚れも驚くの外はない。しかしそれはそれとしても、日本に對する戰略の片鱗はこれで推知することが出來る。

以上述べた支那軍の配備と防禦線の現狀及び「文稿」の所論からみれば、支那側のとらんとする對日戰略は、北支方面の諸軍を以てわが軍を攻擊し、戰ひ利あらざれば、彰河、隴海線、揚子江、成都等へ漸次に退却して日本軍を奥地に引きよせ、懸軍長驅の日本軍をして奔命に疲らし、その疲れた日本軍に對して比較的精鋭なる中央軍をさし向け、かくして長期に亘る戰爭により、日本軍をして疲憊の極戰意を拋棄せしめんとするものゝように思はれる。

この支那側の戰略は、これを兵學上よりみれば、消極的な攻勢防禦ともいへる。即ち戰略上には守勢を持して戰術上には攻勢をとるものである。

攻勢防禦といへば、現代のわが陸軍戰史上には、日本軍がそういふ戰略をとつた例はないが、海戰史上にはその適例がある、日本海々戰に於けるわが海軍の戰略がそれである。

日本海々戰に於けるわが大本營の作戰大方針は、ロジェストヴェンスキー中將の率ふる露國第二太平洋艦隊の北上するをまち、これを對州海峽附近に邀擊して、これを擊滅するにあつた。即ち敵艦隊の北上を待ち受くる戰略は守勢であつて、その待ちうけた地點で積極的にこれを邀擊撃破するのは戰術上の攻勢である。この攻勢防禦の戰略は、巧みに地利を利用して周到に計畫され、しかもその邀擊にあたつては、わが各部隊は勇猛果敢に敵を攻擊したので、前古未曾有の大勝利を收むることが出來た。

しかるに支那側のとらんとする戰略は、これとはやゝ趣を異にする。即ち待ちうけた地點で、敵を殲滅する目的の下に勇猛果敢に攻擊を實行するものではなく、寧ろ奥地へ〳〵と日本軍を引き入れて奔命につかれしめ、長期の消耗戰を實行して、日本軍をして戰意を拋たせんとするものであるから、消極的な攻勢防禦とでもいふのが適當であらふ。

この戰略は、ナポレオン一世軍の侵入に對して、當時のロシヤがとつた戰略に似てゐる。

ナポレオンは、イギリスを苦しめるため大陸封鎖の鎖鎖を張りまはしたが、たま〳〵ロシヤが盛んに密輸入をやるので、庸懲のため征露軍を起した。これが一八一二年のことである。

彼は同年五月パリを發して先づドレスデンに至り、大に帝位の尊嚴を示した後、軍隊の集中せるウィスツラ河畔に赴き、盛んに士氣を鼓舞しつゝ大擧進軍を起した。その兵力は四十五萬と稱せられた。

これに對する露軍の作戰は、あくまでも決戰をさけ、退却によつて佛軍をロシヤの奥地へと誘致し、佛軍が奔命に疲れるをまつて、決然攻勢に轉ずるにあつた。

そこで佛軍がウィルナを經てウィテブスクに進んでも、露軍はわづかの抵抗を試みるのみで決戰をやらない、却て村を燒き陣を拂つて退却するので、佛軍は意外の感に打たれながらも、非常な困難を冒して追蹤を續行した。

ナポレオンは敵を追擊して九月十四日にはモスクワに入つた。然るにその夜市内各所に火災

が起り、猛火は炎々として燃へ上り、三日三夜燒け通して全市を殆んど灰燼に歸してしまつたロシヤ人がナポレオンを苦しめるために火を放つたのだ。

ナポレオンは勿論露國に深入りするの危險を知つてゐた、しかも露軍の退却に引きずられて、已むを得ずこゝまで進んで來たものゝ、モスクワは燒かれて住むに家はない。軍隊の衣服は薄く、食糧は乏しい。それに氣候も漸く寒くなるので、このまゝでは自滅の外はない。そこで彼は外交の力によつて露國と和せんとしたが、豫定の計畫を胸中深く藏する露帝は素よりこれに耳を傾けない。こゝに至つてナポレオンは、萬斛の憤涙をしぼりながら總退却に決した。

今まで機を窺つてゐた露軍は、時こそ來れりとばかりに、決然起つて猛烈なる追擊を始めた。このときに於ける佛軍の退却は前古未曾有の慘狀を極めたもので、惡路になやみ、氷雪と戰ひ、飢餓を忍び、殊に出沒極りなきコサック騎兵に攻め立てられて、さしもの大軍も全軍殆んど途に斃るゝの有樣であつた。就中ベレジナ河の渡河の際には、橋を落されたので、佛の殘軍五萬の內三萬六千人は河底に葬り去られた。

ナポレオンは辛ふじて河を渡つたが、危機身邊に迫まつてきたので、途中左右とともに橇に



のり、一人の護衛兵をも從へず、大膽にもパリに向つて逃走した。

このモスクワの戰に於ける佛軍は、兵を失ふこと四十五萬、英雄ナポレオンをして、遂に沒落の運命をたどらしめる第一歩となつた。

日本に對する支那側の戰略は、この露國の戰略を踏襲せんとするものゝように見へる。支那人はいふ、支那は國は廣い、首都はどこへでももつてゆける。從つて日本軍にして首都を攻略して城下の盟をなさしめんとしても、われ〳〵が奧へ〳〵と退却するならば、日本軍は奔命につかれ、ナポレオンの二の舞ひを演じて、遂には自ら戰意を拋たざるを得ないであらふ。それにわれ〳〵には共產軍や便衣隊といふ便利なものがあるから、日本軍の占領した後方地區を攪亂して、彼等の作戰を牽制することが出來ると。

これが支那側の作戰計畫の根本思想であるとみても大差あるまい。果して然らば、こゝにも亦彼等は妄想をいだくもので、自ら好んで墓穴を掘るものである。乞ふ次章に於てこれを說明してみよう。

## 四　支那を屈するには

### (1)　日本は支那を征服し得ない——徐道隣の所論

一九三四年の後半期に入つてから、支那に於ける共産黨の討伐も大に進捗し、國内の統一工作もほゞ曙光が見へ始めて來たので、蔣介石は日支關係のたて直しを行ふ目的で、先づ陳布電、徐道隣の二人に命じ、『敵か味方か、中日關係の新檢討』と題する長論文を、外交部の機關雜誌『外交評論』に發表させて民意を打診した。この論文は蔣氏の内命をうけただけあつて、所論に權威があり、日本と戰ふ場合、支那が作戰計畫を立てるに當つて、如何なる思想の上にこれを組立てるかを間接に物語つてゐる。讀者諸君は次に述ぶる徐氏の所論を讀んで、前節に述べたわれ〳〵の所論が、必ずしも獨斷的のものでないことを覺らるゝであらふ。

徐氏はいふ——





「國際關係に於ては、政略と戰略に論なく、正面以外に側面及背面の敵國の有無も考慮されねばならぬ。なぜなら、側背兩方面の敵の行動如何によつて、正面よりする敵力を二倍三倍乃至は十倍にも增加する結果となるからだ。

今日の日本の狀態をみるに、東米國に對してことを起せば中國はその背面にあり、北ソ聯邦と戰へば中國はその側面にある。日本にして對米對露戰に勝利を占めんとならば、先づその側背にある中國に對する顧慮を除かねばならぬ。

かゝる側背兩方面の顧慮を除くには二つの方法がある、一は武力をもつて中國を壓迫し、また起つ能はざらしむるもので、二は中國と協調關係を結ぶことである、これまでの日本は第一の方法をとつて來た。然らば日本は武力を以て絶對的に中國を控制し得るかといふに、それは到底不可能である。日本にして武力を以て後顧の憂ひを除かんとならば、對米又は對露開戰以前に徹底的に中國を亡ぼすことが必要である。即ち三ケ月以内に中國を完全に占領し、半年以内に徹底的にこれを亡ぼさねばならぬ。日本にして中國を亡ぼすに三ケ月乃至半年以上を要するならば、米・露はこれを默視せず、必ずや日本に速戰を迫るであらふ。然ら

ば、日本はそういふ短時日内に中國を亡ぼすことが出來るかといふに、それは絶對に不可能である。これを事實についてみるも、日本の東北占領は既に三年の久しきに亙るにも拘らず、東北義勇軍は今尚所在に出沒し、瀋陽一縣の民間銃器でさへ、期日通りには沒收し得ない有様である。これ等の事實よりおせば、日本は畢竟短期間内に徹底的に中國を控制し、又は亡ぼすことは出來ない。」

彼によれば、日本にして短期間内に支那を徹底的に控制し得ないならば、米・露は日本に對して干渉を行ひ、日本は腹背に敵をうくるに至るであらふと說く。かゝる干渉が妄想であり、支那のために賴みにならぬことはこれを後篇に說かう。

かれはかき說きつゝ、日本は短期間内に支那を控制し得ない理由を次のように述べてゐる。

「中國を控制するには、先づ海軍力で中國の海岸を封鎖することが必要である。然るに現在の中國は準植民地の地位にあつて、歐米各國は中國に對し錯雜せる政治經濟上の關係をもつてゐる。ことにイギリスとの關係は緊密であるから、封鎖の及ぶところは只に一二國の利害のみではない。ゆへに日本が中國を封鎖すれば、ただ中國を敵とするのみならず、イギリス及び全世界を敵とする覺悟がなければならぬ。かゝるは日本にとつて有利な戰略でない。

次に經濟的方面から考へてみよう。日本は中國の中に第二第三の滿洲國をつくる積りであらふが、それは果して日本の力量の許すところであらふか。日本は滿洲事件以來多額の軍事費を支出し、國内財政上の赤字額も漸次增大しつゝあるのは人の知るところである。今もし侵略範圍を擴大して北支那に及ぼさんとしても、同方面は東三省とは異り、民力及び知識程度の上から容易に日本軍には屈服しまい。これを攻略する爲には非常な費用がいり、滿洲事變に數倍するものと考へねばならぬ。又内蒙古に第三の滿洲國をつくらんとしても、同方面は曠野荒涼產物に乏しく、收入の見るべきものはないから、これを攻略しても、その經費は一層大なるものとなるばかりで、到底日本の耐へるところではあるまい。

右は直接の經濟的影響であるが、更に間接的の影響を蒙ることも考へねばならぬ。日本もし一歩を進めて侵略範圍を擴大したら、中國國民は再び猛烈なる日貨排斥運動を以つてこれに對抗すべく、如何なる力をもつてするも、これを抑制することは不可能である。果して然らば日支貿易は全く杜絶し、日本は中國に於て商業又は產業上の立脚點を失ふことになり、

日本の蒙る損害は莫大なるものとならふ。

次に中國を滅ぼすに要する兵力について考へてみよう。先づ滿洲國を例にとるが、同國にある日本の駐屯軍隊は表面上は五ケ師團であるが、實際には十萬以上であらふ。然も十萬以上の軍隊を使つても、滿洲國境内の治安を維持することは出來ずに、時々義勇軍の脅威をうけつゝある。されば日本が再び第二第三の滿洲國をつくる爲には、少くも二十萬の軍隊を派遣せねばならない。日本の常備兵數は僅かに十七師團であるから、全部を派遣しても尙不足を告げ、それに國内及び朝鮮方面の治安の維持にも相當の兵力がいるから、勢ひ豫後備役の召集派遣を必要としよう。そうなれば日本は正式に中國と開戰することになるが、しかもその控制し得る範圍は北支那だけで、南支那には手をつけることは出來ない。かくて日本は支戰場を以て主戰場となし、主目的たる中國の首都をつくることを拋棄せねばならぬようになる。日本にしてこの下策に出るならば、只だに自己の敗亡となるばかりか、中國は悠々として戰爭を續けることが出來る。

日本もし何等かの理由により、中國に對して正式に開戰するならば、中國の武力は日本に





及ばないから、必然大犧牲を拂ふべきは多言を要しない。しかし日本の困難もこの點にあつて、中國に力のないことが侮る可からざる强味である。勢力相伯仲する國家間の戰爭では、決戰が戰爭の終結となるも、兵力の絶對に不同なる中日戰爭の如きものでは、正式の決戰はなしに、日本は中國の有ゆる面積を占領し、徹底的に中國を滅ぼすでなければ戰爭の終結とはならない。多くの戰爭では、相手國の首都を占領すれば戰爭の終結となるが、對中國戰爭では首都の占領はその死命を制し得ない。日本は多くても中國の若干の都市及重要なる海港を占領し得るに過ぎずして、四千五百萬方里の中國全土を占領し盡すことは出來ない。中國の重要都市及海港を日本が占領しても、日本は徹底的に中國を屈服さすことは出來ない。なぜなら、これは東北四省の喪失と同樣、中國には塞翁の失馬に過ぎないからだ。日本が引續き中國の領土を侵略するならば、歐洲を放棄してアジヤに退いたトルコの先例にならひ、漸次に退却して日本人を奔命に疲らせばいゝのである。

上述の諸點よりみれば、日本は五十年來の傳統たる大陸的政策遂行のため、中國に對して武力的壓迫又は侵略を行はんとしても、犧牲絶大にして得るところなき企圖に終ること明ら

かである。換言すれば、中國の控制乃至はこれを滅ぼすことは總じて不可能である。」

以上が徐道隣氏の所論である。この所論が前に掲げた「文稿」のものと同巧異曲であるのは、讀者諸君の容易に察知せらるるところであらう。さて徐氏によれば、日本が中國を封鎖すれば、イギリスや他の列强はこれに干渉するから、日本は世界を相手として戰はねばならぬ羽目になる。次に經濟上からみても、日本の力では第二第三の滿洲國をつくることは出來ない。日本の兵力からいつても、中國を徹底的にたゝきつけることは出來ない。支那は奥へ〳〵と引きこんだら、日本人は奔命に疲れて、自から戰爭を拋棄せねばならぬことにならふといふのである。

この種の見解は、戰爭の何ものたるを知らざる素人を魅惑するには拵へ向きであるが、かゝる思想の中心には獨りよがりの妄想が含まれてゐることを注意せねばならない。このことは興味あるしかも重大な問題であるから、次にその假面を剝いでみよう。

## (2) 支那人の妄想

徐道隣氏によつて代表さるゝこの種の妄想を指摘するには、こゝに先づ戰爭の本質について





說明を試みる必要がある。

戰爭とは、人類が干戈を以てする鬪爭であつて、平時に於ては許されざる害敵手段を以て、敵の意思を屈服し、わが意志に從はしむる非常手段である。

戰爭は國家政策の繼續であるから、敵の意思を屈してわれに從はしむるのが目的ではあるが、これには當然戰略上の目的以外に、政略上の目的があることも明らかである。例へば朝鮮の覇權を握ることは、日淸戰爭に於けるわが政略上の目的であり、滿洲に對して同樣の覇權を打立てることは、日露戰爭に於けるわが政略上の目的であつた。この政略上の目的を達する手段には二つある、一つは敵兵軍の殲滅を目標として最後まで戰ひ、終に城下の盟をなさしむることによつて、戰爭の目的を達するものである。二は戰爭の價値が、交戰國に對して、時間と費用と犧牲の無制限なる消費を强要したり、敵兵軍の殲滅を企圖せずとも、先づ一定の土地を攻略して、これにより敵に壓迫を加へ、かくして敵の意思を屈服させて、わが政略上の目的を達し得る場合もある。クラウゼウキツツは、前者を稱して無制限的戰爭といひ、後者を制限的戰爭とよんでゐる。

例へば一八七〇年の普佛戰爭に於ては、ドイツ軍は遠くフランスに侵入して首都パリを陷れ、ナポレオン三世をして遂に城下の盟を哀願せしめた。これは明らかに無制限的戰爭であつて、ドイツ軍の目指すところは、佛軍の殲滅であつた。

これに反して日露戰爭に於ては、われは極東アジヤ、就中滿洲方面に於ける露軍の擊破を以て滿足し、これによりロシヤの戰意を拋棄せしめ、わが政略上の目的を達せんとした。當時もし日本軍にして、逃ぐる露軍を追ふて馬をウラル山頂に立てたならば、ナポレオン一世の二の舞を演じて、却てわれ自ら戰意を拋棄せざるを得なかつたであらふ。幸ひにも日本海の大勝とアメリカを抱きこんだわが外交の成功のため、制限的戰爭によつて戰勝の美果を收むることが出來た。

以上によつてみれば、戰爭には敵兵力の殲滅を作戰目標とし、これに向つて全力を注ぐところの無制限的戰爭もあれば、一定の地域を占領し、これによつて敵に壓迫を加へ、かくして敵の意思を屈する制限的戰爭もある。兩者とも狙ふところは戰爭の目的たる敵の意思を屈するにあるも、これを達せんがための手段には相違がある。





徐氏のとくところの日本の對支戰略は前者を指すもので、かれはこれを以て唯一の戰爭手段と考へてゐるようにみへる。然らば支那に對しては、日本は無制限的戰爭のみ行ひ、制限的戰爭を行ひ得ないか？　これが次に起る問題である。

凡そ制限的戰爭は如何なる場合にも行ひ得るものではない。なぜなら、相手國にして飽くまでも抵抗するに於ては、結局は無制限的戰爭となるからだ。しかしながら例へば地理的狀態が殊に攻者に有利であり、攻者の目標とする地理目標が、防者にとつては價値大なるざるため、防者の戰意薄弱なるか、又は防者の國土の一部が、國民性の關係から攻者に容易に統治さるゝような場合に於ては、制限的戰爭は成立し、これによつて攻者はその戰爭目的を達することが出來る。

支那はかゝる制限的戰爭を行ふに最も適した國柄である。支那では、その國民性に基き、第二第三の滿洲國をつくるに容易なるのみか、その地理的狀況も亦制限的戰爭によつて中央政府の意思を屈せしむるに適してゐる。

例へば支那の國民性からいへば、支那人はその統治者をかへても平氣でゐる。かれ等の生活

が安全であれば、統治者は論ずるところでないといふのが支那人の國民性である。この國民的習性は、最近國家主義の勃興によつて、やゝ薄らぎつゝあるは事實であるが、南京政府の異常なる努力にも拘らず、これを一掃することの出來ないのは、最近の北支の狀態が何よりも雄辯にこれを物語つてゐる。

次に支那の地理的狀態をみるに、幾つかの大河が大陸を橫斷じて東西に走り、しかも鐵道と道路による交通の便利が不完全なるために、一定の地區を占領すれば、これを奪回することは頗る困難である。例へば北方より南進するものは、逐次に黃河、揚子江の線を占領すれば、平漢、津浦兩線によつて北上し、これを反擊せんとする中央軍の作戰は非常に困難となり、後方攪亂による以外成功の見込みはない。

更に注意すべきことは、支那の心臟部が揚子江流域にあることだ。上海、南京、漢口は就中重要なる都市で、この三者を握るものは、中部支那は勿論支那全體の死命をも制することが出來る。しかるに揚子江は漢口に至るまで輕巡洋艦以下の艦艇を以て溯航し得るのみならず、支那は海軍らしい海軍をもたないから、海軍國はこれ等の都市を占領するに容易なるのみならず、



又その海軍を利用して、揚子江以北の地區へと作戰せんとする中央軍の行動を阻止することも出來る。

以上述べたところにより、支那に對しては制限的戰爭を行ひ得ることがわかる。支那はこの種の作戰を行ふに適してゐるのである。されば徐道隣がいふように、支那に對しては兵軍の殲滅又は首都の占領を目標として、奥へ〳〵と逃げてゆく支那軍を追蹤する必要もなければ、南京政府が最後の首都として豫め選定せる四川省の成都占領の目的を以てわが軍を進むる必要もない。寧ろ制限的戰爭によつて一定の地區を占領すれば、第二第三の滿洲國をつくることは容易であるのみか、これがために南京政府の財政は窮乏し、又これに刺戟されて各地の軍閥連は蜂起するから、南京政府はあつてもなきが如く、自然に崩壞するより外はない。徐氏は勢力の不同なる日支戰爭では、日本は支那のあらゆる土地を占領し、徹底的に支那を滅ぼさなければ戰爭の終結とはならないといふも、かくの如きは戰爭の何ものたるを知らない生兵法に過ぎない。

たゞこゝに注意すべきことは、制限的戰爭では、攻者は狙ふところの一定の地域以外に於て

は、成るべく戰いをさけることである。例へば北支を主戰場とする制限的戰爭に於て、中南支方面でも局地的戰鬪を敢てするときは、攻者のためには勢力の分散とするのみならず、兵術の本義にも反することとなりて、却て制限的戰爭の目的を達成する妨害となる。ゆへにかゝる場合には、寧ろ該方面よりわが全民留民を引揚げ、多年の間に築き上げた地盤も已むを得ずとして放棄し、寧ろ戰爭本來の目的を達成することに主眼をおくのが賢明の策である。

これを要するに、支那に對しては、ナポレオンのモスクワ遠征に於ける愚を繰返す必要もなければ、支那軍を追ふて奥へ〳〵と深入りする必要もない。南京政府を屈服せしむるか又はこれを崩壞せしめて、わが戰爭目的を達する手段は手近かにある。支那人が國土の廣大を楯に、これを屈することの不可能なるを說くのは、寧ろ痴人夢を語るものである。

徐氏は又日本は支那に第二第三の滿洲國をつくらんとしても、支那が長期に亘りて消極的抵抗を試みるならば、日本は財政上から破綻の運命にあい、勢ひ戰意を拋棄せねばならぬと說く。この見方が我田引水論であるのは、次の事實からみても容易に知ることが出來よう。

凡そ制限的戰爭は無制限的戰爭に比し、戰費の點に於て經濟的であるのはこゝに說くまでも





ない。その制限的戰爭を行ふ以上、日本はこれを遂行し得る充分の力量をもつてゐる。されば戰爭による財政上の破綻の如きは、寧ろ支那に對してこそ云ふべきことで、これを日本に對して云爲するのは見當違ひである。

支那では又よく長期抗戰の利を說く、曰く、長期にわたり消極的に抗戰すれば、日本は財つき、奔命に疲れて戰意を拋つであらふと。

なるほど長期の戰爭が交戰者にとりて不利なることは明白の事實である。ゆへに孫子も、

「兵は拙速を聞く、未だ巧の久しきを睹ざるなり。

夫れ兵久しくして而も國利あるものは、未だこれあらざるなり。故に盡く兵を用ふるの害を知らざるものは、則ち盡く兵を用ふるの利を知る能はざるなり。」

と說いてゐる。その意味は、戰爭をするには速戰卽決主義がいゝ、小才にまかせて巧妙に過ぐる作戰をやるのは敗を招くものである、といふのが前者の意味で、長期の戰爭は決して國のために有利でない。だから用兵の害を知らないものは、同時に用兵をも知ることは出來ない、といふのが後者の意味である。

日本が長期に亘りて支那と戰ふならば、國力疲憊し、國際間に威力を失ふは當然である。しかしながら制限的戰爭を行ひ、徐々に支那を屈する方法をとるならば、これがために國力疲憊し、第一に悲鳴をあげて降を乞ふものは日本でなくて支那であらふ。それを反對に日本が悲鳴をあげるように考へ、長期戰爭こそ日本を屈する最良法なりと考へるのは、寧ろ憐れむべき妄想である。

これを要するに、支那は單獨では日本と戰ひ得ない。消極的な抗戰を試みたところで、結局は中央政權の崩壞となり、支那自身を亡ぼす本となるのは、上述したところにより、極めて明々白々たる事實である。

然らば支那は外國の援助を期待し得るか？　換言すれば、ソヴエット・ロシヤからの兵力的援助や、英米の對日積極的干渉を期待し得るか？　これが次に起る問題である。即ち篇を改めてこれを觀察してみよう。

# 第三篇

## 英米露の動向


1　日支事變は世界戰爭となり得るか？
(1)　ヨーロッパ内亂は歐洲大戰にはならない
(2)　日支事變は世界戰爭にはならない

2　ソ聯は特に支那を援助する如何なる得策か
(1)　ソ聯は日本と戰ふことは出來ない
(2)　ソ聯の狙ふところは日本人民の抗戰線
(3)　日本人民の抗戰線と獨ソ協定

3　英國の動向は如何か
(1)　英國は戰爭を好まない
(2)　支那を挾む日英露の對立
(3)　日支事變と英國

4　消極的な米國
(1)　金持喧嘩せず
(2)　日支事變と米國

## 一　日支事變は世界戰爭となり得るか？

### (1)　スペイン内亂は歐洲大戰にはならない

支那側の期待するソヴエツト・ロシヤよりの兵力的援助、並に英米兩國よりの對日實力的干渉は、果して實現の望みがあるか？　この問題に答ふる爲には、英・米・露の最近の動向と、支那に關するから等の態度を檢討することが必要である。

もしもソ聯が日本と戰ふも辭せざる覺悟を以て支那に兵力的援助を與へ、又英米も實力を以て日本に干渉するならば、次の世界大戰はこれを避くるを得ない。なぜなら、太平洋に大規模の戰爭が展開さるゝ以上、ドイツは斷じて沈默を守るものとは思はれない。必ずやこの好機を利用してソ領ウクライナ方面へと侵入すべく、イタリーも亦見す〳〵この好機を逸するものではない。かかる結果は當然に次の世界戰爭へと展開せざるを得ないからだ。

このことは英も米も心得てゐる。ソ聯も勿論これを熟知してゐる。果して然らば英米露は次の世界戰爭を賭してまでも支那を援助し、日本に對して實力的干渉を加へるであらうか？　今次事變に於ける英・米・露の動向を知るには、先づこれから檢討してかゝらねばならない。

この點に關して最良の參考となるものは、最近のスペイン内亂である。

人或はスペイン内亂を挾んで、ヨーロッパ各國の義勇軍が入り亂れながら戰ひつゝある現狀を目して、第二の歐洲戰爭は既に始まつたと稱し、中には世界戰爭はもう始まつてゐると呼號するものもある。しかしながら日支兩國民は騙されてはならない。第二の歐洲戰爭は始まつてもゐなければ、又始まりそうにもない。況んや次の世界戰爭に於てをやだ。支那側がもしも皮相なこの種の說を鵜呑みにして對日戰爭を始めるならば、とんでもない不幸を招くであらう。同樣に日本が輕々しくもこれを信じてわが正義の劍を鞘に收め、この千載一遇の好機を逸しつゝ、徹底的に覺醒さすことを怠るならば、次で來るものは、これ亦非常に大なる不幸であらう。

かゝる理由あるがゆゑに、われ〳〵はこゝにスペイン内亂に於ける各國の動向を再檢討して、日支兩國民に新たな認識を與ふることは、刻下の急務なりと考へる。



然らばスペイン内亂は何ゆへに歐洲大戰にならないのか？　この重要なる謎を解くために、こゝに先づ内亂の性質と各國の動向を概說してみよう。

スペインは、プリモ・デ・リヴエラ將軍の八年間の獨裁政治の後、一九三一年現在の大統領アサニヤを首相とする共和民主的左傾政府が樹立された。

この左傾政府の執政中、左右兩翼の反目と衝突は烈しくなり、殊にアサニヤ政府が執權二年にして仆れてからはます〳〵烈しくなつた。

たま〳〵一九三六年二月の總選擧で、左翼合同の人民戰線が出來上ると、忽ちにして政權を掌握し、アサニヤは再び首相となつた。然るに與黨たる社會黨、共產黨、無政府黨が、背後からアサニヤをしかけては右翼連中を壓迫したので、右翼の激昂は一方ならず、軍閥及び貴族を中心とする右翼の反政府一派は、スペイン本國を離れた對岸のモロッコを根據として、革命の計畫を進めた。その革命軍の總大將におされたのがフランコ將軍である。

一九三六年七月中旬、政府派の突擊隊長カスチロがフアシスト團のために殺され、その復讐として、右翼の中心人物カルヴオ・ソテロが暗殺されると、待ちに待つたフランコ將軍は遂に

たつた。地中海上の要所バレアル群島で悠々ゴルフに打興じてゐた彼は、飛行機でモロッコに引きかへし、叛亂の火蓋を切つて落した。

所謂國民戰線を率ゐるフランコ將軍は、兵備に於ては政府軍よりも優勢であるが、人民戰線の中堅をなす民衆の支持を缺いてゐる。かくて政府軍と反政府軍の戰ひは、一進一退容易に解決の見込なく、各地に流血と破壞の慘狀をくり返へしながら今日に至つてゐる。

然るにこゝに重大な情勢の展開が現はれた、それはスペインの內亂が一變して獨・伊・葡のファッショ諸國と、ソヴエット・ロシヤ、フランス等の社會主義諸國の勢力爭ひとなり、イギリスまでが後者に與みして、スペインを舞臺とする一種の國際合戰の姿を描出することゝなつた。詳言すれば、スペインの革命的內亂は單なる革命運動ではなく、外から組織された叛亂であつたことが明瞭になつた。

スペインの內亂は何ゆへに國際合戰となつたか？　それにはヨーロッパに於けるスペインの立場をみるのが捷徑である。

スペインは、嘗ては大西洋の雄邦であるとともに、地中海の强國でもあつた。然るにイギリスと戰つて破れ、アメリカに於ける屬領を失つてからは、勢威全く失墜して漸く餘命を保つに過ぎない。今日のスペインは、その勢力を地中海に集中し、英・佛・伊三國の間にあつて勢力の均衡を策しつゝ、現狀維持に汲々としてゐる。



スペインは、大西洋と地中海に面するフランス領土の尖端に立つ關係上、一方には戰略上フランスの死命を制するとともに、他方には西地中海の制覇權を左右し得る立場にある。

フランスが、巨大なるスペイン半島を尖端として、大西洋地中海の二つの海に跨る地理的狀態は、古來よりフランスの軍略家をして苦悶せしむる本となつた。ナポレオンの如きも、かゝる苦盞を嘗めた一人で、彼の不成功の一因は、たしかにこゝにあるといふも過言でない。蓋しかくの如き地位は、經濟的には有利なりとしても、フランス艦隊を大西洋地中海の兩海面に分在せしむるの已むを得ざる結果として、艦隊の分散集中を極めて困難ならしめ、戰略上に重大なる不利を蒙らす本となる。戰史を繙けば、フランスの對英戰爭は、スペインが中立するか又は敵對する場合には、フランス艦隊の合同は甚だ困難にして、甚大なる災害を蒙り、敗戰の運命にあふを常とした。

スペインは又地中海の西の咽喉たるジブラルタルの對岸に豐沃なる領土モロッコをもつてゐる。このモロッコに於けるスペイン領シュータ港は、地中海上の優秀なる海軍根據地たる資格を有するとともに、空軍根據地たるべき要件をも具備してゐる。

次に今次の動亂に於て、列國の注意をひきつゝある良港マオンを有するバレアル群島は、スペインの領土であつて、これはまた地中海上に於て、軍事上極めて重要な位置を占めてゐる。けだしこの群島は、一方に於ては、フランスとアフリカ大陸との交通線を管制して、フランスに絶對必要なるアフリカ土人の本國招致を左右し得るとゝもに、イギリスにとりても、その生命線たる地中海航路を制し得る地位にあるからである。

ゆへにスペインにして適當なる海空軍を有するならば、シュータ及びマオン港を領有するスペインは、一方に於ては地中海に於けるイギリスの通路を、他方に於てはフランスとアフリカ植民地をつなぐ通路の何れをも遮斷し得る。これ英佛兩國がスペインに對して最大の關心をもつ所以である。

次にイタリーも亦スペイン領モロッコ及びバレアル群島を狙つてゐる。イタリーはこれを海



軍及び空軍の根據地として、イギリスの地中海航路は勿論、フランスのアフリカ植民地との通路をも脅かすことが出來る。

だがスペインに對して食指を動かしつゝあるものは、獨り英・佛・伊の三國のみでない。ドイツも亦他日の飛躍を目論見つゝ、この三つ巴の爭覇戰の中に割りこみ、その分け前に與らんとしてゐる。

以上述べたものが、病弱のスペインをめぐる歐洲列强の角逐である。これ等の角逐は先づ思想の形で現はれ、互に鎬を削ることゝなつた。卽ちスペインが社會主義の本據となり、トロッキーの所謂『ヨーロッパは東西より赤化する』ことになれば、フアッショを標榜する獨伊兩國は最大の脅威をうけ、地中海に於ける聲威は失墜するを免れない。これに反してスペインがフアッショ化したならば、ヨーロッパの大部分は獨裁政治に拍車をかけられ、四面フアッショ國を以て圍繞さるるフランスは、枕を高ふして眠ることは出來ない、フランスと一蓮托生のイギリスも亦デモクラシーに致命傷を蒙り、これ亦大なる脅威を感ずることになる。況んや左右兩翼の對抗が烈しくなればなる程、歐洲大戰再現の危險は增大し、イギリスの狙ふところの現狀

維持は根底から覆やさるゝことにもなる。歐洲列强が深甚なる關心をスペインに集中したのも當然である。

かくてスペインの內亂には、いつしかドイツやイタリーの義勇兵が、近代兵器に身を固めて反政府軍を援助すると、今度は英佛の勞働者がスペインの人民戰線と手を握り、又ソヴエット聯邦からの義勇兵が後陣をつとめて、反政府軍や獨伊の義勇軍と戰ふといふ始末、ことこゝに至つては、流石のフランコ將軍も、一氣に首都マドリットを攻め落すことも出來ず、一擊の下に左翼スペインを叩き潰さんと待ち構へた獨伊兩國も、これ亦容易に目的を達することが出來ない。そして一ヶ年を過ぎた今日では、手を引くにも引かれぬ立場となつて、一進一退の戰さをつゞけてゐる。

一方政府軍を支援する英・佛・露はどうかといふに、第一にフランスは、歐洲大戰の再發を恐れること甚だしく、本氣になつて政府軍を援けようとはしない。ソ聯邦は兵器の點では獨伊に優つてゐるが、肝腎のフランスが本氣にならないので、これ亦本氣になつて戰ふわけにゆかない。イギリスはとみれば、現狀維持に汲々として、スペインの內亂が第二の歐洲戰爭とならないよう、全力をつしくてゐる。

そこでこゝに一種の妥協案が持上つてきた、それはフランコ政權に交戰團體の資格を與へて、一人前と認めようといふのである。これは獨伊が希望する最少限度の要求である。これに對してイギリスは食指を動かしそうなゼスチューアを示してゐるが、果してものになるかどうか、それは問題としても、スペイン問題は恐らくこの邊に落つくものではないかと思はれる。

これを要するに、スペインをめぐつて相爭ふ英・佛・獨・伊・露の五ケ國は、何れも皆相手を向ふにまはしまで、本氣の戰爭をしようといふものは一つもない。彼等は全力をつくして戰爭範圍の局限につとめ、のめりこんだ泥濘からなんとかして脫出し、足を洗ふことに專念しつゝあるのが今日の狀態である。これでは本ものゝ戰爭になるわけはない。

## (2) 日支事變は世界戰爭にはならない

この內亂を通觀するに、われ〳〵はこゝに二つの著しき現象を見逃がすわけにゆかない。その一つは各國とも戰爭範圍の局限に眞劍の努力を拂ひつゝあることで、他の一つは、國際間に

於ては、相異れる主義や理論のために、大戰爭の勃發を見ることはないといふことである。

今日は武器が非常に發達してきたから、戰爭がいよ〳〵ます〳〵悲慘になつてきた。と同時に今日の戰爭は職業軍人の戰ひでなく、國民全體の戰爭であるから、一般國民も亦軍人に劣らない慘害を受ける。これ等の理由から、何れの國でも出來るだけ戰爭の渦中に入ることを避け、戰爭の範圍を局限しようとする。

事實今日の世界に於ては、現狀維持のチャンピオンたるイギリスなどは、戰爭の發起を極度に防止しようとしてゐる。これはフランスについても同樣である。アメリカに至つては、金持喧嘩せずのたとへにもれず、舊世界の葛藤には一切まき込まれない方針を堅持してゐる。アメリカが中立法案を制定したのは、舊の世界戰爭の苦き經驗から、この法律でも出さなければ、戰爭に引摺りこまれる恐れがあるからである。つまりアメリカから戰爭用の材料やその他の物資が欲しければ、自分の國の船でもつていつてもらいたい、アメリカの船ではご免を蒙る。又米國人にして外國船に乘るものは、アメリカ政府は保護せぬぞといふのである。これで戰爭にまきこまれることを防ぐのが本來の主旨である。



これは何を意味するか、云ふまでもなく世界各國民の考へ方が變つてきたからである。以前なればエチオピヤ事件などは、歐洲大戰をひき起すに違ひないが、それが起らずにすんだのは、戰爭の範圍を局限して、出來るだけその渦中にまきこまれることを避ける方へと、各國民の考へ方が變つてきたからである。スペイン內亂も同樣だ。これでは支那側が如何に英米に策動して、戰爭の渦中にまき込もうとしても、恐らくは水泡に歸するであらう。

第二の現象は、國際間に於ては、相異れる主義や理論のために、大戰爭の勃發をみることはないといふことである。

スペイン內亂は明らかに主義のための戰ひ、理論のための戰ひである。ファッショ對社會主義、ファッショ對デモクラシーの戰ひである。このイデオロギーの鬪爭は勿論國際鬪爭の一手段には相違ないが、それが直ちに國際間の戰爭を惹起せしむるものであると斷定するのは早計である。國際間の戰爭は、現實の利害關係に基き、互に相容れざる政治的經濟的利害の衝突により、始めて誘發せらるゝもので、國際間に於ける相異れる主義や理論のために、直ちに戰爭の勃發を見ることはないのである。

これを事實問題として考へてみても、今のソ聯がスペインに於ける人民戰線援助のため、ドイツ及びイタリを向ふにまわして一芝居打つなどは、ソ聯の現狀からみて思ひも及ばざるところである。從つて現在の歐洲に於ける不安の原動力は、スペイン内亂にもあらず、又これを繞つて相對立するイデオロギーの鬪爭にもあらずして、やはり現狀維持と現狀破壞派の對立にあると斷ぜざるを得ない。

これからみれば、支那側が共産軍を利用して抗日人民戰線を張つてみても、スペイン内亂にこりごりした英米の方では、支露と共同戰線を張つて日本と戰ふ氣持ちもなければ、たとへ一部の英米人が右の共同戰線に參加するとしても、それが英米との本もの〻戰爭になることはない。況んや英米の方では、支那共産軍の暴戾には懲りごりしてゐるのである。即ち支那側の狙ふ抗日人民戰線は、スペインの場合とは全く異つた現象を呈し、これに大なる期待をかけることは出來ない。

以上がスペイン内亂から學び得た二つの教訓である。英・米・露の動向を知るには、先づこの二つを頭に入れておくことが肝要である。



かりに一歩を讓つて、ソ聯が支那に兵力的援助を與へるとしても、英米の方では戰爭範圍の擴大やら共産軍の跋扈を恐れて、これを阻止こそすれ、ソ聯を支援することはあるまい。英米の方からいへば、戰爭の渦中にまきこまれることは眞平ご免だといふのだから、これを聞かずにロシヤが單獨で日本と戰つても、英米は寧ろ中立の態度をとるに違ひない。なぜなら、日ソ相傷くことは英米の願ふところであるからだ。

よしんば英・米・露が轡を並べて、われに兵力的干渉を行ふ場合が出現したと假定しても、われ〳〵は少しも驚くことはない。領土不侵略、戰局不擴大といふ二つの公明なる主義を掲げて、東洋平和のために已むを得ず劍を拔いた日本に挑戰するものがあるならば、これこそ正義の敵であつて、天人ともに許さざる罪惡である。われ〳〵は正義の劍を眞甲にふりかざし、千萬人と雖われ往かんの氣慨を以て邁進すればいゝのである。

## 二　ソ聯恃むに足らず

### (1)　ソ聯は如何なる援助を支那に與へ得るか

支那は、苦しまぎれに、一時の彌縫策としてソヴエット・ロシヤからの援助を求めつゝある。この支那のやり方は、これを例ふれば、高い利子を出して高利貸しから金をかるようなものである。その結果の支那にとつて不幸なるは、蔣介石もその他の人々もよく心得てゐる筈だ。しかるにも拘らず、かれらが自ら危道を選むところに、支那崩壞の重大なる原因が潜んでゐる。

北支事變の起る少し前までは、南京政府はソ聯のさし延べた手を振り離してまで、ロシヤとの接近をさけてきた。この南京側の振舞に駐支ロシヤ大使が失望の嘆聲を發したのは今は公然の祕密である。西安事件が起つて抗日容共の政策が南京政府によつて再認識されても、蔣介石はソ聯に近づこうとはしなかつた。かれはソ聯が支那にとり獅子身中の虫であることを最もよ



く心得てゐたからである。

然るに北支事變が起り、日支の關係が緊張してくると。かれは掌を翻へすようにソ聯との接近をはかつた。そして出來ることなら、ソ聯と協同して、北と西と南から日本軍を包圍しようと持ちかけた。しかるに今度はソ聯の方がのり氣にならない。胸に一物あるソ聯は、支那の申出でをおいそれと受け入れては自分に損だと考へたからである。

しからばさきには南京政府に對して對日提携を持出したソ聯は、今度は何故に態度を變へたか？　ソ聯の態度を知るには、先づこれから檢討してかゝらねばならない。

日支事變に對して、ソヴエット・ロシヤのとり得る態度は、次の三つにつきる、

一、支那に兵力的援助を與へ、ソ支聯合して日本に當るか。

二、コミンテルンを通じて支那の共產軍を支援し、抗日人民戰線を張つて日本に對抗するか。

三、支那に對して好意的中立を守るか。

日ソの關係は今日一觸卽發の現狀にある、この危機に備へんがため、ロシヤは極東に大軍を集中し、ソ滿國境には堅固なる防禦陣地を構築し、日滿兩國に備へてゐるのである。そういふ

現狀であるから、支那が立ち上つて日本と戰ふ以上、これと聯合して日本に當るのも一策である。況んや支那側はかゝる提携を懇願しつゝあるに於てをやだ。ソ聯が支那側の哀訴に對して食指を動かすのも尤もなことである。

しかしながらロシヤが日本と戰ふことを決意するについては、戰ひに勝てるだけの準備がなければならぬ。もし戰ひに勝てる算がないならば、支那を援けることは却つて火中の栗を拾ふことにあり、好んで自らを滅ぼす結果となる。しからばロシヤは支那と提携して日本と戰ひ、果して勝てる見込みがあるのか？　ロシヤの政治家が何よりも先に考へるのは、この問題であらふ。

ロシヤは今日本と戰つて勝てるか？　われ〳〵は先づこの問題から考へてみねばならぬ。

ソヴエツト・ロシヤが、スターリンの指導の下に、『一國社會主義建設』の理論をふりかざして、まつしぐらに進んで來て以來、そこには顯著なる三つの現象が現はれてゐる。その第一は産業の發展であり、第二は軍備の擴張であり、第三は外國との協調政策である。

スターリンの狙ふところは始めの二つである、かれはこの目的を達せんがため、トロッキーによつて唱道された世界革命主義を捨て、一國社會主義で滿足しつゝ、外國との協調主義へとのりかへた。外國と喧嘩したり、世界の嫌はれものになつては、右にあげた第一第二の目的は達せられないと考へたからである。



ソ聯の産業を全面的に發展させ、一國社會主義建設の基礎を築かうとする計畫は、所謂五ケ年計畫となつて現はれてゐる。それは一九二八年の秋から開始され、今年は第二次五ケ年計畫の第四年目に當つてゐる。この第二次計畫が完了すれば、直ちに第三次五ケ年計畫が續行される豫定である。

この産業計畫は、世界に於ける資本主義諸國間の經濟戰爭に勝利を占めんがためで、ロシヤは革命の放火の代りに、世界經濟の指導權を握り、第二の軍備擴張にも生々潑溂の力を與へて、相より相たすけながら、世界の覇を爭はんとする遠大なる計畫である。

この産業計畫の結果、ロシヤは三つの點に於て世界の經濟戰爭に勝利を收め得ると考へてゐる。その一つは、第三次五ケ年計畫の終末期に於ては、ロシヤに於ける富源の開發は全面的に展開するので、ソ聯の經濟は完全な自給自足となり、外國に對する經濟依存から脫し得ること

である。第二は、ソ聯に於ける主要産業部門の生産高は、全世界に於ける生産高に對して有力なる比率を占むるので、世界の經濟界に大きな影響を與へ得ることである。第三には、ソ聯の貿易は國營であるから、政治的必要に應じては、果敢なダンピング戰を決行し得る可能性がある。この場合には決定的な迫力をもつことが出來るといふのである。

だがソ聯が世界の經濟戰場に積極的に打つて出るのは、この産業計畫が充分に能力を發揮してくる時期で、それは今後尙五六年をまたねばならぬ。それまでに外國と大規模の戰爭を始めることになれば、右の産業計畫は頓挫を來し、一國社會主義の建設も水泡になる。況んやソ聯は今國內に於ける淸黨工作に一生懸命であるに於てをやだ。

これが産業計畫よりみて、ソ聯がこの際戰ひを欲せざる一つの理由である。

一國社會主義の建設には、外國からの侵略を擊退し得る力がなくては成功しない。そこでこゝに異常なる軍備の擴張が産業の發展と相まつて重視さるゝことになつた。

試みに第一次五ケ年計畫直前の一九二七年と九年後の一九三六年とを比較するに、ソ聯の軍備は次のように急角度の擴張を示してゐる。

| | 五ケ年計畫直前（一九二七年） | 滿洲事變當初（一九三一年末） | 一九三六年 |
|---|---|---|---|
| 兵數（正規兵） | 約五六萬 | 約七〇萬 | 約一三〇萬 |
| 兵數（民兵を含む） | 約一二〇萬 | 約一三〇萬 | 約一六〇萬 |
| 戰車 | 約一〇〇 | 約五〇〇 | 約四五〇 |
| 飛行機 | 約七〇〇 | 約一七〇〇 | 約四五〇〇 |
| 軍事費 | 七億 | 一三億 | 一四八億 |

ソ聯はヨーロッパ方面ではドイツ、極東方面では日本を對象として軍備を整へつゝある。今日バイガル以東にある赤軍兵力は、ゲ・ペ・ウ國境軍をも合せて約二十萬といはれ、これは少からず日滿兩國に對して脅威を與へてゐる。しかしながらソ聯が極東方面へ派遣し得る兵力には自ら限度があるのと、地理的關係は寧ろ日本に有利であるから、われは必ずしも恐るゝに足らない。

かように赤軍の尨大なる軍備擴張は、東西兩方面に於て、ドイツと日本を敵にまわしながら、同時に融を受けても、獨立して戰ひ得るを目標としたもので、この新作戰計畫の樹立者こそは、

さきに銃殺されたトハチエフスキー元帥であつた。

元來ロシヤは、國内の交通網が極めて不完全で、一方から他方へと軍隊を移動することはなか〳〵に容易でない。さきの歐洲大戰では、ドイツは完備せる國内交通網を利用して、先づ西方國境に大軍を集中し、東部國境方面は比較的少數の獨軍で露軍を牽制しておきながら、疾風迅雷的に佛軍を破り、次で西方國境の大軍を迅速に東部國境方面に輸送して露軍を擊破するといふ大膽な計畫を立てた。かゝるはドイツ國内の交通網が完整してゐたからである。然るにソ聯にあつては、この交通網は不完全を極めてゐる。例へば東と西をつなぐものはたゞ一本のシベリヤ鐵道のみであることを知らば、歐洲大戰當時のドイツの眞似の出來ないことは容易に首肯されるであらふ。そこでトハチエフスキー元帥は、東西兩方面で同時に獨立して戰ひ得る作戰計畫を立てた。ソ聯が急速に尨大な軍備擴張へと邁進したのはそのためである。

かくて右の作戰計畫の準備を完了した赤軍は、更に一歩を進めて攻勢的な態度をとるに至つた。即ち從來の攻勢防禦作戰をやめて、積極的に攻勢作戰に轉じ、敵の領土内で戰さをやらふといふことになつた。昨年秋ウクライナのキエフで行はれた赤軍大演習で、ウオロシーロフ國



防人民委員は、次のように豪語したのである。

「わが國の國境を侵さんとするものは、徹底的にこれを擊滅しなければならない、それには敵の領土内でこれを擊滅すべきである。」

軍備大擴張の結果、赤軍の作戰はこのように變つてきた。それだけ赤軍の將士は鼻高々になつた。そこにかれらの鼻柱をぐわーんと打ちくだいたものである、それは昨年暮に協結された日獨協定である。よもやと思つたものが實現したのである。つゞいて赤軍の將士を慓ひ上らせる事件が起つた、トハチエフスキー元帥以下赤軍首腦部の銃殺事件である。赤軍の内部は文字通りに動搖した。

日獨協定については、ロシヤは早くから神經を尖らし、それが果して實現するか否かをつきとめるため、あらゆる努力を試みつゝあつた。勿論その反面には、これを阻止せんとして、こゝにも亦異常な努力を試みたのだ。しかるにいよ〳〵それが實現されてみると、赤軍首腦部の豪語する、

「われ等は東西兩方面に於て、獨立して作戰し得る準備あり」

との高言は今一應吟味されねばならなくなつた。況んやドイツも日本も陸軍の擴張に邁進しつゝあるをみては、ソ聯も更に陸軍擴張を以てこれに對抗するに非ずんば、東西兩方面の作戰は危殆に瀕するを覺つた。

換言すれば日獨協定は、ソ聯の東西兩方面に於ける新作戰計畫を、少くとも覆へしてしまつたのだ。これでは支那の懇望ありとしても、ソ聯はおいそれと日本とは戰へない。これが現在のソヴエット・ロシヤの狀態である。

しかしながらソ聯の日本に對する鬪志を挫いたものは、ひとり日獨協定のみではない。そこには赤軍首腦部の銃殺事件までも起つて、軍の內部を攪き亂した。

## (2) ソ聯は日本と戰はない

この銃殺事件を述ぶるには、勢ひその先驅となつた反革命陰謀事件を說かねばならない。

一九三四年十二月一日に、ソ聯の北方探題ともいふべきレーニングラード州の黨委員會書記キーロフが、レーニングラードのスモルニー會館で暗殺された。かれはスターリン後繼者の一人と目されるほどスターリンの信任を得てゐた。然るにこの暗殺の裏面には、ソ聯の現幹部に對する陰謀團體のあることが發覺したので、疾風迅雷的にこれ等の反革命分子を檢擧させた。

この檢擧の結果、嘗てはレーニンとともに共產黨の最高機關たる黨中央委員會政治局員であつたジノヴイエフ、カーメネフ等もこの事件に關係があることがわかり、その他のソ聯要人十四名とともに、國外にゐるトロツキーと連絡をとつて、現政權を轉覆せんとしたといふ理由で銃殺の刑に處せられた。これが所謂合同本部事件である。

ソ聯當局は、これを機會に反革命分子を一掃するに決し、苟くもトロツキー黨の臭ひのあるもの、又は現政權に對して異つた意見をもつものをどし〳〵と檢擧した。その結果ソ聯評論界の第一人者たるカール・ラデツク、元外務人民委員次長ソコリニコフ、元東支鐵道副理事長セレブリヤコフ等の逮捕となり、その大部分はこれ亦銃殺の刑に處せられた。これが所謂並行本部事件である。

この並行本部事件により、スターリン政權の國內肅淸工作は漸く本格的となつた。かれはゲペ・ウ長官のヤーゴダを手緩るしとしてその職を免じ、代ふるにエジョフを以てした。エジョ

フは辣腕と冷酷を以て知らるゝ人物である。果して彼は物すごいばかりの腕を揮ふて、ソ聯全土に檢擧の嵐を吹きまくつた。その結果かれの爲にソ聯の現職から抹殺され銃殺された要人は、數へきれないほどの多數に上つてゐる。

ソ聯全土に肅清の大斧をふるつたスターリンは、最早危惧すべき何ものもない。殘るは赤軍內の手入れのみである。かくてかれは遂にトロッキーの創建した赤軍の將軍連に手をつけた。齒には齒を以ての最後の手段に出たのである。

五月十一日赤軍幹部の大異動を皮切りに、トロッキー配下の精鋭トハチエフスキー元帥等數名の高級將軍連が左遷されると、それから半ケ月後の六月一日には、赤軍の政治部長として活躍してゐたガマルニク大將が謎の自殺を遂げた。そして九日には、ヴオルガへ赴くト元帥が車中で捕縛された。

同十一日午前十一時、トハチエフスキー元帥以下、アキール、ウボレウイッチ、コルク、エーデマン、フエルドマン、ブリマコフ、ブートナの七將軍に關する叛逆事件の公判がソ聯最高裁判所特別軍事法廷で開かれ、ファシスト外國との通牒、諜報提供、赤軍の破壞、敗戰主義の



準備等、かず〳〵の罪狀が並べられて、翌十二日八將軍は何れも銃殺の刑に處せられた。

銃殺された八人の將星は、いづれも赤軍第一線の指導者ばかりである。例へばトハチエフスキー元帥の如きは、赤軍のナポレオンとまで謳はれたソ聯きつての戰術家で、東西兩方面に獨立して戰い得るよう、新たな作戰計畫をつくり上げた赤軍の功勞者である。エーデマン將軍は陸軍大學總長から革命軍事會議員に轉じ、最近では國防飛行化學協會長の顯職にあつた。又ヤキール大將は、永い間ウクライナ軍管區司令官として、ソ聯の生命線たる西部國境を護つてきた人である。その他日英兩國等の大使館武官をつとめ、極東赤軍副司令もやつたことのあるブートナ中將等、いづれも皆赤軍の最優秀な統帥者又は最高の軍事專門家であり、內亂時代から今日の大赤軍をつくり上げた生みの親たちである。

これ等赤軍の八巨頭に對する公表された斷罪の理由が事實であるか否かは、外部には一切わからない。恐らく右にあげた罪狀などは、表面を糊塗する或種の膏藥であらふ。然らば眞の理由は何か？　そこに大きな謎が潛んでゐるのである。

八巨頭の銃殺理由を外部で揣摩したものゝうちで、最も有力なりと思はるゝものは、ト元帥

以下の統帥權の擁立運動と、これに反對するスターリン派との確執ではないかと思はれる。

赤軍には純軍人と黨の政治部員との二つがある。前者は事實上の軍の指揮者であるが、軍の政治教育を擔當する政治委員は、實際にはこれ等の純軍人に對して、黨の監視者たる地位にある。赤軍の組織と建設がまだ幼稚であつた時代には、この兩者は仲よく調和していつたが、軍の組織が擴大され、編成や裝備がとゝのひ、赤軍の戰略や戰術も本ものになつてくると、政治部員の存在が邪魔になり、二重統帥即ち軍と黨との權力の二元的存在が問題になつてきた。なんとなれば、二重統帥は、平戰兩時を問はず、軍の價値を減ずることゝなるからである。そういふ理由から、一九三四年には軍事會議を中央と各軍管ともに廢止して、軍事第一主義が事實に於て行はるゝことになつた。赤軍内の純軍人派と黨の政治部員が睨み合ふようになつたのはそのためである。

この統帥權の單一化主義は、換言すれば、スターリン政權の支配に對して「左樣なら」をいつた形となつた。赤軍は正に共産黨より分離して獨立したのである。これはスターリン派のソヴェット國家の根本的な建前からいへば一種の挑戰である。蓋しソ聯に於ては、共産黨が全國家機構の心臟であり頭腦であるから、赤軍のみをこの黨の指導と統帥から獨立さすわけにはゆかないのである。



對外的危機が日一日と色濃くなるにつれて、赤軍をかゝる反共産黨、反スターリン的な指導に放任することは由々しき大問題である。いざ戰爭となつた場合、赤軍が政治部と非政治部に分れて抗爭するならば、赤軍全體は或は反スターリンの旗をかゝげて、スターリン政權に挑戰してくるかも知れない――スターリン派はかく危惧したのである。

一方革命以來新たに軍籍に投じ、新式の兵學と新式の教育をうけた新將校の多數も、漸次に赤軍の中樞部へと累進して來たので、今日赤軍を指導しつゝある舊將校がなくとも、赤軍を指導することは出來ると、スターリン派は考へたに違ひない。これはスターリン一派が、赤軍内の舊將校を逐次に罷免乃至は隱退させた一事をみてもわかる。

たま〳〵合同本部事件や並行本部事件が起つて、國内に反スターリン派の隱謀があることがわかると、スターリンはこの機に乘じて赤軍に對しても斷乎たる鐵槌を下ろさうと決心した。その結果がガマールニク將軍の自殺、次でトハチエフスキー元帥等八將星の銃殺となり、更に

日を追ふて擴大する肅軍の嵐となつたものであらふ。

銃殺までしなくても、他に方法がありそうなものだとは、何人も考へるところであらう。しかしそこがソ聯のソ聯たるところである。ソ聯は極端な獨裁主義である。かゝる極端な獨裁主義の國家では、生溫るいことは許されない。革命には妥協はあり得ないのだ。普通の國家なら馘首か懲戒免官で肅清が出來るものだが、ソ聯では銃殺そのものが他國に於ける馘首や懲戒免官に相當する。荒療治を斷行せざれば、事實上の肅清は行はれないからである。かの獨裁政治やことにソヴエット・ロシヤの政治を謳歌するものは、この點に深く留意することが極めて肝要である。

さて然らば赤軍將星の銃殺事件は、ソ聯及び外國に對して如何なる影響を與へるか？　これは(1)スターリン政權に及ぼすもの(2)赤軍自體に及ぼすもの(3)外國に與へるものの三方面から觀察することが出來る。

第一にスターリン政權に及ぼす影響については兩樣の見方がある。一つは、これによつて該政權は强化されるとみるものであり、他の一つはこれと反對の見方である。



赤軍巨頭銃殺事件は、これまでスターリン政權に對して一城塞をつくつてゐた赤軍に大斧鉞を加へ、とも角もスターリンの鐵腕に震へ上らしてしまつた。一體ロシヤ民族は極めて柔順な國民性をもち、極端な抑壓を加へられると、却てこれに服從する習慣がある。農奴制度が近代まで存在したのは、このロシヤ民族性の一端を物語るものである。それであるから、今度の斷乎たる政策は、ソ聯國民に非常な恐怖を與へ、そのためにスターリンの獨裁は、動搖を來すことなく、寧ろ反對に强化されてゆくと見ることも出來る。

だが恐怖政治——ことにスターリン等一黨の身邊を固めんとする恐怖政治——を行ふ獨裁制は人類の自然的希求にも反するものである。したがつて抑へてゐる壓力が弛むか、又は何等かの機會に獨裁制への反抗心がむく〳〵と起つてくれば、忽ちに蹶起してこれを覆かやそうとするのは自然の勢ひである。そういふ理由があるから、恐怖政治には對外戰爭は大の禁物である。ソ聯が今直ちに日本と戰ふ冒險を敢てせないのは、この方面からも首肯されるであらふ。

第二に巨頭銃殺事件によつて、赤軍は强くなるか弱くなるか、これも困難な問題である。けだし異分子を除いたことは赤軍の强化にちがいないが、人材を失い、赤軍の上下に、スターリ

ン政權に對する不信の觀念を植へつけたことは、決して赤軍を强化したものとはいへない。

スターリンは或は赤軍の巨頭連をバッサリやつたところで、後には俊秀な多數の將校もゐるから、何も心配することはない――と空嘯いてゐるかも知れない、しかしながら八巨頭の抹殺は、何といつても、赤軍にとり大なる損失たることは否み難き事實である。これ等の巨頭連は何れも赤軍育成の親であり、一流の赤軍統帥者、優秀なる軍事專門家として、惜しみてもあまりある人材の粒揃いであつた。殊に軍略と作戰上のトハチエフスキー元帥、極東通としてのブートナー將軍、軍事教育のエイデマン大將などは、赤軍としてはまことに得難い逸物であつたそれを一時に失つたのであるから、赤軍首腦部としては、にわかに寂寞を感じたことであらふ。況んや今後の大戰は規模ます〳〵廣大となり、大軍の統制は一層困難となるから、實戰の統帥者を必要とするのは以前の比ではない。銃殺された八巨星は、多くは應戰の士で、戰場に於ける經驗は到底後繼者の及ぶところでない。況んや異分子の掃蕩は尙もつゞくとすれば、そこに惡影響を生じ、赤軍自體が弱められたと見なければならない。

次に赤軍の將士中に、スターリン政權に對する不信の觀念を植つけられたことも、見逃す可



らざる事實であらふ。軍の强味は上長を信じ、これに心服するにある。しかるに今現政權に對する恐怖と不信の念が芽ぐまれたとすれば、それだけ軍の强味が減ることになる。

赤軍が、たとへ一時的にせよ、とも角も弱められ、しかも上下の間に不信の念が芽ぐまれてゐるとき、ロシヤが急に劍をとつて日本と戰ふ如きは、これ實に非常なる冒險である。ロシヤはこれを敢てするものとは、われ〳〵は斷じて信じない。

況んやスターリン政權に千鈞の重みを添へた五ケ年計畫による戰時體制は、一九四〇年頃にならねば强化されず、戰爭の準備は出來ないのである。トハチエフスキー元帥のたてた東西兩方面に於ける獨立作戰計畫は、勿論その後繼者によつて受けつがれるであらふ。しかしこれによつて日獨兩正面への作戰が、自信たつぷりとなるのは一九四〇年頃ではあるまいか。

以上述べた理由により、ロシヤは今直ちに支那を援けて日本と戰ふものとは、われ〳〵は考へない。

或はいふであらふ、ロシヤは國內の危機を利用してこれを國外に轉換し、外國と戰ふことによつて國內の統一をはかるであらふと。これもたしかに一つの見方である。しかしながらロシ

ヤが外國と戰ふためには、戰ひに勝つだけの見込みがなければならない。勝算がないのに戰いを敢てするならば、却て自らを滅ぼすことにならふ。

以前のロシヤならば、或はそういふ野心を起したかも知れない。しかしながら日獨協定後のロシヤは、うかとは動けない立場にある。その日獨兩國を敵にまわして、現在のロシヤに果して勝算があるか。かゝる理由により、われ〳〵は右の論者に與みするを得ない。

第三には外國に對する影響である。今度の事件が起つて以來、外國人の考へを一言にしていへば、今までのロシヤを買被つてゐた、といふ一語につきる。それだけソ聯に對する不信と不安の感を釀したことは何としても否定出來ない。その結果國際間に於けるソ聯の信用は墜ち、對獨同盟國たるフランスでさへ、ロシヤに對しては遽かに尻をまくるような態度をとりつゝある。

勿論ソ聯の政權が變つたわけではなく、その戰鬪力も將來どうなるか、今日はまだ未知數であるから、各國がソ聯に對して急に態度を變へることは危險と感ずるであらう。しかしながらそれにしても、各國の對ソ態度が從來よりも一層强硬となることだけはこれを豫言するを得よる。それだけ國際間に於けるソ聯の迫力は減つてくるのである。



これを要するに、ソ聯は日支事變を利用して支那に與みし、支那と聯合して日本と戰ふものとは思はれない。ロシヤのためには、日支を戰はせて就中日本の力を弱め、弱つた日本に對して、充實した力を以てこれに對するのが最賢明の策である、とロシヤ人は考へて居るかも知れない。

支那がロシヤからの兵力的援助を期待する如きは、寧ろ一片の空想に過ぎない。

## (3) ソ聯の狙ふところは抗日人民戰線

われ〳〵は前節に於て、ソヴエット・ロシヤは、今回の日支事變に關して、支那に兵力を以てする積極的な援助を與へ得ないことを述べてきた。然らばソ聯は殘された二つの策、卽ち

二、コミンテルンを通じて支那の共產軍を支援し、抗日人民戰線を張つて日本に對抗するか。

三、支那に對して好意的中立を守るか、

の中いづれをとるか？　これが次に起る問題である。

日ソの關係は不幸にも緊張し、いつかは兵馬の間に相見へねばならぬとすれば、ロシヤは今

直ちに日本と戰ひ得ない以上、日支事變を利用し、なんとかして日本の勢力を弱めることに腐心するは、寧ろ自然の成行であらふ。果して然らば日支事變に支那に對して中立を守り、兵器の供給等、消極的の態度で滿足するのは、ロシヤの狙ふ目的にかなわない。ゆへにロシヤは第三の中立的態度を捨てゝ、積極的に日本を弱めることを企圖するものと考へねばならぬ。しからばその方策は何か、第二のコミンテルンを通じて支那に働きかけ、抗日人民戰線を張つて日本に對抗することである。

勿論ロシヤは支那と協同して正式に日本と戰ひ得ないから、表面上は中立の態度を裝ひながら、第二の抗日人民戰線策に出づるであらふ。從つて支那側の要望に應じ、兵器軍需品等を支那側に供給することは無論のことである。

然らばソヴエット・ロシヤは、コミンテルンを通じ、日本に對して抗日人民戰線をつくつて對抗するため、如何なる方策をとるか？

ソ聯はこれまで己と同心異體なるコミンテルンを通じ、日滿兩國は勿論支那に對する赤化工作を企て、いろ〳〵な隱謀をめぐらしてきた。即ちかれ等は、創立以來十八年の永きに亘つて、



執拗に各國に共產黨を組織し、これを支部として、陰に陽にあらゆる宣傳陰謀を企て、國家組織を破壞し、社會制度を崩解せしめて、世界革命を成就せんと企てた。それは主として共產主義の思想宣傳と實踐的赤化工作の二形式に於て具體化され、時としては狂暴なるテロ行爲までも敢てして、世界の秩序と平和に非常な脅威を與へてきたのである。

然るに一九三五年七月より八月にかけて、モスクワで開かれた第七回大會では、コミンテルンは新たな戰術を採用することゝなり、俄かに活氣を呈してきた。即ちコミンテルンは從來の宗派的分裂鬪爭の舊戰術を一擲し、代ふるに反ファッショ的の人民戰線聯合政策を採用するに至つたのである。今その內容を述べると、歐米諸國に對しては、ファッショと對立關係にある社會民主主義者・自由主義者等一切の黨派を結合して、反ファッショの一大戰線を結成することにする。又支那の如き半植民地に於ては、赤化運動及び共產軍を强化し、全支に於ける反帝國主義運動と結合すべきである。特に日本帝國主義及び支那人の日本帝國主義の走狗を驅逐し、民族革命戰爭のスローガンの下に、統一抗日戰線を結成すべきであるといふのである。

この決議と相呼應して、支那ソヴエット共和國中央執行委員會は、有名なる『抗日及び救國

に關し支那全國民に告ぐ』といふ宣言を發し、全國民に對して、全支統一國防人民政府及び全支統一人民抗日軍の組織を提唱した。これが卽ち支那の抗日人民戰線である。

この抗日人民戰線は、日本に對する無抵抗主義を排擊し、國際聯盟に信頼するの非を叫び、全民衆が起つて抗日戰線に參加すべきを高調し、かくして全面的抗日鬪爭を展開せしめ、南京政府をして、再びソ聯容共政策への逆戻りを餘儀なくさせのは、前に述べた通りである。（第一編四の二參照）

この國民黨と共產黨との合作によつて、從來の支那共產黨は著しく變質してきた。卽ち抗日を第一とする武裝團體となり、抗日に關しては、南京政府の別働隊と化してしまつた。その結果共產黨は南京政權下に認められた存在となり、共產黨の首腦部も既に軍事委員會の隷下に入つてゐる。卽ち朱德、毛澤東等は蔣介石を委員長と呼び、西安事變の影に躍つた周恩來は、蔣介石の忠實なる幕僚のような顏をして、廬山會議に列席したともいはれてゐる。

さて日支戰爭が全面的に爆發した場合、國民黨軍と共產軍とは如何にして聯合戰線を張るか？共產軍の狙ふところは如何？





共產軍は正規の軍隊でない、かれ等は從來ゲリラ戰を以て中央軍を惱ましてきた。したがつて共產軍が中央軍とともに第一線に立つて、わが軍に當るなどは考へられない。必ずやその得意とするゲリラ戰術により、主として後方攪亂を企つるものと考へ得る。

このことについては、共產黨首頗毛澤東は、嘗て外人記者の間に對して次のように答へてゐる。

「廣濶の戰場に於て、われ等は遊擊作戰を用いて、必ずや日本の行動緩慢なるタンクを包圍することが出來ると思ふ。われ等の戰略は、最初から決戰を避けるにある。その目的とするところは、敵人の軍火を消耗せしめ、敵人の銳氣を消磨すれば足る。長期間の小接觸の間に、日本軍の銳氣は必ずや挫け、日本の經濟力は破產の憂目を見るであらふ。かくして最後の決戰的勝利は、必ずや中國に屬すること疑いなく、日本軍は驅逐さるゝに至るであらふ。」

この後方攪亂、兵站線の襲擊等こそ、かれ等の狙ふところであるのだ。

外敵に抵抗する場合、支那の武力は當然一個の統一された指揮下におかれなければならない。そうした場合、共產軍はその最高指揮機關に代表を參加せしめ、この最高機關の政治と軍事命